

ソ連の 反体制派たち

私が見た人権闘争



ビクター・シュパラー 藤田幸久訳 サイマル出版会

(著者紹介)

Victor Sparre

* ノルウェーの画家。ジャーナリスト、放送番組のコメンテーター。

* 「暗闇を呪うより一本のロウソクに灯を」と、画一主義と闘う自由な精神をもつ個人の心の連帯を呼びかけ、幅広く人権問題に取り組んでいる。ソ連の反体制活動家たちの友人として、サハロフのノーベル平和賞受賞に尽力するなど、MRA(Moral Re-Armament=道徳再武装運動)をはじめ、その精力的な活動は広く知られている。

* 1919年生まれ。オスロで芸術を学び、第二次大戦時にはナチス・ドイツ軍占領下のノルウェーでレジスタンス運動に加わった。

日本にとってのソ連

森本良男著 / 不気味な隣人がよくわかる11章 ¥1,300

シベリア捕虜収容所

若槻泰雄著 / 初めての抑留包括記録 ¥1,100 ¥1,300

ポーランドの道

工藤・筑紫著 / 社会主義・虚偽から真実へ ¥1,500

チトー・独自の道

シタウブリンゲル著 / スターリン主義との闘い ¥1,300

膨脹と共存

ソ連の対外政策の歴史

ウラム著 / ソウエト外交史の名著全3巻 ¥1,000 ¥1,200 ¥1,400

装幀・多田 進

カバー印刷・図書印刷

サイマル出版会のめざすもの

*サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。

*思えば、人類は平和のために戦争を続け、世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらしたが、情報の同時性はまた単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。

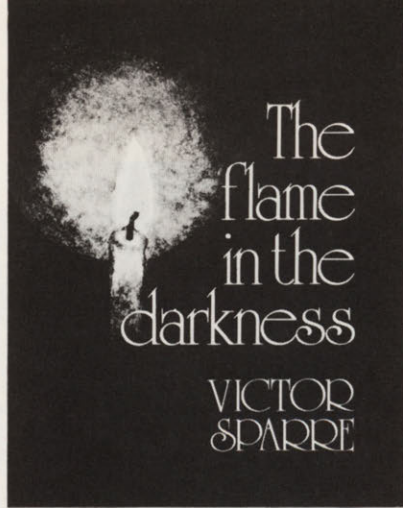
*われわれは、こうした新たな誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようとするものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって、人間の条件を回復し、世界が平和に一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようとするものである。

*このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

サイマル・インターナショナルは、サイマル出版会の姉妹会社です。わが国でもっとも経験豊かな国際会議オーガナイザーとして、その企画運営、通訳、翻訳、その他のサービス幅広く提供しています。

併設の〈サイマル・アカデミー〉は、会議通訳者、国際人養成と英語教育を行っています。

保存用



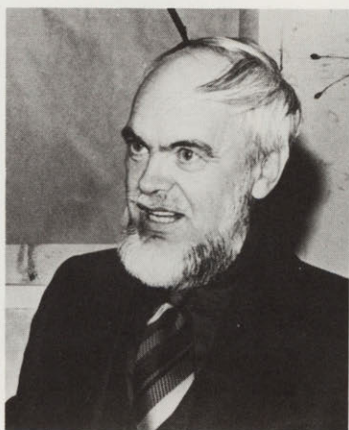
私が見た人権闘争

ソ連の反体制派たち

ビクター・シュパラー 著

藤田幸久 訳

サイマル出版会



The Flame in the Darkness

by Victor Sparre

〈ソ連の反体制派たち〉

Copyright © 1979 by Victor Sparre

日本語翻訳権・サイマル出版会所有／無断転載を禁ず
THE SIMUL PRESS, INC., Tokyo, Japan

(発行所) 株式会社 サイマル出版会

編集・発行人 田村勝夫

東京都港区赤坂1-8-10 (〒107)

電話(03)582-4221(代)／振替・東京4-52090番

印刷・製本 図書印刷株式会社

1981年8月 Printed in Japan <0398-300529-2703>

自由な個人の連帯を——日本の読者へ

私の国ノルウェーと日本は、勢力圏を拡大し続けているソ連の両脇に位置しています。

両国とも形態こそ違え、他国家の影響下に身を委ねる体験をしています。われわれは第二次大戦中でしたし、日本は戦後でした。今日、両国ともそれぞれにあった民主主義を基盤として国家を形成していますが、われわれをとりまく世界には全体主義政権が勢いをえているのが現状です。

私は、ソ連内部で民主主義の活動を勇気をもって推進している人びとに巡り合い、それがきっかけでこの本を書きました。

私たちの信奉する民主主義という自由を基盤とした制度は、深奥の良心に従って自由に考え、行動する個人を必要としています。画一主義では駄目なのです。自由に考えることのできる個人、そうした民主主義者の欠如した民主主義は似而非なるもので、本物ではありません。

ソ連内の「独立した自主的な思考者」から多くのことを学べると思います。

未来の世界を形づくっていく上で、日本は大きな役割を果たすと私は信じているので、この本を日本の方々に読んでいただく機会が与えられたことを心から感謝しています。

(オスロにて)

ビクター・シュパラー

ソ連反体制派の友人シュパラー——訳者まえがき

本書は、ノルウェーの著名な画家であるとともに、ソルジェニーツィンのソ連出国を助け、サハロフのノーベル賞受賞に尽力し、そして数多くのソ連反体制活動家の友人として知られるビクター・シュパラーの *The Flame in the Darkness: The Russian Human Rights Struggle—as I have seen it by Victor Sparre* (Grosvenor Books, London, 1979, 80) 第二版からの完訳である。

これは、ソ連における人権運動の解説書、あるいは反体制運動擁護の政治的プロパガンダの書ではない。一人の西側の芸術家とソ連反体制活動家たちとの生きた連帯の記録である。

一人の画家にすぎなかったシュパラーが、ソ連の芸術家にノルウエーの芸術を紹介するといふ、ふとしたきっかけから、ソ連の反体制派に関心を抱きはじめる。雄弁な政治家でも人権活動家でも、また国際ジャーナリストでもなかった彼が、絵筆をしばらく置いてまで反体制派を助けていく過程は、人と人との「かかわりと連帯」の真の意味を私たちに教えてくれる。芸術家である著者の目は、反体制運動のより人間的意味を問ひかけ、彼らの生きかたと提起している問題を鋭くとらえている。

シュパラーはソルジェニーツィンにとって、西側で心を許した最初の一人であった。一九七四年にソ連を追放された彼は、ほどなくノルウエーを訪れ、シュパラー宅に「友人」として滞在する。シュパラーにとってソルジェニーツィンは、一見こわもてに見える彼をしてシヤイでひょうきんな一面をも垣間見せるほど、気おけない人となっていた。二人で縫いぐるみの人形をかぶって取材に群がるジャーナリストにおどけてみせるしぐさや、何かに取りつかれたように寸暇を惜しんで取材のメモをとる、気まじめなソルジェニーツィンなど、共に生活した人でなければわからないこの偉大な作家の姿が、芸術家の目をおして印象的に描かれている。

また、サハロフのアパートへ身をよじ曲げるようにして入り込むシュパラーの訪問は、ここがソ連反体制運動のメッカとして、いかに重要であるかを認識させてくれる。そして、一

見ひ弱なインテリ風に見えるサハロフの強靱な粘り強さが、そしてそれを支えるエレーナ夫人の献身ぶりが、鮮明に映し出されている。

多くの人がサハロフ夫妻から何かを求めて面会にやってくる中で、シュバラ一だけはちがっていた。彼は二人の眞の闘いの意味を理解し、その重荷をいっしょに担おうと駆けつけた連帯の友人であつたのだ。このアパートへの訪問が彼自身に“第二の変革”をもたらし、以後の人生をソ連の人権闘争のために捧げる決心に至つたと彼は述懐する。実際彼は、後にサハロフのノーベル平和賞受賞に向けてめざましい働きを示した。

シュバラ一は、このほか多くの反体制運動者の信頼を得るにいたつた。それぞれが個性の強い人びとで相互に必ずしもうまくいかないことも多々あるが、いかなる人でも、人間そのものが、そして人間の解放そのものが関心の的であるシュバラ一とは、共通の基盤をもつことができた。

以前は、共闘することも難しかった反体制知識人と反体制キリスト教者との連携も、やつと軌道に乗るようになってきたが、それにはサハロフのアパートやシュバラ一の家などが大きな役割を果している。実際、過去七年間に西側の地を踏んだことのあるソ連反体制運動者のほとんどの名が、シュバラ一家の芳名帳に記されているのである。

*

著者シュッパラーは一九一九年に生まれ、ノルウェーのベルゲンで育った。父親はその市営図書館員であった。シュッパラーはオスロで芸術を学び、一九四〇年にはドイツ軍占領下で一兵士として従軍、負傷し、以後はレジスタンスで活躍している。

芸術家としての彼は、一九五五年、中世風のスタバンガー大聖堂の窓の現代的部分を取り換える国営デザイン・コンクールに入賞、続いて、多くの教会からステンドグラスの注文を受けるにいたった。その中には、今世紀最大のものの一つに数えられるトロムソの北極大聖堂（アーキテイク・キャセドラル）のステンドグラスがある。画家としての彼の作品は非常に多く、主要な作品はノルウェー国立美術館をはじめ、各地の美術館に収められている。

社会活動をはじめからの彼は、MRA (Moral Re-arming = 道徳再武装運動) の活動を通じて人権問題に取り組み、前述のソ連反体制運動者たちとの親交はもとより、ジャーナリストおよび放送番組のコメンテーターとしての名声も高くなり、その疲れを知らぬキャンペーンで、ノルウェーのすべての家庭に知られるようになっていく。

*

シュッパラーが自らの体験をもとに「反体制者群像」を描きだすとき、これらの闘士の、そしてソ連社会に重く、深く垂れこめているのが、原題にある「暗闇」である。しかし「人権」という側面からそれを見ると、それは何もソ連にだけ限られたものではない。

「暗闇」はしばしば「狂気」を伴う。ナチスによる六百万人におよぶユダヤ人大虐殺や、三千万とも五千万ともいわれるスターリンの粛清による悲劇は、人類の長い歴史の中では、つい最近の出来事である。

また、一九七五年以降に虐殺されたカンボジア人は二百万人を越えるともいわれる。瘁猛なワニのいる湖に投げ込まれたり、妊産婦が兵士の竹ヤリで突き殺されるといった惨劇も知られている。危険を冒して故国から脱出をはかるポート・ピープルは、今日もなお絶えないのである。

「狂気」を伴わずとも、「暗闇」は全体主義、画一主義、物質主義、あるいは民族主義や国粹主義の名のもとにさえ、私たちの生活の中に忍び寄り、人権を脅かす。実際それは、社会体制や政治体制にかかわりなく、個人の意思が歪められ、内なる自由を喪失するときに現われるのだ。悲劇は、武力による他国の侵入よりも、同一民族、同一国家のなかでより多く起こっているのである。

*

「暗闇を呪うよりも一本のロウソクに灯を！」(It's better to light one candle than to curse the darkness) という歌を初めて私が聴いたのは、一九七五年、スイスにあるMRAの国際会議場であった。世知辛い世の中に嫌気のさした青年が、恐れを捨てて立ちあがることをテーマに

した小気味よい歌であった。国・人種・立場を超え、人びとが心の扉を開け合う交流がここにはあり、「世界を変える」ために「まず自分自身が変わること」を実践している青年たちがいた。自己変革（精神革命）を体験した人が他人の変革を呼びおこし、ついには何百万もの人びとに連鎖反応を及ぼす。著者シュペラーも、はじめはその一人であったのである。

「一隈を照らすものは世界を照らす」（日円）という言葉がある。シュペラーが著わした本書は、その点灯された炎をより強く、より広汎に広げるためのものであり、ここに描かれていることは決して対岸の特殊な出来事ではなく、私たち一人ひとりの“自由”にかかわる体験であり、問題提起なのではないだろうか。

私にとって本書の翻訳は、外国語を日本語に訳すというより、むしろ世界を照らす“灯”との出会いであった。その意味をお汲みいただき、日本語版の出版を快諾、即決くださったサイマル出版会の田村勝夫社長には心からお礼申し上げたい。また同出版会の諏訪部大太郎・市橋秀敏両氏のご協力に感謝したい。なお、訳者注は〔 〕で本文中に挿入した。

訳出を思いついた時から激励をいただいたケンブリッジ・リサーチ研究所の今井正明所長、翻訳の上でご指導いただいた相馬雪香、弁本美苗両氏にもお礼申し上げます。

（一九八一年七月）

藤田 幸久

かけがえのない友情と支援

ウラジーミル・マクシモフ

(作家、ソ連反体制活動家)

私が初めてビクター・シュバラに会ったのは、一九七三年、科学者アンドレイ・サハロフ博士のモスクワの家であった。

ちょうど、ソ連での自由の闘いが行きづまりを見せていた。官権は自由のために闘う人びとに、ありとあらゆる圧力をかけていたときだった。彼は温かさと包容力にあふれ、叡知と若い情熱とを同時に持ちあわせた賢い若者のようであった。このような人がいる限り、抑圧に苦しんでいる人びとは心丈夫なのである。

そのとき以来、ビクターはソ連の自由のための闘いとその闘士たちに、絶え間ない支援を惜しみなく与えてくれた。ソ連の専制政治から逃れてくる亡命者たちにとって、彼の家は友情と憩いの場になっている。闘争的ときさえいえるほど積極的に、彼はわれわれに同情と具体的な支援を与えてくれている。それを、われわれは限りなく意義深いものとして高く評価しているのである。

(パリにて、一九七八年一二月)

第二版へのノート

本書第一版の出版直後、ソ連の政治犯収容所に長期の刑で服役していた五人の反体制者と、アメリカで入獄していた二人のソ連スパイとが、鳴物入りで交換された。

五人のうち三人は、本書に登場する、アレキサンダー・ギンスバーグ、エドワード・クズネツォフ、それにジョージ・ビンス（非公認バプテスト^{II}浸礼教会員^{II}の指導者）である。

他の二人は、クズネツォフとともに飛行機を盗んでスウェーデンに亡命しようとしたパイロットのマーク・デムシッツ、ウクライナの文化的民族的独立闘争の指導者で歴史家のバレンティン・モロツツである。（著者）

目次

ソ連の反体制派たち

2部・検閲を打破する反体制派の命者たち

1953年10月の検閲

1954年10月の検閲

1955年10月の検閲

1部・ソ連の反体制派の闘争の中

1956年10月の検閲

1957年10月の検閲

1958年10月の検閲

1959年10月の検閲

1960年10月の検閲

1961年10月の検閲

1962年10月の検閲

1963年10月の検閲

1964年10月の検閲

1965年10月の検閲

1966年10月の検閲

1967年10月の検閲

1968年10月の検閲

1969年10月の検閲

1970年10月の検閲

自由な個人の連帯を——日本の読者へ

ソ連反体制派の友人シュパラ——訳者まえがき

かけがえない友情と支援——マクシモフ

1部・モスクワの暗闇の中で

- | | | |
|---|-----------|----|
| 1 | 扉に残された署名 | 3 |
| 2 | モスクワの聖像 | 15 |
| 3 | サハロフ家の一室で | 32 |

2部・松明^{たいまつ}をかかげた亡命者たち

- 1 橋の上に立つソルジェニーツィン……………57
- 2 フィヨルドを渡る詩……………92
- 3 受賞への闘い……………106
- 4 反体制活動家たちの悲劇……………124
- 5 闘いは続く……………142

3部・芸術と信仰と自由を

- 1 芸術は最後の砦……………165
- 2 心の革命……………176
- 3 画一主義を焼きつくす炎……………199
- 4 内なる自由を……………209

1部

モスクワの暗闇の中で

1 戸棚の扉に残された署名

私の娘、ベスレモイの戸棚の扉には、ロシア文字で名前が書かれている。どれもソ連の反体制者による署名である。

ちょうど六年ほど前から、私の家を次々と訪ねてくるこうした人びとから彼女が署名をもらっていたのである。訪問客に彼女が収集したものを見せるときには、とくにその中から四つか五つの署名を挙げることにしている。

▽アンドレイ・シニャフスキー／小説家。一九六五年の彼の逮捕が、反体制運動の端緒となったといわれている。

▽アレキサンダー・ガリーチ／ときたまプレイボーイぶりを発揮する劇作家。彼のレジスタ

ンスと自由を歌ったバラードは、今日、ソ連全土の若者に歌われている。

▽レオニード・プリューシチ／正気の彼は、一九七三―七六年の間、精神病院で飲まされた薬によって低能にさせられてしまった。

▽ウラジミール・ブコフスキー／ソ連の精神医学の濫用をあばき、あわや殉教者になりかけるところだった。

▽エレナ・サハロフ／夫のノーベル賞受賞のため、オスロに來た際に私の家に立ち寄ってくれた。

これらの多彩な人びとは、信ずるところを行なって、政治権力に屈せずして迫害を受けたという点で一致している。

ソルジェニーツインの署名はこの中にはない。しかしベスレモイは、ある寒い朝、オスロ駅で彼と握手を交わしている。労役で堅くなつた手であつた。一九七四年三月、彼がソ連から追放されてからちやうど二週間後のことであつた。彼と私は、アフテンボッシュテンのペル・エジル・ヘッゲとともに南ノルウェーを駆け足で回つたところであつた。彼が住む家を探すためであつた。

この旅行で、ソルジェニーツインがたまたま私に尋ねたことがこの本のもとになっている。「何が、君のように多忙なノルウェーの画家を、私の国の自由のための不屈の闘士に仕立て

上げたのか」と彼はきいた。

私は即座に、「信仰は、もつとも苦しんだ人びとの中から甦ると信じるからです」と答えると、彼は私の腕をつかみ、「もうそれ以上いわなくていい」といった。

もちろん、これは部分的な答えでしかなく、答えの全容はこの本の先を待たねばならない。ここでは、私の興味を喚起した二つのことについて触れておきたい。

その一つは、政治家や労働者よりも芸術家や科学者が積極的に動いているらしいということ。第二番目は、居心地のよい西側にいるわれわれよりも、ソ連の牢獄や政治犯収容所の中で、こうした知識人たちは、よりたやすく心の自由を見出したという不思議なパラドックスである。

芸術家の家系に生まれた芸術家の私はまた、心の自由こそ人生でもっともかけがえないものだと思っている者の一人であるため、ためらうことなく、これから語る冒険へと引き寄せられていった。まずはじめに、自らを「同ぜぬ者たち」と称する人びとの反体制運動の発端について簡単に述べてみたい。

恐怖政治の積重なり

スターリンの恐怖政治が絶頂にあった一九三〇年代のころ、アメリカのジャーナリストの

ラルフ・バーンスがソ連秘密警察の一人に、ソ連ではどうして無実の人が逮捕されるのかと尋ねた。

そのソ連人はこの質問のナイーブさに呆気にとられ、涙が出るまで笑いこけたという話がある。罪人だけを逮捕していたならば、他の人びとは安全だと思い、反逆の機が熟してしまふ、と説明したという。これこそまさに歴代の恐怖政治の原理をついている。

一九三五―四五年の十年間、世界はヒトラーとスターリンの前代未聞の人間虐殺を目のあたりに見た。

一九四五年、連合軍の手によってナチのユダヤ人大量殺害のガス室などが明るみに出るや、世界はこれを糾弾してやまなかつた。それに反して、実際に何百万の人びとを死に追いやるように考案されたスターリンの死の収容所については、最低なされてしかるべき非難もされていない。また、その他にも何百万というソビエト市民が殺戮されたのである。

『収容所群島』の中で、ソルジェニツィンが指摘しているように、後頭部からピストルで撃たれるというのが通常のやり方であった。帝政ロシアで一八七六年から一九〇五年の間に、死刑は四百八十六回執行された。年間に平均十七回である。一九〇五年から一九〇八年の混乱期には二千二百人が処刑されている。一カ月に四十五人である。やがて死刑は皇帝によって廃止されたが、一九一八年再びレーニンによって行なわれはじめた。

それ以来、処刑の数字はうなぎ上りに増えていった。そして、スターリン時代の一九三六年にクライマックスに達し、百万人のソビエト市民が銃殺された。その半数は犯罪者、半数は政治犯としてであった。それに加え、ヨーロッパ最良の穀倉地帯であった地域で、しばしば起こった飢饉による犠牲者もあつた。イギリス人のソ連研究家、ロバート・コンクウェストによると、スターリンに関連した死者の合計は三千万人から五千万人の間である。

雪どけと反体制運動の芽

かの有名な一九五六年のソ連共産党第二十回大会で、フルシチョフは非スターリン化を宣言し、ソ連の恐怖政治は部分的に暴露された。シベリアの収容所から数百万人も囚人が解放され故郷への長い旅を始めたのだが、彼らに渡されたのは一枚の紙切れだけで、それには処刑の根拠がなかったとのみ書かれていた。その一行の中に、やつれたとはいえ風格を持ったアレキサンダー・ソルジェニーツインがいた。ちょうど八年の刑を終えたところであつた。

自由化は慎重に進められたが、フルシチョフは、けつして光かがやく天使ではなかつた。彼の緩和策も、ノーベル賞受賞者で病弱な小説家ボリス・パステルナークに対する迫害を止めさせるには至らず、死に追いやっている。そればかりか、フルシチョフは政権に就くや否や、信仰を持った人たちの迫害を強化し、その上、体制に反抗する人たちを精神病院に送り

込む方法を案出した。

士気昂揚に貢献するという理由で、スターリンは戦争中も教会を残させたが、その政策は戦後も続けられた。しかし、フルシチョフが政権についた最初の五年間に一万一千五百の教会が破壊されるか、倉庫や仕事場に変えられてしまった。これはソ連全土の教会の半数に相当する。多くのキリスト教徒が収容所に送り込まれるので、とくに激しく抵抗をした改革派バプテスマ派「浸礼派。幼児洗礼を否定し、自覚的信仰告白により全身を清める浸礼を主張。ソ連の信者推定五〇万人」では、教会のメンバーに逮捕や投獄に際しての心構えを教えたほどだった。キリスト教徒の逮捕は今でもそうであるが、鉄棒で武装されたKGB(国家保安委員会)の猛者が、手加減を加えずに乱暴に行なうことが多い。

ソルジェニーツィンは、巷のわずらわしさから逃れ、リヤザンという町に住みつき、そこ
の高校の数学教師になった。彼はすでに作家としての活動をはじめていたが、彼の著作が活
字になることはあるまいと思っていたようだ。ところが、一九六一年、かつての囚人仲間、
レブ・コペレフがソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィッチの一日』を匿名で文芸
雑誌ノーブイ・ミール(新世界)に送った。

編集長のアレキサンダー・トバルドフスキーは、偉大な作家の誕生をすぐさま感じとった。
この本は、ソビエト体制全般とはいわなくとも、政権を告発するものであったので、出版に

先立ち、最高レベルでの承認が求められ、フルンチヨフ自身が承諾を与えた。

この例にもあるように、フルンチヨフの部分的自由化が果して戦術的なものか、それとも緩和の風潮を求める真摯な願望からきているのかは誰にもわからなかった。いずれにせよ、長年にわたって築きあげられた氷壁の一部が融け、ソ連においても初めて反体制運動が可能になったのである。

—— したたかになった反体制運動

運動は、知識人の間でもっとも顕著であった。この時期には何百人という知識人がより多くの自由を求める術を何かと見出していった。アピールや宣言に署名することも、しばしば行なわれた。こうした戦術の多くは、数学者で詩人のアレキサンダー・エセニン・ボルピンという男に負うところが多い。

彼は現在アメリカの大学で講義をしているが、精神病治療を強いられた反体制者の最初の一人である。彼は嘘をつけないという特異な資質をもっている。病院の他の「患者たち」は薬を適当に隠したりしていたが、「あがいてもどうしようもない」といいながら、彼は即座に与えられた分を飲み込んでしまうのだった。おそらく薬をどうしたかを聞かれれば、医者に本当のことをいわざるをえなかったのだろう。

ボルピンの天才的発案は、ソビエト連邦法に厳格に従って生きることを主張したことである。憲法では数多くの人権が保障されていたのである。反体制の人たちはこの権利をはっきりと公に訴えることを学んだ。しかも、自分の名前と住所とを正確に記すことを忘れなかった。

フルシチョフが権力をもったとき、おりしも史上最年少のソビエト・アカデミー会員アンドレイ・サハロフが水素爆弾についての研究をしていて、国の指導者からも最高の尊敬を受けていた。しかし、アメリカのオッペンハイマーと同じように彼も核兵器を作ることの道義性に疑いをいだいていた。

一九六二年、ついに彼は、旧知の間柄のフルシチョフに水爆実験を見合せるよう申し入れた。フルシチョフはこのことを閣僚会議に報告し、その結果サハロフは、政権の批判者として扱われることとなった。それから間もなくサハロフは、スターリンが目をかけていた似而非科学者ルイセンコの弟子である二人の生物学者を、ソビエト科学アカデミーから閉めだすことに成功した。

当時、スターリン派が再び台頭しつつあったので、それは大胆なことであった。スターリン主義者で、後に外務次官を務めた共産党中央委員会思想委員長のレオニード・イリチヨフは、サハロフが発言したときに同席していた。

「あの生意気な若僧は誰だ」と、彼はアカデミーの会長に尋ねた。

「ソ連の水素爆弾の発明者、アカデミー会員サハロフで、ソビエト労働者の英雄に三度もなつた男である」と会長は答えた。

このときサハロフは、非常に危険な敵を作ってしまったのだった。その後間もなくサハロフが仕事場に入ろうとしたとき、門は固く閉ざされていた。

このころ、ひとたび融け出した水が奔流となって、一度にすべてを押し流すことを恐れてか、政府は再びしめつけ政策に転じた。一九六六年のことであった。つづく数年間は、それまで批判的な声明に名を連ねた知識人は、みな被害をこうむることになった。職場を失ったり、住居の権利を剝奪されたり、子供の教育が妨害されたりした。

しめつけは厳しさを伴ってきた。シニャフスキーとその友人である作家のユーリー・ダニエルは、出版のために原稿を海外に送ったというかどで逮捕され、収容所に送られた。このことで、どちらかというも臆病な部類に属する人たちは恐れ、おとなしくなったが、反面、多くの人たちが自由の闘士にと変えた。

その直後、アレキサンダー・ギンスバークとユーリー・ガランスコフの二人の作家が、その裁判に関する報告書を発表し、逮捕された。そして、シニャフスキーやダニエルと同じように、長期間にわたる重労働の判決をうけた。この事件が発端となって連鎖反応が起こった。

レオニード・プリュージチが、ギンスバーグとガランスコフの裁判に公開の抗議書を出した。逮捕こそされなかったものの、彼の活動は封じられてしまった。

——真理を愛した人びと

二年後の一九六八年、ソ連のチェコスロバキア侵入は、ソ連国内のリベラルな人びとに衝撃を与え、反体制派の抵抗の決意は強化された。七人の知識人が、赤い広場での座り込みデモに参加した。ただちにKGBによって散らされ、七人全員が殴打され、逮捕された。二通りの判決がいろいろわたされた。刑務所送りと政治犯収容所行きとである。数年後、その一人で数学者のビクター・ファインバーグが、ちょうど西側に追放された直後に私は彼に会った。彼が笑うと、門歯がないのがわかる。これはデモ当時のできごとを物語っていた。

同じ年、一介の教員として働いていたサハロフは『進歩・共存・知的自由に関する考察』と題する宣言文を出版し、政府がよりリベラルな変革を行なうよう訴えた。ソ連科学界で著名な人のものであったため、それは東西両陣営で大きなセンセーションをまき起こした。国家権力は、いろいろと難題をつけて彼の仕事を妨害する手を打ってきた。

サハロフの方は、水素爆弾の研究中に得た十万ポンドをガン病院に寄付することで、核兵器に対する抗議と政府のあり方に対する反対とを表明した。このころから、彼はますます被

迫害者の保護に傾注するようになった。彼は同志とともに人権委員会を設立した。これは現在も継続的に活動している。

一九六九年、ソルジェニーツィンの作品が、パリのYMCAによって出版され、彼はソビエト作家協会から除名された。このことは、彼の著作が今後ソ連国内で出版されえないことを意味した。と同時に、もう一つの危険をもたらした。それはつまり、一九三八年スターリンの収容所で死んだ詩人オシップ・マンデルシュタムが、かつて述べていることである。

「わが国の政府ほど、文学を真剣に考える国はあるまい。そんな国に住んでいることを幸いに思うべきだ。著作したというだけのことでは殺されるのは、わが国だけである」

いかに豪胆なソルジェニーツィンも、たとえ権力に屈することはないとはいえ、少なくとも作品を海外に送ることをやめ、国内で沈黙を守るであろうと思われた。ところが彼は真向から反発した。作家協会で、彼の追放に従順に投票した人たちにあてて、かの有名な手紙を送った。それは次の言葉で結んであった。

「夜が明けたことを疑わない君たちよ、重いカーテンを開けて外を見るがいい」

この時期に、ソ連でソルジェニーツィンをかばうことは大変勇気のいることであったが、彼はつねに支援されていた。エレーナ・サハロフが、ある有名な作家と路上で会ったときのことを語ってくれる。あまりにも幸せそうな顔をしていたので、恋をしているにちがいない

と思ったほどだった。

「彼の目は輝いていました」と彼女はいう。

それからまもなく彼女は、彼がソルジェニーツィンの追放に反対して公に抗議をしたことを聞いた。

「確かにあの人は恋をしていたのでした」とエレーナ・サハロフはいう。

「真理を愛していたのです」

これと同じころ、私がソ連以外の国でも何かできることはないかと思いはじめた。

2 モスクワの聖像

私は、ソルジェニーツィンを助けるために何かしなければ、という思いに追いかけられていた。何もしなければ、私は裏切り者になると思われた。寝られぬ思いの幾夜を過したが、突如ある考えが浮かんだ。

ノルウェーには、芸術の世界で目ざましい活躍をした人びとのためにレジスタンス栄誉賞というのがある。最初はノルウェーの愛国詩人、ヘンリック・ベルゲランドに与えられたものである。第二次大戦後は、ナチスに対する抵抗を鼓吹することに貢献した詩の作者、マルクス主義詩人のアーノルフ・オーバランドに与えられた。

オーバランドの死後、誰にもその賞が与えられなかったことに気がつき、それをソルジェ

ニーツィンに与えたらと考えた。私はとび起きて「ノルウェー人民へのアピール」を書いた。「ソルジェニーツィンは、全人類に属する人だ」と私は書いたのである。彼の母国が彼の言論を封じるなら、小国とはいえ、ノルウェーが彼が著作活動を維持できるための避難地となれないものだろうか。

——ソルジェニーツィンを救え

朝になるのを待って、この一文をオスロの日刊紙モルゲンブラデットの文芸欄の編集長エリック・エーゲランドにもっていった。彼はただちに社説でこれを支援し、私にいくつか署名をとってくるよう提案した。ある画家と二人の作家が共鳴してくれた。

このこと自体は、それ以上の発展を見なかったが、その同じ年にソルジェニーツィンがノーベル賞をうけることに役立ったかもしれないのである。ソルジェニーツィンの受賞のためにスウェーデン人と接触をとった科かで、ソ連を追放されたモスクワのジャーナリスト、ベル・エジル・ヘッゲは、ソルジェニーツィンがどんなにわれわれのこの提案を評価したかを私に伝えてくれた。ノーベル賞受賞のスピーチでも彼自身がそのことに触れている。

「私が作家協会から除名され、もっとも危険にさらされた数週間により悪質な迫害から私を守ってくれる、厚い壁が世界の著名な作家たちによって築かれた。とくにノルウェーの作家

や画家たちが、故国から追放されそうな私に雨風をしのぐ家を準備してくれたのである」と。

この演説の中でソルジェニーツィンは知的自由のため、芸術家や政治家による超党派の委員会を提案している。彼は、まっ先に彼の同僚である芸術家に語りかけた。「友人諸君」、彼は素朴さと率直さで語りかける。

「もし、われわれに何らかの価値があるならば、互いに助け合おうではないか」

これがきっかけとなって、私は芸術と科学にたずさわる人びとで自由委員会を作ろうと思つた。まず私と友人の二人が集まつた。次に五人になり、結局は十九人になつた。その中にはノルウェー最大の現代詩人クラエス・ギルもいた。われわれは、知的自由のための連帯委員会を結成した。最初にしたことは、ソ連の文化大臣、フルツェバ女史へソルジェニーツィンの取り扱いについての手紙を書くことであつた。クラエスが英語で草稿をかいた。皮肉な調子で、辛辣きわまるものであつた。

ある朝早く、仲間の何人かが彼の家を訪れた。ベルゲンから特別にとり寄せた好物のハンサのジンジャビールをご馳走になりながら、われわれは、彼が立ち上がって完璧なオックスフォード英語でメッセージを朗読するのをきいた。大仰にジェスチャーよろしくやっているうちに、着ていたいささか大きすぎるガウンがずり落ちて下着姿になってしまった。誰もそんなことは気になかなかつた。腕を大きく振ると、ガウンは無事彼の両肩におさまつた。佇

立した彼は、文化と威厳の権化のような巨大な姿をしていた。

スカンジナビアの大きな劇場で、最近俳優として名声を博した人がこうした芝居じみたことをするのは驚くことではなかった。私はこの多面性をもった放浪詩人と、彼が糾弾しようとしている相手、つまりソ連の文化の独裁者とを比べてみざるをえなかった。それは精神と剥き出しの力との対立であった。

繊維労働者のフルツェバ女史は、ソ連の文化生活にわたる絶対的権力を与えられるまではソ連の文学作品など、ほとんどひとといたことはなかった。彼女と芸術家たちが共有できるものは、ウォッカを好むということ以外に何もなかったであろう。フルツェバ女史はわれわれの送った抗議文には、何ら応えなかった。しかしクラエスは、結果、それも目先の結果に引きずられるべきではないことを強調するのだった。そして真理が攻撃されるときには、声をあげなくてはいけないのだと。彼は、ロシア人と同じくらい熱情的な性格の持主だった。

続いてわれわれは、トルコの首相に電報を打ち、二人の教授に課せられた十年の刑に抗議した。一人は、出版した教科書が破壊的だととられ、もう一人は、法廷で単に彼を弁護したにすぎなかった。

私は、次にサハロフをノーベル平和賞の受賞者として推薦することを望んだ。このことはすでに数カ月前の一九七三年三月、モスクワから世界の報道界へ公開の書簡が送られた中で

提案されていた。ガリーチとサハロフの近しい友人であり、協力者でもある作家ウラジミール・マクシモフと数学者イゴール・シャファレービッチが署名していた。

——いよいよソ連へ

六月に、ソ連の亡命運動の指導者ウラジミール・ボレムスキー博士が、サハロフの人権に関する動きの記録綴りを持って訪ねてくれた。この情報をノーベル委員会に伝達してほしいというのだ。そのことも含んで、私は次の連帯委員会で、この問題を提起した。

西欧のインテリにとってはめずらしくはないが、ソ連のインテリには理解しがたい類の長い論議がまっていた。結局、多大の尊敬を得ている作家で、ヒューマニストの次の意見が基調となってしまった。「平和賞は水弾を製造した人に与えられるべきではない。サハロフは、この十字架を生涯背負わなければならない」

私は一生懸命、ノーベル賞はアルフレッド・ノーベルがダイナマイトの製造で得た資金で設けたことを指摘したが、無駄であった。その中で私を支持してくれたのは、たった一人だった。元ノルウェー大使の夫人で、われわれの誰よりもソ連を知っていた人である。ソ連に七年住み、流暢なロシア語を話した。

そこで、サハロフの推薦をしてくれる人を改めて探さざるをえなかった。まっ先に挙げね

ばならないのは、ベテランの労働指導者ハッコン・リーであるが、彼はほとんど伝説的な人物となっていた。スペイン内戦の際、フランコ総統に対抗してノルウェーの援助軍を指揮し、後年、労働党が最大の得票率を誇っていた時期にその書記長を二十年間務めた人である。

一九七三年の夏は、反体制の人たちにとっては苦しい時期だったので、私たちはサハロフが受賞することを前にもまして待ち望むようになった。ソ連の権力者たちは、ソ連芸術界の著名な人びと（その中にはシヨスタコビッチやハチャトゥリアンもいた）に、ソルジェニーツィンやサハロフを批難する書簡に署名させることに成功してしまった。後になってシヨスタコビッチは、彼の署名は病気で伏していたときに無理にさせられたものと釈明した。

さらに、権力者たちはモスクワで記者会見を開いて、二人の著名な反体制者をテレビカメラの前に立たせた。ピョートル・ヤーキルと、現在は西側に亡命しているビクター・クラシンである。二人は、体制に不利な証言をしたことを後悔していると述べた。ヤーキルは、かつてスターリンに射殺されたソ連の將軍の息子である。彼は十四歳のときに、はじめて投獄され、それ以来他のどんな反体制者よりも長く牢獄と政治犯収容所で過している。後悔をしている旨の告白をひき出すために相当な圧力が加えられたことを、後になって二人は語っている。いうとおりになければ、身重の娘を投獄するといわれたとヤーキルは語った。

次は、ガリーチが作家協会から追放されたというニュースがソ連から流れた。そして間も

なく、彼は映画制作協会からも除名されたことが伝えられた。彼は仕事につくことができな
いばかりか、その地位が極端に危険になったことを察知したので、私は彼をノルウェー国立
劇場の講師として招待するようとりはからった。イプセンの研究家であり、かつて彼が師事
したことのあるスタニスラフスキーについて講義をしてもらうことになった。ところが、ソ
連当局は彼を国外に出すことを許さず、別の三人の名を挙げて、スタニスラフスキーについ
ての講義はこの人たちが方が適当だといひ張った。

ここにいたって、私は何としてもソ連に行こうと決心した。目的は、直接ガリイチをノ
ルウェーに招待することと、われわれのグループは、サハロフがノーベル賞を受けられるよ
うできるかぎりの努力をするつもりであることを、彼にいうためであった。

接触のための準備

私たちは準備として、まずソ連内外で活動しているロシア解放運動ナロドノ・トルドボイ・
ソユーズ(NTS=人民労働同盟)と接触した。こうした人びとからサハロフに渡す貴重なメモ
を手に入れることができた。西側からみたソ連の政治の状況や新聞の切り抜きなどであった。
彼らはまた、モスクワで私が訪ねたい住所を示した手書きの地図を作ってくれたし、必要な
電話番号も教えてくれた。ソ連では電話帳は手に入らないからである。最後に、彼らは匿名

でガリーチに電話をかけ、ある夜——それは、私が到着する夜であったが——彼が在宅して重要な電話を受けるよう伝えた。私が訪ねるときに、彼に確実にいてもらうためにとった手筈だった。

私が入国ビザを拒否されたのは、予想されたことであった。ホテルはすべて満員であるからといわれた。しかし、この程度の困難を克服するのはたやすかった。私はパッケージ・ツアーで予約をとったのだ。私たちはスカンジナビア航空（SAS）でストックホルムに飛び、そこでエアフロート（ソビエト国営航空）の定期便に乗りかえた。

ソ連機の中に入ると、すでにソ連に到着したかのように感じた。ソ連の飛行機は西側のものと同じようにモダンではあるが、古くかつくたびれた感じを与える。エアフロートのスチュワーデスは、若い女性というよりはロシアの女監督といった感じで、食物は西側の航空会社で出されるものと同じタイプではあったが、新鮮さと生きのよさで劣っていた。

旅客のほとんどはソ連人であった。ふと気がつくと、私はストックホルムのソ連大使館の一行の中にいた。まわりの空気は高価な香水で充滿していて、一行の服装はきわめてスタイリッシュであった。私の隣りの男は巨大な体格の持主で、他の男たちと同じく一分のすきもなく黒いスーツを着こなし、香水のにおいを漂わせていたものの、外交官というよりはむしろボクサーのようであった。

モスクワに着陸するとただちに、噂どおり外部から入り込むものはすべて疑うというソ連特有の雰囲気がかまかまえている。パスポート検査官や税関官吏が細心の配慮と必死の形相で職務を遂行する。一般ソビエト市民のバッグはやたらと細かに検査される。しかしわれわれのグループは、所持品を一瞥されることもなく通り抜けた。私はほっとした。というのはバッグの中に新聞の切り抜きがまとめて入っており、もし見つかったら、係官たちの関心をそそったはずだからである。

税金検査の場では、モスクワのガイドが待っていた。若いブロンドの美しい女性で、機中の大使館の女性のように厚化粧をしていた。彼女は自らナターシャと名乗り、空港バスへと誘導しながらスウェーデン語で挨拶した。市街にむけて走る車窓から雪景色に見入った。ところどころに古ぼけた木造りの家がかたままって建っていた。なかには、互いに寄り合うように傾くほど古いのもあった。これらの家は、裕福な人びとが保養のために使う有名なダハ別荘だとナターシャに聞いて驚いた。

バスが古めかしいホテル・ベルリンの前の雪におおわれた街路に停車したときには、すでに暗くなっていた。十二月三日のことである。モスクワにはたった三日しか滞在しないことになっていたので、ただちに仕事にとりかからなければならなかった。私は、手製の地図をポケットにすぐさま出かけようとした。ロビーの中ほどで、耳ざわりな声に呼び止められた。

「どこへいくの？」われわれの一行の中の女だった。一瞬、私はドキッとした。われわれをスパイする「おとりばと」なのであろうか。それとも、生まれつきかすれ声と疑い深い目付きをもったおせっかい屋だろうか。私はできるだけ平静を装って「お腹が空いていないのでホテルの食事よりもモスクワの味を試したいのだ」と答えた。

この出合いに私はかなり動揺し、ドキドキしながら街路に踏み出した。通行人の半数が制服姿であること自体が、私の恐れを鎮静するどころではなかった。しかも、ホテルはKGB本部（ルビャンカ牢獄）から石を投げれば届くほどの近さにあることも地図でわかっていた。その前には、ソビエト秘密警察創設の父ジェルジンスキーの銅像があることも調べてあった。横道を少し行くと、銅像と牢獄とを見ることができた。

——ガリーチの家へ

私は地下鉄に入った。切符を買うことは簡単だが、どの電車に乗ったらよいかハタと困った。明るく照らされたプラットホームのベンチに、一人で座っている若い男を見つけた。はじめためらったが、思いきってどれに乗ったらよいかを英語で尋ねると、彼は恥ずかしそうな表情で見上げた。私は、彼の指が長く繊細であることに気がついた。

「どこから来たのですか？」と彼は尋ねた。

「ノルウェーから」

彼はまるで虫にでも刺されたかのような表情をしたが、すばやくあたりを見回してから叫んだ。

「なんて素晴らしいことだ。私はピアニストで、ちょうどグリーグのイ短調ピアノ・コンツェルトを、私のレパートリーに加えたところですよ」

「ノルウェーでは、ラフマニノフの音楽祭を終えたばかりです。彼のロシア音楽は素晴らしいですね」と私も答えた。

「そのとおり」と彼はいう。

彼はますます気乗りして、「私はグリーグとラフマニノフが大好きです。私のご案内しましょう」といって電車に乗ってきた。そして車中ずっと音楽についての愉快な会話が続いた。しかし私は、彼が始終警戒的な目くばりをするのに気がついた。外国人とつき合って迷惑をかけても悪いと思ったので、私が降りる駅をどうやって見わかるかを教えてくれというのと、彼も納得して説明をしたあと、次の駅で降りていった。

駅に着いてからは、ガリーチの住むアパートをたやすく見つけることができた。一階には頑固な感じの女管理人がおり、KGBの連絡員と私はにらんだ。彼女と話すことなく、私は三十七号室へ向かった。私はベルを押した。一、二分後に気づいたが、これが失敗であった。

長い沈黙があった。やがてドアがわずかだけ開き、部屋の中の人に検分された。

私は、ドイツ語で話しかけた。

「大切な電話の話とは私のことです」

ドアが少し広く開いたので、私は身をよじらせて入り込んだ。目の前に、背の高い茶色の口髭をはやしたハンサムな男が立っていた。

彼の最初の言葉は、

「貴方は信者ですか？ ここには信者しかおりませんが」

「もちろんです。大変な信者です」と私は答えた。

彼は私がベルを鳴らしたので、警戒したのだといった。ドアは鍵がかかかっていないので、友人たちはそのまま入ってくるのだという。ベルの音を聞いたとき、とっさにKGBかもしれぬと疑ったのだった。

私は、用意してきたノルウェーへの招待状をとり出して彼に手渡した。それが何であるかを知ると、彼は私を抱きしめて感謝を示した。しかしながら、彼の出国許可を当局は一度拒否しているので、二回目にどう反応するかわからないといった。

彼の妻アンゲリーナも居間に続く戸口に現われ、紹介された。残念ながら彼女は、私の操れる外国語である英語もドイツ語も話さなかった。私たちは部屋に入り、ガリーチと私は小

さなテーブルの両側の椅子に座り、アンゲリーナは、部屋の隅にすわって私たちの会話に聞き入ったり、そつと微笑んだりした。

「あなたの訪問の計画を立てなければ……」とガリーチは前置きなしにいった。

「誰に会いたいのですか」

「ソルジェニーツイン、サハロフ、マクシモフ」

「もちろん、サハロフとマクシモフには簡単に会えますが、ソルジェニーツインは……」

彼の言葉がとぎれ、私を怪訝そうに見た。

私は微笑んで、「ソルジェニーツインは一匹狼だ、という噂は西側にも伝わっていますよ」と答えた。

「マクシモフに頼むのが一番でしょう」

といって彼は受話器をとり、親友と話し込むような活発な会話がはじまった。終わって彼は、マクシモフが電話で返事をしてくると私に伝えた。

——
禁じられた歌

私はろくに家具のない部屋を見渡した。新しそうなものはラジオだけであった。何はなくともラジオだけはソ連人の持っているものだった。壁には七本弦のジプシー・ギターがかか

っていた。何であるか私には想像がついた。ガリーチの歌のテープは、何千本も非合法的に出まわっている。そのほとんどが、彼がギターの伴奏に合わせて歌ったものである。おそろくその瞬間も、壁のギターの音はソ連の各地で聞かれているにちがいない。

間もなく友人たちが集まってきた。誰もがベルを鳴らさずに入ってきた。アンゲリーナが甘いお菓子を出した。笑みをたたえた若いカップルが私の前に立った。ガリーチは彼をソ連の優秀な若手作曲家の一人として紹介した。

「当局は、彼の作品の演奏を許さない」と彼は説明し、次のようにつけ加えた。

「あなたや私のように、彼も信者であるからかもしれない」

「どんな音楽を作るのか」と私はその青年に尋ねてみた。

「シンフォニーです。でもどうしようもないのです。フルツェバ女史が、人民の必要とする音楽ではないときめつけてしまったから」

彼があまりにも悲しそうだったので、私は彼を慰めようと努めた。

「あなたは創造することをやめてはいけない。しかも、あなたは信仰を持っている。それこそ人生でもっとも大切なものだ」

と、私はいった。

とたんに、男には滅多に許されないことがおこった。彼は静かに腰をかけ、あふれる涙を

拭おうとしなかった。やがて彼はいった。

「私は書き続けよう。たとえ希望はなくとも」

私にとって、それは苦しみの深い淵をながめているようであった。よい芸術は必ず認められるものなどと、国にいたとき何度軽々しくいったことか。ソ連ではそんなことはないのだ。現在もソ連では、偉大な芸術が創造されているにはちがいないが、それは誰の目にも触れず、聴かれず、読まれることもないのである。スターリン時代のマンデルシュタムの膨大な詩作の中で残っているものは、彼の未亡人ナデジダが何が何でもと必死になって記憶したもののだけなのである。

電話が鳴った。マクシモフからで、ソルジェニツィンとモスクワ郊外で連絡がついたとの報告であった。ソルジェニツィンは私の名前を覚えていて、自分の仕事を中断するのは気が進まないが、私に会うためにモスクワに来るということであった。不幸にもソルジェニツィンが提案した日の前に、私の旅行グループはレニングラードに出發することになっていた。しかしサハロフは、私を翌々日の夕方アパートに呼んでくれた。マクシモフやガリーチもくるということだった。

ガリーチが、タクシーでホテル・ベルリンに来て私を拾ってくれることになった。しかし、彼の立場を考えると危険すぎはしないかと思つて反対した。

「そんなことでもいいのですか」。すると彼は、私の心配を払いのけるように、「ここでは何でもできるのですよ」といつてのけた。

私は、ドイツ占領下のノルウェーのことを思い出した。当時は、レジスタンスで働いていたわれわれも危険を覚悟でいろいろやったものだった。暗闇の中で口笛をふいたりして、権力に対抗しようとしたものだ。

——女性ガイドの涙

翌日は、心ゆくまで観光を楽しんだ。新しいラブリエフ・ギャラリーで聖像イコンを見た。幸運にもわれわれの一行を案内したのは、修復の仕事をしている若い女性だった。私は、芸術家であると同時に信仰者であることを彼女に告げ、尊敬の念を失わないで、しかも十全な説明をしてくれるように頼んだ。実際、彼女の説明には、不満があるどころか、すべてにおいて啓発されることが多かった。

ツアーの終わりに、どうして聖像の画家たちは逆の遠近法を使うのかと尋ねた。彼女が答えをまとめようとしている間に、私は自分なりの説明を考えた。十四世紀にウッチェロが遠近法を持ち込み、線を消失点に集めることによって、画家は空間幻想を作り出すことができるようになった。普通、鑑賞する人は、自分の立場からものを観察する。しかし、聖像の画

家は遠近法を逆に用いている。すべての線が、鑑賞者の位置する絵の前方の一点に集まっている。したがって、絵が鑑賞者の立場に立つことになる。絵が鑑賞されるのではなく、逆に鑑賞者が見られることになる。

私は、ポケットから一枚の絵葉書をとりました。ノルウェー北部トロムソの「北極大聖堂」とも呼ばれる新しい教会の東端を埋める、私の今まで作った中では最大のステンドグラス窓が写っているものである。

私は、それをその若い女性に見せながらいった。

「キリストが人類のもとに帰還することを表わしているものです」

彼女は絵葉書を手にして見つめていたが、やがて目に涙を浮かべた。

「彼女を改宗させている」と一行の一人が、ノルウェー語でつぶやいた。彼女はその絵葉書をもらいたいといったが、私はすでに、ソルジェニーツィンに渡そうと思つて、名前を書き入れてあつた。聖像とステンドグラスが心に何かの感動を与えたにしても、われわれに別れをつげたときの彼女は冷静さを取り戻し、元の女性に戻つていた。

3 サハロフ家の一室で

翌晩七時、十二月の寒さの中をベルリン・ホテルの前に立って、私はガリーチを待った。モスクワっ子たちは、温かそうな防寒服をまとって行き交っていた。数ブロック離れたところのクレムリン宮殿の上には赤い星が輝き、市に向かってその威容を誇っていた。それはあらゆる者には希望を、他の人びとには絶望を意味していた。そうした星は、商店のクリスマス・ツリーの上にもあった。

クリスマス・ツリー？　そう、公式にはキリストの誕生ではなく、「冬」を祝っていたのである。私はまた神経質になってきた。人目につきやすい赤ワイン色のカバンを持っていたからである。オスロでそれを預ったときには、色のことなど気にもしなかったのだが、そこ

に立てば立つほどいかに目立つかがわかってきた。その中には、北極探検家フリットヨフ・ナンセン家からグリゴレンコ夫人へ贈る服が入っていた。精神病院に入れられていたグリゴレンコ將軍の夫人である。

彼の罪状は、一九四四年に中央アジアのウズベキスタンに集団追放されたクリミヤ系タタール人たちのために抗議したということであった。その他に私は、ガリーチとソルジェニツィンへの贈物と、ブリーフケースに入った新聞の切り抜きを持っていた。

ガリーチがタクシーで現われ、手招きしてくれたときは、さすがにホッとした。彼の方が私などよりはるかに大きな危険を冒しているにもかかわらず、まったく気にとめていないようだった。反体制の人たちはつねに危険の淵を歩むが、けっして当局のいうがままに頭を下げない決意でいる。しかし、私は気がつかなかったが彼は何かを察していた。タクシーが走り出したとき、彼はつぶやいた。

「二台の車につけられている。KGBはあなたの訪問に無関心ではないようだ」

タクシーの中で私たちは贈物を交換した。赤いカバンと別れるのは、ほんとうにうれしかった。彼から私への贈物は、古代ロシア教会音楽のレコードであった。ようやくサハロフの住むチャルバ街で車をとめ、大きな灰色のアパートに入り、エレベーターで六階に上がった。

サハロフが自分で扉を開けた。彼はおずおずした男で、開襟シャツを着て袖をまくり上げていた。彼は親しげで、気どらず、私を安心させてくれた。耳のうしろにふさふさした髪があり、田舎風の雰囲気を与えていた。有名な科学者も一見、トラクターの運転手といった感じだった。

ガリーチと私は毛皮コートと帽子を脱ぎ、サハロフの寝室に案内された。部屋の大部分を占めているダブルベッドには、厚い毛布をかけたエレーナ・サハロフが寝ていた。挨拶をし、病気なのでということだった。ベッドのごく近くの椅子に二人の男が腰かけていた。他には椅子を置く場所がないほどせまかったためだ。男の一人は、大きな頭と強そうなプロレタリアの顔つきをしていたが、その顔を片手で支えるようにしていた。椅子に深く沈みながら、彼は憂鬱の権化のようだった。マクシモフにちがいないと思った。彼がその道の大家であることを知っていたので、私はいった。

「聖像のことをよく知っているお方にお会いできてうれしいです」

彼もわずかに身じろぎをしていった。

「聖像を知る者はいない」と、そして、

「その中に生きることしかできないのだ」といった。

もう一人は若く、やせて重々しい感じだった。難しい名前で聞きとれなかったが、詩人らしかった。ベッドのまわりには他にも椅子があつて、私はその一つに案内された。サハロフとガリーチが加わったときには、まわりをぎっしり弟子たちに囲まれ、長椅子の上に座っているマリアの聖像のような光景になつていた。

そこに座りながら、私は落ちつかない気持になりはじめた。この人たちは心配や危険、そして苦勞に耐えながら、人権のための闘いの最前線で長年生きてきたのだ。昨年は、後退の憂を味わっていることを私も知っていた。決意にみちた顔にも消耗と憂鬱がにじみ出ていた。ロシア特有の悲觀主義が漂っていたのは、マクシモフばかりではなかつた。その気持を多少なりとも持ち上げることが、私にできるだろうか。

アルメニア系のユダヤ人の出で、医者であるエレナは、私の反応を感じたかもしれない。彼女は「病気で失礼しております」と笑いながら詫びた。

「医者のかせに自分の病気が治せなくて……たくさんの病気にとりつかれているのですが、眼が一番心配です」

戦争中、従軍看護婦として負傷した際に、視力が損なわれてしまったのだ。片眼はめくらだった。

家具のほとんどない小さなアパートは、西側のわれわれもよく知っていた。BBC(英国国営放送)などのカメラがよく報道しているからで、この狭い部屋が寝室兼居間、そして偉大な科学者のたった一つの研究室でもあるのだが、机一つおく広ささえなかった。

アカデミーの会員としてサハロフは、もっと広いアパートを得る権利を持っていたが、当時はそれに入ることを許されておらず、彼とその家族もこの小さなところに住むしかなかった。もともと二人用のアパートで、エレーナとその母のものだった。これもサハロフ夫妻に対する心理的圧力の一つであった。

しかし、この窮屈な住まいも、広大な地域にまたがる「帝国」の希望の光となっていた。この「帝国」というのは、十九世紀から継続している世界中で唯一の帝国で、しかも二十世紀に拡大したものである。タタール人、コーカサス人、ウクライナ人、リトアニア人、それにソ連各地からのユダヤ人らがこの扉をたたいた。人類を滅亡させることのできるものを創り出した男が、偉大な人道主義者になっていたのである。小さな三部屋に七人が住んでいるこのアパートに遠来の客が三、四人、床に寝ることも稀ではなかった。

大変流暢にフランス語を話す若い詩人が、通訳のために呼ばれていたが、残念なことに私はフランス語が全然わからないので、致し方なくたどたどしいドイツ語に頼るしかなかった。中学のとき、落第点をとったことが悔やまれた。ガリーチはベッドの端に座って通訳の労を

とってくれた。なかなか堂に入ったものだった。彼はサハロフたちとは大変親しそうだった。一九七〇年以來、サハロフのもっとも近い同志として反体制運動を推進してきたのである。

——サハロフに渡した西側情報

私はまず、新聞の切り抜きの入っているブリーフケースをサハロフに渡した。過去六カ月間の西側の新聞に載った反体制運動に関する記事やニュース・リポートを集めてあった。飢えた人が食物にありつくようにサハロフは夢中で読み始めたが、一、二分すると熱中してか、椅子から立ち上がって寝室を出たり入ったりして歩き出した。次々と新しいものをとりあげては目を通した。

残ったわれわれは、そこはかたなく会話を続けた。やがて彼は、一つのニュース・リポートをさし出した。

「この写真の男をみてくれ」と彼はいった。

「彼は現政権の忠実な支援者だ。しかし彼は、私が科学アカデミーから追放されるのに反対投票をしてくれた。そんな道義的勇氣があるなんて夢にも思わなかった。こういったことが希望を与えてくれる」

彼は再び席に戻り、短い演説をはじめた。

「君がここにいることを連中は知っている」と彼ははじめた。

一語一語をはっきりといった。このアパートでのすべての言葉は第三者、すなわちKGBに聴かれていることを私に警告していることは想像できた。次の言葉は、マイクに直接語りかけているようだった。KGBによく聞かせたいかのようだった。

「われわれには何も隠すものはない。ここでは誰もが自由に話すことができるのだ。自由でないと感じたときに自由は失われる。思想の自由を保障するわが国の法律をわれわれは実行しはじめねばならない。人権をすでに獲得したかのように、われわれは生きなければならぬ」

反体制者が秘密裡に話したいときは、盗聴マイクが完備しているアパートから散歩に出るということを私は聞かされていた。さもなければ筆談をするという。夫婦がベッドの中で筆談することすらあるのだ。

ソ連内の反政府運動に対しての西側の同情者による評価を話したいのだが、と私はいった。サハロフはただちに尋ねた。

「誰が書いたのか」

NTS〔ナドノ・トルドボイ・ソユーズ〕人民労働同盟、三〇年代にドイツで結成された亡命者による反ソ組織〕のことに触れなくなかったので、私は一瞬躊躇した。そして、

「西側の友人です」と答えた。

「どんな友人？」

もう一度考えたあと、私はいった。

「西側の友人たちです」

それから私は、わざと何も書かずに来ているので記憶をたどって約一時間ほど話した。皆、真剣に聞いてくれた。テレビカメラの前で、ヤーキルとクラシンが偽りの告白をした記者会見の様も述べた。

「しかし、NTSに打撃を与えはしなかったようです」と結んだ。

皆が顔を見合わせた。恐らく、NTSのことがサハロフのアパートで語られたのは初めてだな、と私は感じた。

私の報告は一同を励まし、元気づけたように私には思えた。ついで私は、西側で反体制運動の闘いを支持する者たちにとって問題になっていることを質問した。それは、ソ連の生物学者ジョレス・メドベジェフのことである。彼は、ある時期には勇敢な反体制の闘士だったのに、近頃の言動は西側の反体制運動の支持者たちを混乱させていたからである。

例えばソ連に対しては、デタントあるのみというようなことを彼はいつている。逮捕や精神病院での強制治療などに対する抗議は、その人びとに被害を与える上、ソ連における解放

の可能性を妨害するものと主張しているのだ。果してそうなのかを私は知りたかった。

「メドベジェフの双子はまったくおかしな連中だ」とサハロフは答えた。

「ジョレスとロイ・メドベジェフの二人が窮地におちいついていたときほど、われわれ同ぜぬ者たちが助けてやったことはないだろう。ところが、他の人びとが苦しんでいるときに二人がしたことといえば、西側に沈黙するよういっただけだ。はっきりいって西側の世論の活発な支持がなかったら、この部屋のわれわれは……」

と彼は、部屋中に手をまわして、

「皆投獄されていただろう。西側のマスコミが書かなければ、われわれの存在を外部の人たちは知ることができない」と語った。

サハロフは内気で口数が少なそうにみえるが、重要な点だと思ふと絶対の權威——予言者のそれではなく、科学者としての權威——をもって語る。その論旨は、科学者らしく慎重かつ正確である。

——「私たちのことを書いてくれ」

次に私は、西側で反体制を支持することは、いたずらに冷戦の手助けをしているという人がいるが、それについての彼の意見を聞いた。

「そういった非難は、私に対してもなされている」と彼はいった。

「しかし、一九六八年の『進歩・共存・知的自由に関する考察』という論文ですでに明らかにしたように、私とても軍備競争をやめて、協調が対立にとってかわることが必要なことは認識している。しかし、言論の自由と人権が確立していない状態で真のデタントはあり得ない。私はヨーロッパの安全と協調に関する会議を通して、デタントを達成しようとする努力を全面的に支持する。ただし、人権の保障があつてのことだ」

彼は、近く開かれようとしているヘルシンキ会議（全欧安保協力首脳会議）について触れた。

「核兵器の制限などについては、国際協定を作るべきだと唱える一方、タタール人のクリミアへの帰還や政治犯の一般恩赦は思いとどまるべきだという人たちを理解できない」

彼は続いて、西側におけるわれわれの役割を再び述べた。

「頼むからぜひ、私たちのことを書いてください」と彼は訴えた。

「それが一番役に立つのです。ソ連の迫害に関する宣伝は、すべて犠牲者を助けることになりません」

彼は、少し間をおいてつけ加えた。

「人権をとくに保障する法律はあるのです。私たちは法律を変えようというのではなく、それらを適用させたいのです。したがって、われわれの闘いは政治的ではなく、道義的闘いな

のです」

ずっと沈黙を続けていたマクシモフが、言葉をはさんだ。

「それがキリスト教です」

私は、もう一度まわりを見まわした。疲れ果てた顔、それは私の心に情熱をたぎらせてくれた。この人たちは氷河時代に生きている。暖かい気候は遠くかけ離れているように思えるにちがいない。私の方で知っていることは知らせ、向こうから知らされることは知らされた。それだけでなく、何か私にできることがあるだろうか。いくらかでも氷を融かすことができるだろうか。

子供がしそうなことを私はした。アンドレイの方を向き、彼の手を握った。

「あなたは気づいておられないかもしれないが……」と私はいった。

「心の失われた暗闇の世界で、あなた方はなんとすばらしい光だろう。あなた方だけが重荷を背負われることがあってはならない。全世界の人間が、その重荷とともに背負おうとしています」

「君はわれわれを理解してくれているようだ」と彼はいった。

「われわれの話をききにくる人もいる」とウラジーミルが続ける。「大抵はわれわれから何かを求めようとする。むろん、われわれとしても喜んで求めに応じる気はある。しかし、君は

ちがっている。君のような人は十人に一人いるかないかだ」

エレーナは突然ベッドからおきあがり、「百人に一人よ」と笑いながら叫んだ。

「ドイツの占領を味わい、ゲシュタポを体験しているわれわれには、あなた方が直面していることが理解できる」と私はいった。

アンドレイは、首をかしげて納得しなかった。

「外国に侵略されたのだし、しかもわずか数年のことじゃないか」と彼は悲しそうに告げた。「われわれの場合は、同国人の手で苦しんでいるのだ。しかも五十年も耐えてきている」

彼のこの言葉、そして声、その他のできごとすべてが、ソ連人の自国の政府に抱く激しい憎しみとして、私には痛いほどわかった。

エレーナへの召喚状

会話の間中、代わるがわる皆が、公式文書らしきものが置いてあるテーブルに目をやることに気がついた。サハロフがそれを私に手渡した。エレーナ宛てのKGBからの召喚状である。尋問に出頭するようという五回目の召喚状である。尋問に二回応じたあと、サハロフは二度と彼女が行くことを許さなかった。このような命令に従わないことは、ソ連はじまつて以来初めてではあるまいか。

「彼女の出頭拒否の責任は、私が負うことをKGBには伝えてある」とアンドレイはいった。政治犯収容所から政治犯エドワルド・クズネツォフの日記を持ち出したかどで、エレーナは糾弾されているのだ。最初の取り調べで、彼女は自分とはまったく関係のないことを明らかにした。二回目の尋問は五時間にわたったが、今度はその間ずっと沈黙して座りとおしたという。担当の大佐は過度に慇懃であった。これは悪い徴候である。彼は最後の数分まで一貫して声を荒だてることはなかった。しかし、その後は顔を真赤にして、乱暴にどなりつけた。そして最後に、はっきりと脅迫した。

「母親であることを覚えておくんだな！」

その後、娘の一人は大学から追放され、才能に恵まれた数学者の息子は就学許可を拒絶された。アンドレイがこれを私に語ったとき、ベッドの人はこらえかねたようにすすり泣いていた。

「どんなことでも耐えます」

とエレーナが叫んだ。

「でも、子供たちが苦しむのだけは、私たちには耐えられない」

ドアに注意深いノックの音がした。お茶の用意ができた知らせだった。われわれはなるべく一列になって狭い通路を通った。エレーナも病床から起きていっしょに来た。台所のテー

ブルはきれいに準備されていた。椅子いくつかとソファアが一つあった。そこには上品で高潔そうな老婦人がすわっていた。エレーナの母であった。台所は彼女の居所であった。私に笑いかけると、また編物を続けた。

テーブルに並べられた食物に目をやりながら、アンドレイがいった。

「まるでぜいたくに暮していると思われるでしょうね」

そこで、マクシモフが歓迎の乾杯をしないことを詫びた。サハロフ家では、アルコールは飲まないことを説明した。

編物の手を休めずに、老婦人が美しい白髪の間もたげた。

「この家の中にアルコールが入ってくると、私が全部飲み干してしまいますよ」と老婦人はいたずらっぽくいった。

この夫人はかつて、共産主義者で革命家であったことを私は聞かされていた。しかも、政治犯収容所に十四年間もいたことも。それ以上は一言もいかなかったが、その鋭い頭脳は逐一もらさずすべてを理解していることを、私は感じとった。

だんだん元気をとり戻してきたエレーナが、引き出しの中を捜しはじめた。突然大きなボトルがテーブルの上に置かれた。

「どこから持ってきたのかい」と夫がたずねた。

「それは秘密よ」とエレーナが答えた。

ピンにはあまりたくさん残ってはいなかった。近くの友だちからもらったにちがいがなかった。マクシモフは小さなグラスを満たした。

「こんなときは滅多にないのだから、特別にお祝いしよう」と彼はいった。

老婦人は、さっきの威勢のいい言葉とはちがって、特別のお祝いすらも口に入れなかった。われわれは互いにグラスを触れ合わせて乾杯した。

マクシモフとサハロフは、私の仕事についてたずねた。私は「判事スミルノフと囚人」という絵のことを話した。囚人はシニャフスキーである。大柄な太った体軀のソビエト最高裁判事スミルノフは、絵の中央に座ってお茶をのんでいる。小柄なシニャフスキーは、脇によつて暗闇の中に立っている。この絵は実際の囚人は誰で、自由なのは誰かという疑問を見る人に起こさせる、とサハロフはいった。

「スミルノフは位をきわめたが、心は完全に死んでいる」

このあと私は、次の年の夏、恒例のベルゲン祭で開くことになっている個展のことを話し、マクシモフにカタログの序文を書いてくれと頼んだ。彼はたった一言知っているドイツ語ですぐ答えた。

「むろんだとも」

——ガリーチ招待の打ち合わせ

さて、どうやってガリーチを外国に出せるかという核心にふれて、われわれは議論した。ユダヤ人として移民する機会があったそうだが、彼には受け入れられなかった。ウクライナのユダヤ系の中産階級の家に生まれた彼は、ロシア文学とロシア文化を愛し、ロシア人であるとの意識が強かったのだ。

咽喉痛に悩む彼には、とうてい牢獄生活は耐えられるものではなかった。したがって、ソ連にすることは生命の危険を伴っている。かといって、西側の生活もけっして甘いものではないことを警告しなければならぬと思った。当局に生まれさえしなければ、ソ連の芸術家としての彼の生活は豊かで安全であった。ところが、西側では芸術家は自分の創造欲を満たす完全な自由がある代りに、自分の才能と努力に頼って自分の道を開かなければならない。「わかった、わかった」とガリーチは答えた。

「出国許可を得たら、後悔するかもしれないね」

それから、盗聴マイクにはかまわず、サハロフのノーベル賞受賞のことを私は持ち出した。実現のためには、どんな助力も辞さない仲間のグループがあることを私は告げた。

ノルウェーには、そのことのために最適の男がいることもつけ加えた。ハッコン・リーの

ことである。私は、KGBがすでに知っていることを語っているにすぎなかった。

会話は次第に生き生きとしてきて、話はずんだ。もつとも彼らを驚かせたのは、私がアイダ・スクリブニコワの話をしたことであろう。彼女はレニングラードの街角でイエスに関する手書きのパンフレットを配布していた科とがで、三年間政治犯収容所行きをいわたされた。

「私は彼女の写真を二枚見たのです」と私はいった。

「一枚は彼女が十九歳のとき、稀なほど美しい少女だった。ひたむきな情熱的な信仰の美しさでした。二枚目のは、三年間牢獄で過したあとのアイダ・スクリブニコワ。レンブラントの聖人じみた自画像のように、しわしわのやつれた老人の顔であった。三年間で三十年分の苦勞をしたのでしょう。しかし、新しい美しさが顔に現われていました。忠実さの美しさでした。信仰の光がにじみ出ているような、その額から輝く光はどんな暗闇にも生命を与えていました」

おそらく、マクシモフ以外の人は誰もアイダ・スクリブニコワのことを聞いたことはなかったであろう。マクシモフは、キリスト教徒の反体制運動について熟知していた人だが、たとえこのことを知っていたとしても、隠しマイクの前ではそれを認めようとはしなかった。

私は話している間、エレーナの顔を見ようとはしなかったが、深く感動していることを感じた。現在、アイダは出獄して、職についていることを述べて話を切り上げた。

私はまた無神論の本を集めている、とてつもなく大きい図書館の女案内人のことについても話した。ノルウェーのある友人が、そこを訪れたことがあるのだ。

「本がぎっしりつまっている中で人気が彼女だけだった。面白半分には彼は彼女に近づいて語りかけた。『こんなにも多くの言葉で否定しても、神が存在するなんて不可思議ですね』。彼女は、部屋の隅々まで注意深く見渡したあとささやくようにいった。『そう、そうなんです。神は生きています。私も信仰者です』」

サハロフ夫妻は信仰者ではなかったが、他人の信仰には最大の尊敬を払っていた。いかに多くのソ連の反体制知識人が信仰を持っているかということは驚くべきことである。

「西側ではインテリが共産主義者になるのに、ここでは逆に、クリスチャンになるようですね」と私はいった。

時間がきて、マクシモフが最初に帰ろうとした。かなり遠くに住んでいるのだった。コレクシヨンの中から聖像を私に贈物としてくれるという。私はそれを断わらざるを得なかった。骨董品を盗み出したというかどで、空港で捕えられたらばかばかしいからである。だが、ロシアの素晴らしい聖像が一つ私のもので、私の帰りを待っていることは嬉しいことであった。

子供たちへの土産として私が持って帰ることができたのは、おどけた農民の姿をした人形だった。

私は、ノルウェーからセーターをソルジェニーツィンにと持ってきていた。北極大聖堂のステンドグラスの窓の絵葉書もあげたいと思っていた。マクシモフは大仰に、最新のプラウダに包み、野暮な包みを作ったので、われわれは腹をかかえて笑った。

「それがほんとうにその日のプラウダか？」と私が尋ねるとエレーナが、

「どうせ読んでも、どうとということがないのでいい使い道ではないですか？」とつめたくなつてのけた。

——サハロフの頼み

マクシモフが帰ってから、私に頼みが一つあるとサハロフがいい出した。そして、当局によつて迫害されている二人の科学者についての詳細を私に書き留めさせた。一人は、四十一歳の数学者ユーリー・シハノビッチで、十日前に精神病院での強制治療を宣告されていた。彼がサハロフ夫妻の親しい友人であることは察しがついた。エレーナが手を伸ばして、柵に飾つてあった写真をとった。微笑をうかべた若々しい男が犬とたわむれているものだった。

「精神的にバランスを失った人間に見えますか？」とエレーナはきいた。

サハロフの話を聞いて、ソ連の法律に則れば不法に裁判が行なわれた点が六通りあると、私は書きとめた。サハロフは私が帰国したら、必ずこの事実を公表するよう約束させたのである。私はテレビと新聞に発表した。西側では絶大な抗議がおこり、数カ月後にシハノビッチが釈放されたことは嬉しかった。釈放されるとただちに、彼は人権擁護の仕事を再開した。もう一件は、レオニード・プリュージチのことであった。彼のことは初耳だった。彼もサハロフの友人で頭脳明晰な数学者だとサハロフは説明した。人権擁護グループ設立メンバー十四人の一人ということが彼の罪であった。六カ月間、ドネプロペトロフスクにあるKGB最悪の精神病院で注射をうけ、その効果が現われはじめていた。

「プリュージチはダメにされてしまう」とエレーナは熱をこめて語った。

帰国してから、私は多くの人といっしょにこのケースもとりあげた。西側の抗議が彼の釈放をもたらしたことは疑う余地がない。この間中、エレーナはせつせと私の皿にパイや他のご馳走をのせていた。しかし私は会話に夢中で、食べ続けたことに気がつかなかった。後になって、一口以上平げたのは私だけだということに気がついた。

ガリーチと私の帰るときがきたので、帽子をとり立ち上がった。エレーナが外套を着た私の肩をたたいて、私はクレスチャーニン（ロシア農民）と見わけがつかないくらいだといった。その言葉が、クリスチャンという言葉に似ているのがなおさらうれしかった。

外では、KGBの車何台かが待っていた。ガリーチと私がタクシーに乗り込むと、その車もついてきた。

私にとっての第二の変革

二日後に、私はソ連を発った。入るよりは出る方がむずかしいことがわかった。私はもはや、無名の無害な旅人ではなかったのだ。ツアーの他の人たちは難なく通されたが、私はそうはいかなかった。ポケットやカバンはすべて開けられた。監督していた女性のKGB官吏は、鉄のように堅かった。英語で書かれたサハロフ擁護のメッセージを勝ち誇ったように見つけ出したとき、はじめて表情を変えた。反体制の人たちに見せるためにノルウェーから持ち込んだもので、捨ててしまふべきだった。西側の新聞に載っていたもので、特別なものではないことを真剣に説明した。

「上げますから、研究してみてください」と私はいった。

男の上司があらわれた。彼は、私のスケッチブックに大変興味を示した。表紙裏は数学者シハノビッチの病院における写真が入っていた。幸い彼はそれが誰であるかに気づかなかつたので私は、

「ああ、それは私の友人です」といった。

彼は、私の鉛筆書きのスケッチの方に疑いの目を光らせた。彼は、一枚一枚横からも下からもあらゆる角度から検査した。何を探していたものか。暗号か、それとも地図か。とうとう私も怒り出し、スケッチブックをとりあげて、カバンに投げ入れ、ビシヤリとしめてしまった。KGBの男はもう一度開けさせようとしたが、私はつつけんどんに叫んだ。

「私は芸術家だから、けっして他人に私のスケッチを研究させたくはないのだ」

彼は躊躇して、もうそれ以上どうにもならないと思ったのか、諦めた。私は自分のグルーブに戻ることを許された。

飛行機は離陸し、機首を西に向けて飛んだ。夜だった。しかし、ロシアの地平線のかなたには血のように赤い夜明けを告げる一線が見られた。ああ、ロシアよ、その土の上には相反するものが何と多く存在していることだろう。憎悪に満ちた残酷な人びとがいるかと思えば、謙虚で聖者のような人たちもいる。善が勝利を収めることは不可能なのであろうか。

ドストエフスキーの小説『罪と罰』で主人公のラスコーリニコフは、自らのプライドとして自分より価値が劣るといふ理由で、老女を殺害する権利を行使している。しかし彼は、知らず知らずその罪から自由になることができない。他人が自分より劣ると決めたとき、人は神聖な法を破り、自らを破壊するものだということをわからせたのは、売春婦のソーニャである。彼女は彼にいう。

「十字路に立って、みんなに頭を下げ、地面に接吻しなさい。だってあなたは大地に対しても罪をおかしたわけですからね。北と、南と、東と、西を向いて、全世界に向かって大きな声で『私は人を殺しました』というのですよ。そのとき、神様はあなたの失った命をかえしてくださいさるでしょう」

このことは起こりはじめているだろうか？ ソ連のインテリは国家になりかわって十字路に立っているだろうか？ 各個人は無限の価値をもっているというラスコーリニコフの言葉は、同ぜぬ人たちによって語られているのだろうか。

私たちの飛行機は、西へと飛んで行った。その間に私の心の中に、ある確信が固まり出していた。アンドレイ・サハロフの家での四時間が、私の人生の二度目の変革をもたらしたのである。

最初の変革で、私はキリスト教の信仰を得ていた。二度目の変革で、私の人生はある一人の人びとと結びついてしまった。私はそのときそこで生きている限り、人生を自由のために闘う人びとにささげようと決心した。この二つの変革は、相互補完的なものなのである。

2部

松明^{たいまつ}をかかげた亡命者たち

1 橋の上に立つソルジェニーツィン

ノルウェーに戻った私は、アンドレイ・サハロフこそ平和賞を受けるに値する人であることを世論に訴えはじめた。こうすることと、ノーベル平和賞の決定委員会に裏づけとなる証拠を提出することだけが、受賞に影響を与えるためにできることであつた。

五人の委員に直接あたることは違法であるし、逆効果であろう。私はこのことに関して、新聞記事をいくつか書き、国会議員にも働きかけた。そのうちの何人かは、一九七四年の受賞者推薦の権利をサハロフのために使うことを約束してくれた。

ところで、私はある人たちからは注意人物として取り扱われ出した。モスクワから帰ってすぐのこと、芸術家ばかりの委員会で古いタイプのスターリン主義者の彫刻家の冷笑をうけた。

「コミニストを皆殺しにしようとする男がやってくるぞ」

私の答えは、ほとんど壁に通じないようだった。

「私は、コミニストたちを殺そうとしてはいい——それは、彼らにまかせておくのが一番だ。私は共産主義者にも資本主義者のどちらにも通用する、より大きな生きがいを与えようとしているのだ」

—— 時節到来、時は満ちた

私がこの仕事に没頭するには、あまりふさわしい時期ではなかった。というのは、マクシモフに話したベルゲン祭まで三カ月しかなかったのだ。それはノルウェー随一の音楽と芸術の祭典であった。私の絵をそこに出してもらえることは、画家としての私にとって最高の機会であったのだ。自分の最善をつくして自分の考えをできるだけ力強く訴える絵を画きたかった。すでに適当な絵もアトリエの中にあっし、貸してあるものを何点か引き上げることができたが、私としては新しい作品を描きたかった。そこで、私は早速いくつかの大きな構図の作品にとりかかった。日中はノーベル賞のことで忙しいので、ほとんどが夜に描かれた。二つの大きな画面には、東側に見られる自由の抑圧と西側に見られる自由の濫用を描いた。「ウラジミール・ブコフスキーの強いられた旅路」という作品は、KGBの病院で強制注射

治療を受けた若い作家を描いた。

もう一つのテーマは「自由世界の舞台裏」で、これには麻薬を自ら注射している西側の、誤った自由が描かれていた。

ところが、また別の出来事が起こってしまい、私の時間はたぶんにとられることになった。『収容所群島・第一巻』がロシア語で出版されたのである。この本は、五十年に及ぶソ連恐怖政治を徹底的に告発しているので、クレムリンの激怒は想像に難くなかった。世界は、劇場の一等席に座ってそのドラマのクライマックスをながめることとなった。

ソルジェニーツィンは、資料を得るために面会した証人のすべてが亡くなるまでは、本の出版を遅らせるつもりでいた。ところが、KGBの方で原稿をタイプした女性をとらえて、原稿のありかを聞き出してしまった。ことの重大性を知った彼女は首を吊って自殺した。ソルジェニーツィンは悲嘆にくれたものの、これ以上出版を延ばす理由がなくなったことを知った。

彼は、嵐が吹き荒れるのを待った。モスクワの記者会見で、彼はいった。

「私と私の家族は覚悟しております。私は死んだ人びとに対する義務を果しました。彼らに関する真実は、殺されたり、消されたり、灰にされたりしました。しかし『収容所群島』の中では、真理は生き続け、消すことは誰にもできないのです」

新年早々、テルアビブとパリ経由でモスクワのある番号に電話をかけるようにとのメッセージが入った。かけて見ると、アンドレイ・サハロフの声であった。

「お正月おめでとう」

彼はマクシモフとともにガリーチのアパートにいた。次に、ガリーチが電話口にでてきた。「KGBは、はっきりと抵抗することは馬鹿げていると警告している」

といった。夏にはしまった“同ぜぬ者たち”に対するしめつけは、漸次熾烈さを増していた。次に何が起ころかは、誰にもわからなかった。

この報告は、私がロシア人ときあうときに感じるパラドックスの一つである。迫害されている本人が、盗聴されていることを承知で他国に公然と自分たちの迫害の事情を話しているのだ。しかも、ガリーチは続けて出国のための申請をするつもりだと語った。それに対する回答を得るまでは、危険な立場にある、ともいった。

不安定で危険な状態のまっただ中にありながら、この人たちは私のことに気を配ることを忘れなかった。マクシモフは「^{フュスライベル}祭典」のカタログの序文を書き終わったので、私に送るつもりだと語った。電話では、どうやって送るかはいわなかった。

数日後、私はソ連からの手紙を受けとった。どんな方法で国外へ送られたかはわからないが、二重封筒に入っていた。中の封筒は、ソ連特有の粗末な紙のものであった。マクシモフからではなく、ソルジェニーツィンからのもので、私がモスクワを発つ前に私に届くように、一カ月前に差し出されたものだった。

ロシア語で、次のように書いてあった。

あなたのご配慮と贈り物に、私は大変心をうたれました。今日、お目にかかれるものと思っています。ノルウェーもソ連も、北極圏に位置し、生活様式で似通っている点も多いと思われまます（むろん、昔がそうであったという意味で今日にはちがいます）。われわれと同様家庭用品は木製品を使っておられるようですね。ヨーロッパの中でも、ノルウェー精神が最高でもっとも強靱なものだ、と私は最近結論しています。温かくあなたの手を握りたいと思います。心の底からの感謝をあなたのお仲間にお伝え下さい。四年前、あのように感動的に私を迎えて下さった方々に。

親愛なるV・シュ巴拉ー

A・ソルジェニーツィン

この手紙を読んで、私は、もし今ソルジェニーツィンが追放されたなら、ノルウェーが彼

を受け入れればよいと思いはじめた。

このことを考えながら、私はフェスティバル用に「新しい人」という題の彼の等身大の肖像画を描きはじめ、それが完成したときに、彼が逮捕されたというニュースがラジオで伝わった。最悪の事態になったようであった。ソビエト刑法第六十四条の叛逆罪に問われ、刑は十五年の重労役か死刑以外にない、とラジオは報道していた。

二月十三日のことだった。その日一日、私は彼を助ける方法について必死に考えつくしていた。この日の夕方、北極大聖堂の映画会があり、その後で、エリック・エーゲランドが私の作品についての講演をした。最初にソルジェニーツィンのために、一分間の黙禱をし、終わりに、満場一致で可決した決議文を私が読みあげた。

コスイギンにあてたもので、冒頭は次の言葉ではじまっている。

「アレキサンダー・ソルジェニーツィンは、ロシア国民を深く愛すればこそ、その人びとの真実を直視する勇氣を持ち、われわれの文明に多くの貢献をしているロシアの偉大なキリスト教の伝統を、不滅不朽のものとしている」

——ソルジェニーツィン、西へ

翌朝早く、私はガリーチに電話した。サハロフとマクシモフの二人が、昨夜はソルジェニ

ーツィン夫人や子供たちとともに過した、とのことだった。みな非常に動揺していて、ガリーチ自身もほとんど絶望しているようだった。

正午に、私は昨夜の会合で司会をした男とソ連大使館を訪ね、決議文を手渡そうとした。ノルウェー語を話す二人の大使館員が応対したが、どうしてもそれを受けとらなかつた。町の中心まで戻ったところで、第二弾の衝撃的なニュースを耳にした。ソルジェニーツィンがソ連航空機に乗せられ、一時間以内にフランクフルトに到着するというのである。

私は、ドイツにいるロシア人の友人に電話をかけた。

「ソルジェニーツィンが飛行機をおりたとき、四年前のノルウェーへの招待は今も生きていることをまっ先に伝え、温かく迎えてください」

二時間後に、ドイツ駐在のノルクス・テレグラムピラ特派員がテレックスを打ってきた。

「モスクワからの飛行機、一時間前にフランクフルトに着陸。ソルジェニーツィンが飛行機を降りたとたん、『喜んでノルウェーにご招待します』とのノルウェー人画家ビクター・シユパラー氏から電文を受けとった」というものであった。

ソルジェニーツィンは、どこに連れて行かれるのか、行先を知らされずに飛行機に乗せられていた。行く先はウィーンかと思ったが、広い川にまたがった大きな都市に着陸したので、それにちがいないと思ったそうだ。

着陸したので席を立ち上がったが、すぐ座らされた。彼に同行していた八人のKGBの男の一人が機外に出て行ったが、数分後に戻ってきて「上着を着ろ」と命令し、続いて「外に出ろ」と男たちは半円で彼を囲みながら、動物を追い立てるようにして出口へと向かい彼を突き出した。タラップを降りながら、うしろを振り返ると、もう誰もついてこなかった。

タラップの下には男が立っていて、にこやかに迎えた。西ドイツの外務省の人だった。ここがフランクフルトであること、どこに行こうと自由であることを告げた。作家のハインリッヒ・ベルが待っているのです、さしつかえなければ、ベル氏の家まで送るといった。ソルジエニツインは、ベルがノーベル文学賞を受賞した仲間であることを知っていたので承知した。

次の夕方、ノルウエーの多数の青年団体が、デモ集会を開いて反体制者に対する連帯感を誇示し、ソルジエニツインをノルウエーに招待しようという私の考えを支持してくれた。女優、牧師、作家などの著名人がデモに参加して、発言を求められた。最後に、私が発言することになった。集会はオスロの中心の大きな大学広場で開かれ、私が話すころには満員になっていた。

私は、ソルジエニツイン自身の言葉、「夜が明けたことを疑わない君たちよ、重いカーテンを開けて外を見るがいい」を引いて結論とした。

トラックに松明^{たいまつ}が積んであったが、一人ひとりがそれをとって火をつけ、「ようこそノルウェーに、ソルジェニーツィン」と書かれた旗を先頭に、二千五百人の人びとがそれをかざしながら、ドラメンスベイエンからソ連大使館に向かってゆっくりと感激の行進をした。メッセージは、死人の館のようにひっそりとしていた大使館に残された。

ソルジェニーツィンは、ベルのところで一週間過ごした。マスコミがしつこく面会を申し込んだが、彼はほとんどとりあわず、次にどこに行くかのヒントも与えなかった。それにもかかわらずノルウェーに落ちつくかも知れないという噂が広まりはじめ、ノルウェーの新聞にはさまざまの憶測が書かれた。

「ソルジェニーツィン、ベルゲン市民を決意か？」というのもあった。

四年前にソルジェニーツィンをノルウェーに招いた二人の作家と二人の画家に代わって、エリック・エーゲランドが家さがしをはじめた。彼は、一九二〇年代のノルウェーのノーベル文学賞受賞者シグリッド・ウンドセットが住んでいたという家の申し入れを受けた。その家は、ビョルケパーケン（白樺の丘）と呼ばれ、ノルウェー中央部のリルレハンメル市の後ろの山にあった。

二日後に、ペル・エジル・ヘッゲが彼の新聞アテンボシュテンからフランクフルトに派遣された。われわれは、その家が提供されたことをソルジェニーツィンに伝えるよう、彼に

頼んだ。

他のジャーナリストと異なり、ヘッゲはベルの家に入ることができた。ソルジェニーツィンはその家が気に入ったらしく、また、ノルウェー人に歓迎されていることを知って感激していることを、われわれに伝えてきた。

——
手荒い抱擁

間もなく、ニュースで、ソルジェニーツィンは列車で北に向かっていることを聞いた。夜も更けてアフテンボシュテンから電話が入った。ソルジェニーツィンは、コペンハーゲンからオスロへのフェリーに乗っており、私に波止場まで出迎えるようにとの連絡があった。

夜明けとともに、私は波止場に向かった。非常警戒がはられ、善意の人びとと新聞記者の人ごみをおさえていた。私は、妻のアセマリーが夜のうちに作った花束を持っていた。すると、同じく花束を持ったみじめな感じの男が私に近よってきた。ソルジェニーツィンのノルウェーでの出版者でトリグベ・ヨハンセンと名乗り、ソルジェニーツィンを歓迎したいと思ったが、警護の男たちに止められたという。私についてくるよう彼にいった。私たち二人は非常線を通ることができた。

大きなデンマーク船が夜明けのフィヨルドにゆっくりと近よるのを、花束を持ったわれわ

れは波止場に立って見ていた。国際治安軍のユニフォームを着た五人の大きな男が、一メートルほど後ろに一列に立っていた。着ているオーバーは、下に銃をかまえているらしく、ふくらんでいた。スウェーデン人の記者が私にきいた。

「彼に何というつもりですか？」

「とくに何も考えていない」と私は率直に答えた。

船がゆっくりと波止場に近づくと、驚いたことにソルジェニーツィンが船橋に立っているではないか。十日前には、ルビアンカ収容所で苦悩していた男が、毛皮の帽子をかぶり真鍮の望遠鏡を腰のまわりに吊して立っているのだ。単に船の指揮をとるばかりでなく、全世界の司令官のような姿で堂々と立っていた。もはや彼を追放することはできない。全世界が彼の故郷^{くわに}のだから。

タラップをかけあがる私の後に、出版者が続いた。微笑をうかべる船長、船主、そしてまるで中世の甲冑を着てでもいるように人目をひいたデンマークの警護の人たちの前で、私は力強いロシア式の抱擁とキスを両頬に受けた。

非常線を突破したジャーナリストたちが、タラップの下まで押し寄せていた。ソルジェニーツィン、彼に同行したヘッケ、そして私は強引に群集をかき分けてアフテンボシュテン紙からさし回しの車にたどりついた。車は速いスピードで走り出し、その後にはノルウェーの

警護の人たちがついた。

ジャーナリストたちは、期待していたインタビューをはぐらかされたのに怒って、それぞれの車で駅に向かった。当然、ソルジェニーツインがリルレハンメルに列車で行くと思つたのだつた。

ソルジェニーツインは当惑していた。新聞記者にこわもてに出て書かないようにいえば、静かに立ち去るだろうと思つてゐるらしかつた。KGBを相手にすることを知つてゐる彼ではあつたが、西側の新聞記者については無知だつた。こうしたこと精通してゐるヘッケが、連中は獵犬のようにしつこいから小さな骨でも与えれば満足して立ち去るだろう、と彼を説得にかかつた。だが彼は、一向に耳を傾けなかつた。新聞記者に費やす無駄な時間はない、と彼はいうのだ。わざわざ新聞記者の目につくこともないので、列車が出る直前までわれわれはゆつくりとオスロを巡回して、ソルジェニーツインに見物をしてもらつた。

「あの城は？」と王宮を指したときには、車から降りてながめてもらう自由と時間の余裕すらあつた。

記者の中には、指定席をあらかじめ手に入れていっしょに来た人もいた。リルレハンメルで降りたときも車を雇つて後をついてきた。しかし、護衛の車に近づくのをさえぎられていた。その晩は、小さな農場に泊ることになつてゐた。農場の入口への道の両側は、一メートル

ルもの雪が積っていた。護衛の人たちが好都合に雪のバリケードを築いて、人が近づけないようにしてくれた。

それでも押し問答の挙句、ついに関所をこえて、カメラ、マイク、ノートなどを手にした五十人もの人が息せききって農場へ入ってきた。ソルジェニーツィンは、これを見て面白そうにながめていたが、「ようし、それでは……」と私にいった。

「連中にいい写真をとらせてやろう。奇抜な服を見つけてくれないか、そして君も何か異国風のものを着てくれよ」

数分後に、各国の記者の前にあらわれたときのわれわれの姿は、何ともいえないものだった。ソルジェニーツィンは赤い小人の帽子をいたずらっぽくかぶっていた。

記者の一人は満足して、リレハンメルや、気温の少し高いオスロへ戻って行った。連中が立ち去ったあと、深雪に蔽われたここは素晴らしく静かで平和だった。ソルジェニーツィンと私は散歩に出てそれを楽しんだ。動物が冬ごもりしている納屋に入って、わらの中で満足そうに寄り添っているのに聞き耳をたて、静かに見つめていた。

すると、突然、彼は荒々しく前に唾を吐きすてて叫んだ。

「集団農場制のおかげで、どんなにみんなが惨めな思いをしたことか、農業はこうでなくちゃならない——誰もが自分の小さな農場をもつことだ」

検問所の護衛視が、二人のスウェーデン人の学生がきたと報告してきた。入れてやるようにソルジェニーツィンはいった。農場にいくると、一人が「ビクター・シュパラーさんですか」と私に尋ね、「ソルジェニーツィンさんの手紙を受け取りましたか」ときいた。ソ連から例の手紙を運んだのは彼だった。ソルジェニーツィンは、流暢なロシア語を話すこの二人と別室へ行った。

その間、私はテレビを見ていた。ニュースのときにはソルジェニーツィンを呼んで見せた。彼は午後の娯楽番組を見て笑いこけた。私は少しものまねを試してみた。写真ぎらいの彼がソ連でたまに写真を撮らせたときには、恐ろしいくらいきびしい表情をしていた。事情がきびしいのだから、それにふさわしい表情だといったことがある。しかし彼は、ユーモア好きでもあったのだ。ものを書くときは、まるで何者かに強要されているような勢いで没頭するのだが、そうでないときは快活で話し好きで魅力的であった。鋭い皮肉からグロテスクともいえるおどけまで、幅広いユーモアを彼は持っていた。この一匹狼とつき合うのは、ユーモアを通してだと、私は自分にいい聞かせた。

二人のスウェーデン人と私たちの共通語で話をした。二人の役目はモスクワに行き、図書

館やソルジェニーツィンの古い文献の中から、資料を得ることだった。彼は今、歴史ものの大作を手がけていた。この冒険でソ連を訪れる機会を失うかも知れなかったが、充分価値があったと二人はいつていた。

ヘッケと私は、翌朝早く起きた。しかし、客人はそれよりも早かった。朝食は八時にしたが、彼はそれまでもう一時間ほど書きものをしていたとのことだった。その日はまず、彼が落ちつける適当な場所を物色する予定だった。二人のスウェーデン人は報道関係者の目を逃れるため、われわれが出たあとで静かに去ることにした。

まず最初に、ウンドセットの家に向かった。エリック・エーゲランドがそこにいたが、四年前に彼の果した役割を、ソルジェニーツィンに話すと、彼もロシア式に抱擁された。

シグリッド・ウンドセットの息子が誇らしげに、ソ連のウォッカだといってソルジェニーツィンに酒をすすめたが、ソルジェニーツィンはポーランドのものだといいい張った。いずれにしても彼は、強い酒は飲みたくなかった。

私たちは、丹念にその家を見て回ったが、ソルジェニーツィンが、買う気を起こさなかったのも無理からぬことで、それはまるでシグリッド・ウンドセット博物館のようだった。

新しい主があらたに入るためには、先住の幽霊にご退出願わなければならなかった。私たちはそこを出た。ソルジェニーツィンはどんなさ細なことでものがさず、他人には読めない

ような小さな字で書きとめているのを知った。

護衛の人の車を従えてわれわれは自動車を走らせたのだが、ヘッゲと私は昔からの習慣や建物や歴史上の出来事などについてくわしく話した。彼は、すべてを細かい文字でノートに書きとめた。急な山道を、車がタイヤをきしませながら登っていく途中では、バイキング王「聖」オラブのことを話した。この王は古い偶像を棒で打ちこわしながら、農民にキリストか死かの選択をせまり、国をキリスト教化した人である。

「ロシアそっくりだ！」と彼は叫んだ。

「われわれをキリスト教徒にしたのも剣によってだった」

——
家 搜 し

ソ連を出てからの彼は、お金の心配をする必要はなかった。ノーベル賞の賞金はいうまでもなく、著作からの印税は急速に増えるばかりだった。ノルウェーでどんな不動産でも買って相当な生活をする事ができた。

いくつか見たなかに美術収集家の家があった。ノルウェーで、現代フランス絵画の最高のコレクションをもっている人である。彼の屋敷内にはとくに美しい丸太作りの古い家がいくつかあって、内装は超近代的であった。百万ポンドで売ってもよいということだった。その家

の主人で美しい髪をした上品な年輩の女性が、豪華な応接室にわれわれを迎えてくれた。大きな暖炉には丸木が燃えていた。白衣の給仕がシャンペンとソ連産のキャビアを持ち回った。最近までソ連の牢獄にいたこの男、どんな反応を示すだろうか。彼は謎そのものであった。

私たちは、部屋から部屋へとなじみ深い博物館を巡るように、見てまわった。最後に彼女の個室に案内された。彫刻をした金箔の額に入った絵がかかっているのに私は気づいた。

「これは私の一番好きな絵です。手放したくはありません」と彼女はソルジェニーツィンにいった。

この瞬間まで彼女の関心は、ノーベル文学賞受賞者に注がれていたのだが、その絵の作者が実はこの無名のノルウェー人だとわかると、啞然として私を見つめた。彼女の貴族的構えが消えうせた。

そこを辞してから、財政的にもっとも困っていたときに、あの絵を売って飢えから救われたことをソルジェニーツィンに話すと、彼はいった。

「自分の絵とよく別れられるものだね。私の作品はいつも私のものだ」

今見てきた屋敷を彼は気に入らなかった。「ぜいたくはきらいだ。そんな気がしない」と彼はいった。彼が求めていたのは静けさと素朴さであった。

その日夕方まで口にしたのは、あのとときのキャビアだけだった。水は別としてシャンペン

以外のものは飲まなかった。仕事日に飲み食いするのは、時間の無駄だと彼は思っているらしかった。

私たちが訪ねた家の一つに、著名なノルウェー人画家の家があった。ソルジェニーツィンは著書の中で、たびたび絵のことを書いてるので、どれほど深い理解をもっているか知りたかった。抽象画を見ながら、私はソルジェニーツィンの意見をきいてみた。

「ただ無意味だね」と彼はコメントした。

「彼は現存するノルウェーの画家の中で、もっとも安定した名声を得ていますよ」と私は抵抗した。

部屋におかれている立派な家具を指さして、

「骨董品の椅子を持っているくせにモダンな絵を描く人だ」といって、自分の好みをはっきり示した。そして「私は古くさすぎるのかも知れない」とつけ加えた。

観察するソルジェニーツィン

午後、リルレハンメルにある有名な野外博物館マイハウゲンに出かけた。そこには十二世紀の階段教会があり、その前にはさらし台があった。私は、先に行ってそこに自分をはめこんでみた。両手を鎖でしばり、首かせの錠をかけた。ソルジェニーツィンが角を回ったとき、

さしものものに動じない彼も驚愕の表情を見せた。拷問の遺物に首をはさまれた私は、ほとんど口もきけなかったが、ヘッゲが代わりに説明してくれた。その昔、罪や非行を犯したとき、懺悔をする場所であったのだ。

「気の毒な罪人は、自由意志でそこに行ったのか、それとも強制されたのか？」とソルジェニーツィンがたずねた。

ヘッゲが「誰も自分から行った人はいない」と説明すると、このソ連人は、われわれがその昔「同ぜぬ者たち」をどう扱ったかを知って衝撃をうけたようだった。彼は私の鎖をほどいて、私を自由にしてから自分が入った。そして、彼の小さなノートに夢中で書き込んだのである。

八時まで何も口にしなかったので、空腹を埋め合わせるように充分いただいた。ソルジェニーツィンは、何一つ残さず食べた後、きれいにパンの切れはしでふきとった。カロリーは少しも無駄にされなかった。これが獄中の習慣の名残りとも思ったようなことを私がいっただが……。彼はちょっと考えてから首を横に振った。それはごく小さいころからの習慣であった。

彼の育った環境はけっして楽ではなく、四十歳になるまで、われわれ西側でいうような家に住んだことはなく、いわば「小屋」に住んでいたという。冬の寒さを充分しのぐ燃料もな

かった。

この農場では燃料は充分にあった。食後、居間の燃えさかる暖炉の前で、その日に書きとめた記録を整理しはじめた。破って燃してしまふものもあった。こうした癖も捨てきれないものだと彼は説明した。この二十年間、毎日の終わりに危険なものはこうして全部捨ててきたのである。いつ何どきKGBがくるかわからないのであった。

ラジオのニュースに、定期的に聞き入るのも現代ソ連の習慣だった。ドイツでもらった巨大なバッテリー付きのラジオを、行く先々に持ち歩いていた。ソ連のニュースやミュンヘンの自由ラジオ放送の番組の時間を知っていて、貪るように聞き入った。そのほとんどが彼についてであり、われわれの旅の逐一が伝えられていた。

ヘッゲに全部ロシア語に訳してもらわない限り、ソルジェニーツインと私はドイツ語で話さねばならなかった。両方とも、同じように下手にドイツ語を話すのを聞いて、ヘッゲは吐き出すようにいった。

「二人の話をきいたらドイツ語の先生があきれよ」

「文法なんかそっちのけで話しているんだよ、でもお互いよく理解できるんだ」と文章の達人は朗らかにいった。

ノルウェー人というのは、格式ばらない人種なので、人に対しても形式ばらない「ドゥ」

(D u お前)で話しかけるのが常だが、ソルジェニーツィンにははじめから“ドゥ”を使った。ドイツ語でいうのは、ちょっとぎくしゃくしないでもなかったが、ヘッケはあきれていた。

ソルジェニーツィンも「ノーベル賞受賞者に対する呼び方か？」とでもいいかげんに私をながめた。ソ連では夫人のナタリヤ以外にティ(Ty D uに相当)で呼びかける人はいなかった。「ロシアでは神と皇帝(ツァー)だけに、D uを用いるのだ」と彼はいった。

「アレキサンダーよ、今君はノルウェーにいるんだよ」と私は答えた。

夜、彼はナタリヤに電話した。彼は毎晩そうした、とヘッケがいった。

夫人と子供たちは、まだモスクワにいた。彼は、家族のことを深く心配していたが、再会ができるかどうかの見当はつかなかった。彼は、また、古い文献のことがとても気にかかっていた。文筆活動にとって必要であったばかりでなく、いつK G Bにおさえられるかもしれない。なかつた。

——
フイヨルド見物

翌朝、朝食のとき、ソルジェニーツィンはいった。

「今日はノルウェーのフイヨルドを見たい」

われわれのいるところは、ノルウェーの東部で、フイヨルドは山脈の向こうだった。この

山を冬に越えるには北か南の端しかなかった。しかし、ヘッゲと私は逆らっても無駄と悟った。われわれは荷物をまとめ、アーンダルスネスへの長い旅へ出発した。地方の警察官が運転してくれ、護衛の人たちは例のごとく車であとについた。

間もなく、報道陣からのがれることができた。われわれの運転手が気転をきかしてリルレハンメルの裏道で連中の車をまいてしまった。

アーンダルスネスでは、深い霧がフィヨルドに立ちこめ、そびえ立つ山の間をせまいところを歩いたが、ほとんど何も見えなかった。戦時中、私の乗った病院船がフィヨルドの中で爆撃されて以来ここにきたことはなかった。

その日は、一杯のコーヒーにありつけた。駅のカフェテリアで飲んでいる間、ソルジェニツィンはニュースに聞き入った。

「われわれを三銃士と呼んでいる」と彼は報告した。

駅を出て陸の上に立って、貨物列車が下を通るのを眺めた。ソルジェニツィンがいった。「モスクワの郊外に住む男で仕事に行く途中、こんなふうに橋の上から列車の通るのを見ていた人がいた。スパイ容疑で十年間の刑をうけたっけ」

町はずれで、ソルジェニツィンは道からはずれたところで小便をした。運わるくいっばいの人をのせた車が通りかかった。テレビや新聞で有名になった彼とわかると急ブレーキで

とまり、電光石火の速さでバックしてきた。カメラの放列が彼の姿をとらえた。

「アレキサンダー・イザエビッチ、これは大変なスキャンダルだ。あなたの西側に対する率直な考えを表現する様子を、世界は写真で見るとどう思うよ」

と私がいうと、彼は笑い出した。そして、私の腕をつかんでいった。

「君はユーモアを解する」

初めて私をドゥと呼んだ。それ以来、二人はドゥの間柄である。

次の夜、私たちは戦争中、ロシア人をかくまっていたことがあるという老夫婦に夕食に招かれた。まだ玄関にいるうちから、主人はカップやスポーツ写真を指しながら、それらにまつわる話をはじめた。ヘッゲの通訳が、この古い手柄話を二倍に引き伸ばした。間もなくソルジェニーツィンのしわの多い額からは、まだいくつ老夫婦の自慢話が残っているか、またこれだけの時間があったら寝室で何ページ書き物ができていたかを数えているのが読みとれた。彼は退屈さをかくさずに切り出した。

「ノルウェーの木製の古い家具は、ありませんか？」

長年の趣味だったのである。台所にいた奥さんがこれを聞きつけて顔を出し、不思議そうにいった。

「そのテーブルは五十年くらいのもんですが」

「時間がないのでこれで失礼します」

と作家はきっぱりいって、さっさと家を出て、ホテルに向かつて歩き出した。護衛の人もあわてて隊を乱しながらあとにつづいた。ヘッグと私は、できる限りの詫びをいってから外に出た。一人だけ先を歩くソルジェニーツィンだけが悠々としていた。

このような行動も理解できないことではなかった。人生の十年をスターリンに奪われ、続いて戦争によって四年を失い、しかも一応押えられているとはいえ、ガンが寿命を縮める可能性があるのだ。普通の人の半分の人生で仕上げねばならないライフワークがある、と彼は感じていた。信仰と真理に邁進する彼の情熱に立ちほだかるものは、何であれ許すことができなかつた。時間がどんなに大事かをヘッグに何とかしてわからせようと、大きな節くれだつた手をふりあげて叫んだ。その親指はつぶされていた。

「まだ書かれていない本を書きたくて、私の指はうずいている」

この小さなホテルで夕食をしながら、つねに攻撃的な彼の態度に感心しているというのと、彼は、ナイフとフォークを強く握りしめて、シャドウ・ボクシングの真似をして言葉をうけいれた。

「敵が攻撃してくるのを、黙って待つようなことを私はしない。自分の方から攻撃する。敵が、次にどんな手を打ってくるかを予測するのだ。敵の陣営の中で闘うことは避ける。敵が

もつとも攻撃を予想していないときに、しかも自分に有利なところで勝負する。私の追放が、KGBを有利に導いてはならない。連中の鼻をあかすものが用意してあるのだ」

——
信仰にいたった道のり

彼はその後、間もなく出版された『ソビエトの指導者への書簡』に触れた。

後に彼と二人きりになったとき、どうして信仰を持つようになったかを尋ねた。生地セント・パンタシオン教会で洗礼を受けたとのことだった。もの心ついたときには、教会に行っていた思い出がある。ある日、礼拝の最中に革命の兵士がなだれこみ、教会の財産を没収したこともあった。

彼が六歳のとき、一家はロストフ・オン・ドンに移った。通りの突き当たりには巨大な壁があった。毎日学校から帰る途中、その壁の前に何時間も立っている女の列を、十年間、彼は見ていた。壁の後ろに何があったか知らない者はなかった。それは秘密警察であり、妻である女たちは差し入れに来ていたのである。

その間に、他の多くのソ連市民と同じように、彼もまた壁の向う側で起きていることに對して、間違った認識を持つようになっていった。階級の敵を根こそぎにし、新しい労働者国家のために必要な新しい人を作りあげようとしているのが、秘密警察の役目だと思ふよう

になった。彼は黨員にはならなかったが、マルクス主義者となり、社会主義国家に奉仕する理想主義者となっていた。

「あなたのすべてを導いてくれる神に対する信仰を、どうやって見出したのですか」と私は尋ねた。というのは、自分を西側に遣わしたのはKGBではなく神であった、と彼が私にいったことがあるからだ。

「収容所の中です。私のような人は他にもたくさんいます。収容所の苦しい生活の中で子供のころの信仰へ戻ることができたのです。それは突然ではなく、徐々にでした」

そこで、私は彼に聖像イコンを手渡した。若いロシアの夫婦が、偉大な愛国者に上げてほしいと私に懇願したものである。とくに古いとか上等であるといったものではないが、彼らにとって大切なものであった。それは、結婚のお祝いにももらったもので、式の中でロシア正教教会の牧師が祝福してくれたのである。

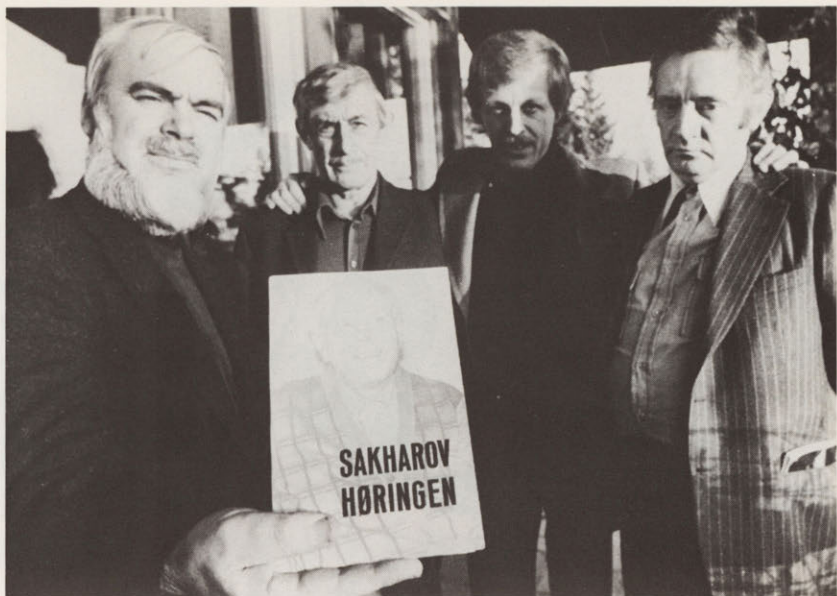
それを受け取るべきでないと思つたが、ともかく一晚預かっておくことにした。翌朝彼は、その若夫婦宛てに心のこもった手紙を書いた。列車でオスロに帰ることになった。聖像を私が預かって、あとで返そうといったが、ソルジェニーツィンはもうしばらく持っていたという。列車の中で彼のブリーフケースの中に入っているのを見て、「私が持ちましようか？」というとき彼は答えた。



モスクワへ——反体制派の灯台、サハロフ訪問

▲著者シュバラ、サハロフ夫妻をモスクワの小さなアパートに訪ねる。(一九七三年)
▶ソルジェニツイン、サハロフ、マクシモフと会うため、モスクワを訪れたシュバラ。(中央手前、一九七三年)





コペンハーゲンで開かれた「サハロフ公聴会」に集まった同志たち。右から作家ウラジーミル・マクシモフ、グナー・ミュー（ノルウェー人ジャーナリスト）、作家ビクター・ネクラーツフ、そして著者。（1975年）



スイスのMRA本部でインタビューに応える詩人、劇作家アレキサンダー・ガリーチ(左)。彼の“禁じられた”抵抗と希望の歌は、人から人へと全ソ連に流れている。



西側での亡命者たち——



◀ 西独のノーベル賞作家ハインリヒ・ベルのところから、シュッパラーの招待を受け、ノルウェーに着いたソルジェニーツィン（右、左はシュッパラー）。この写真が撮られた一〇日前には、死刑になるかもしれない、ソ連の牢獄に留置されていた。（一九七四年）

▼ 同志たちが集うシュッパラー家で。地下出版の先駆者の一人ウラジーミル・ブコフスキー（右から五人目）右端が著者、左端は著者夫人アセマリ。





サハロフのノーベル平和賞受賞を讃えるオスロの松明行列を見つめるサハロフ夫人エレーナ。この晩、サハロフはリトアニアの法廷の外で、夜通し雪の中に立ち尽していた。(1975年)

サハロフ受賞に尽力したオーヤ・リオネス(右。ノルウェー・ノーベル賞選考委員会会長)とエレーナ夫人(中央)、そして著者。(1975年)



暗闇の中の一灯
 — サハロフのノーベル賞受賞

「この聖像はもらっておくことにするよ。私には必要だ」

そしてそれをブリーフケースから大切そうに取り出し、寝台車の枕の後ろにたてかけた。

——
安住の地を求めて

ここで私は、彼の著作についてあえて質問をしてみることにした。それまでは意識して触れずにいたのであった。

「君に聖像をあげたいといった夫婦の奥さんの方は、君の小説の中の女性についての研究をしている。だが、実際ごくわずかの女性しか登場していないね」

「君のいう通りだ」と彼は同意した。

「彼女にあと数年待つようにいってくれ。私はまだ女性を充分に書いていない」

旅行中のことであるが、彼は細かに書き込んでいるノート越しに私にいった。

「画家の君が三日間も画筆を持たずに、どうやって生きられるのかねえ」

かつて「真理」を求めて苦悩したことがあって、三日どころか二年間も画筆に触れなかったことがあった。しかし、口には出さなかった。

オスロでは、グランドホテルの豪華な部屋に泊ったが、彼は落ちつかなかった。ノルウェー議会で、われわれは四人の議長に迎えられた。めったにない光栄である。彼はその椅子の

一つに座ってみようとした。

「ノルウェーに住むことになれば、選ばれて議席を持つ日もあるでしょう」

と私がいうと、同席のノーベル賞委員会のオーヤ・リオネス委員長がいった。

「アレキサンダー・ソルジェニーツィンに私の議席をおゆずりしよう」

しかしソルジェニーツィンは、ノルウェーに落ちつかなかった。ノルウェーに到着してから四日目の翌朝、妻と三人の娘と私は、オスロ駅で彼に別れを告げた。

行く先は、スイスであった。ベルを尋ねたときに馴じみになっていたこともあり、彼がもっとも望んでいるものが、そこで得られると思ったのであろう。それは、無名人として平和と静けさの中で生き、しかも人に騒がれずに、ヨーロッパと西側の鼓動が感じられることであつた。ところがそれに今一つの条件が加わってしまった——KGBの手からの安全がそれで、とうとうヨーロッパを後にしてアメリカに渡る事になってしまった。

彼が、家族といっしょにやっと落ちつくことのできたアメリカ北東部の土地には、岩の多い小さな湖があつて、

「あの岩からいつか、ロシアの故郷へ翔ぶのだ」

と彼は、息子たちに語っている。

ソルジェニーツインの性格は、複層的である。彼の目は憂鬱で内省的なものを漂わしているが、額は大きくすっきりしている。右の額の上にくぼみがある。事故か戦争で打ったものであろうか。生まれつきのものではないかと私は想像する。これがなかったらすっきりしてよくまとまった顔なのに、と私は思う。これでバランスがくずれ不調和な感じを与えている。そして、人が初対面のとき受ける印象よりも複雑な性格の持主であることを伝えている。一度こうと思ったら執拗で近づき難い人ではあるが、そんなときでも上品な魅力を失うことはない。

彼は、主として行動する人びとを書いている。抽象的議論はけっしてしない。人とその経験、実際の人と実際の経験とを描く。普通いわれる意味での作家ではないと彼はいう。つまり創造するのではなく、眞実を復権するというのだ。

最初の作品の経過が、ソルジェニーツイン自身について多くを語っている。彼は、シベリアの収容所の石切場で、一日十二時間働いていた。食物は長く生きながらえるには、不十分だった。紙も鉛筆も手に入らなかった。長く生きそうにもないこの人の執念が、彼にそれまで本を書き出させた。散文よりも韻文の方が記憶しやすいので、一万行の詩を作った。袴を外

して小石をつめ、毎晩その石をまさぐった。その一個が一行を表わしていた。

この収容所から出されたとき、ただちに、「征服者の祝宴」という詩を書いた。

彼の作品に登場する人物は、彼と同様の運命をたどっている。つまり、残酷なまでのなまなましきで描かれた苦難を体験したにもかかわらず、奇跡的にも悪に汚染されることがけっしてないのである。

処女小説『イワン・デニソヴィッチの一日』が、一九六二年に出版されたとき、プラウダの書評もこの点を指摘した。

「この素晴らしい小説を読むと、私たちの魂が満たされる。それも、単に悲しみで満たされるだけでなく、光によってである。これはどういふことだろうか？ 答えは深い人間性であるといえる。どんな状態におかれても、人間が人間としてとどまりうるということである」

ソルジェニーツィンについての、この優れた描写は、宗教心の厚い人によって書かれたかと思われるが、そうではないのだ。これを書いた人自身、スターリンの行なった粛清に参加したことのある教条的マルクス主義者のV・エミロフである。

芸術というものは、だいたい芸術家の個性の表現である。しかし、聖像のような最高の芸術ともいえるものは自己が否定されたとき、そしてその空間をひらめき、埋めるときに生まれる。ソルジェニーツィンは十四歳のとき、壮大な叙事小説三部作を書こうと思い、その

材料集めをはじめた。その第一部は『一九一四年八月』である。この三部作が完成すれば、彼の生涯を通しての輝かしい作品となったであろう。

五十代のとき、同じく長編ではあるがまったくちがったものを書くことになった。『収容所群島』がそれである。彼の動機はもはや偉大な文学の創造ではなく、収容所で生命を失ったり、生き続けている人びとに対する天与の義務感であった。苦しんでいる多くの人びとについての真実を記録することが、全能の神から課せられた務めであると彼は感じたのである。『収容所群島』は、現代の最大の悲劇を実に力強く表現している。自己を超えた命に従うことによって、ソルジェニーツィンは世界の文学界に特筆すべき貢献をなしとげた。

最初の小説が出版されたとき、ソ連の通信社タスは作者の生涯について詳しく紹介した。後になって悔やんだにちがいない。

▽アレキサンダー・イザエビッチ・ソルジェニーツィンは、一九一八年キスロポドゥスクに生まれる。幼くして父を亡くし母の手によって育てられる。中等学校を経て、ロストフ大学に学び、物理学と数学を習得、一九四一年に卒業した。

▽同年召集を受け、一兵卒として従軍。一九四二年砲兵学校の課程を修了し砲兵中隊長に任命され、一九四五年二月まで前線でこの地位にある。その間二度にわたって叙勲を受ける。

▽一九四五年二月、陸軍大尉として任地の東プロシアに着いたとき、虚偽の政治的証言によ

り逮捕され、八年の刑を宣告された。刑をまっとうした後でさらに追放処分をうける。

▽一九五六年にやっと放免される。一九五七年になって、事実無根のゆえに罪は犯していなかったことが証明され、名誉回復が認められる。現在は物理学と数学の教師として働く。

これは、ことごとく事実である。後になって、また彼を悪人に仕立てようとの意図で宣伝がはじまるが、今度はソビエト人民からばかりでなく、世界からも彼を抹殺しようというのである。

莫大な印税と不変の生活

印税から数百万というお金が入ろうと、彼の生活様式は変わらない。チューリッヒにいたとき、車を一台持っていたが、それでもよく市電に乗っていた。早朝のミルクも自分でとりに行った。フランスのテレビに出たときも、私が二年前にモスクワであげたセーターを着ていた。贅沢は彼の趣味ではないのである。

全世界の出版社から入ってくるお金のほとんどは、ロシア・コミュニティ基金に納金される。このお金は国際収支を助けるという理由でロシア国内への送金が許されるが、それは、迫害を受けている人びとやその家族の援助にあてられる。この基金は、アレキサンダー・ギンスバーグによってソ連で管理されたものである。ソ連政府は、このような基金への寄付に

七五パーセントの税金を課している。

ソルジェニーツィンは、ソ連から持ってきた古くてみすぼらしい高い書き机に立ったまま、原稿をペンで書く。仕事場に家具はほとんどおいていない——大きな彫刻のあるテーブルと母親からゆずられた椅子、それに二つの聖像があるだけだ。

四十歳のナタリヤは、彼のもっとも重要な協力者である。彼女は夫の著作に奉仕することを、ライフワークとしており、彼の原稿のすべてを訂正する。そして彼に、安らぎと静けさがいつも得られるようにと心を遣っている。作家と会いたい人は、まず、ナタリヤという障壁をのり越えなければならぬ。彼女自身特性がないわけではない。数学者として学位を持ち、山登りに凝ったこともある。

一九七四年に、ソ連当局がソルジェニーツィンを国外に追放したとき、彼らは良心をしつこくゆさぶる声から逃げおおせたと思ったであろう。莫大な収入とおだてとが、彼を墮落させることを期待してもいたであろう。西側の人たちも人と歩調を合せるつき合いのいいノーベル賞受賞者を迎えると思っていたが、これも見当はずれだった。

——
信仰に生きる人

追放の直後、スウェーデンのデエイェンス・ニヒターの編集者ウラブ・ラーガクラン

ツが、ノルウェーのラジオの討論で語ったことを思い出す。

「ソルジェニーツインは、もはやモスクワにいないのだから、彼の著作の意義がなくなるであらう。西側のマスコミに出るのも恐らくこれが最後であらう」

ところが、それから数年後の今日にいたるまで、ラーガクランツはラジオや新聞でソルジェニーツインに関する討論に、定期的に参加しているのである。

ソ連の反体制者の中で、サハロフだけがソルジェニーツインとひとしい地歩を保っている。二人は親友である。

ソルジェニーツインに最初の子が生まれたとき、彼の喜びはひとしおであったことをエレーナが話してくれた。長年の牢獄生活とそれに続く追放を通して、父親になる可能性をスターリンに奪われたのではないかと考えていたからである。

彼は、第一子の誕生をとくに祝おうとウォッカを一本持ってサハロフを訪ね、二時間暇を作ってきたといった。通常はアルコールに手をつけない二人であるが、このときばかりは祝杯をあげた。きっかり二時間たったとき、ソルジェニーツインは立ち上がって瓶にふたをして、著作に戻っていった。

作品の中で人物の個性を浮き彫りにする人ではあるが、自分のことはあまり表わしたがらない。しかし『イワン・デニーソヴィッチの一日』の出版後に書いた祈りの言葉は、彼自身

の魂の深さを垣間見させるものである。

主よ、あなたとともにあることは本当に楽などんなにたやすいことでしょう

あなたを信ずることが、私にとってどんなにたやすいことでしょう

私の心が疑いに悩まされ、諦めそうになるとき

最高に知的だと思われる男たちが、やがて訪れようとする夜から先は何一つ見えず、明日になって何をするかわからないようなとき

あなたは私にはつきりと確信を与えてくださる

あなたがそこにあつて、善良なる道のすべてがさえぎられているのではないことを、保証してくださいとすることを

この世の名声の頂点から絶望をぬけて、今、私はあなたの光をあまねく人類に伝えることができる。なんと素晴らしいことであろう。

この世に生ある限り私に与えられるすべてのものは、皆あなたからのものであり、私の手に届かないものは、あなたが他の人のために用意されたものである。

2 フィヨルドを渡る詩

ソルジェニーツィンがソ連から追放されて二週間ほどしてから、マクシモフも西側に出てきた。彼の出発は自由意志によるもので、当局は、厄介な反体制者を海外に送り出すことを政策にしはじめたというわけである。

フランスのペンクラブからパリに住むようにとの招待を受け、マクシモフは旅行願いを出し、即座に許可された。出国直前に結婚した彼は、新妻を連れていくことも許可された。ロシア語しか話せない人なので、外国語に堪能な彼女なしにはどうにもならなかった。

『創造の七日間』（邦訳書名。原題は *The Seven Days of Creation*）というベストセラーの小説の中で、マクシモフは自らの子供のころのことを描いている。一九三二年、レニングラード

生まれだが、両親は労働者である。十二歳のとき、父親がスターリンにより投獄され、家を出ることになる。後に父は戦死する。数年間孤児院を転々とするが、逃亡ばかりして不良仲間に加わったため、少年院に送られた。十八歳のとき、彼は建設労働者として訓練されレンガ積み職人になる。太い腕はいまだにそれを物語っているが、その先には細い貧弱な手がついている。もともとは大きく、力強かったのであるが、牢獄から逃亡しようとしたとき、監視が彼の手をつぶしてしまった。掌が折り曲げられているように見えるのもそのためである。その手や腕を私は眺めることがあるが、彼の人生のすべてが語られているように思われる。頑強なプロレタリアートから今日の繊細な芸術家でインテリの彼が生まれる、信じられないような過程を思うのである。

——西欧で活動するマクシモフ

作家としての経歴は、一九五六年に詩集を出版したときにはじまる。続いて劇や小説を書き、また文芸雑誌十月の編集にたずさわったこともある。

一九六七年、彼の名は、ソ連で出版を許される作家のリストから説明もなしに削除された。続いて一九七三年には、二冊の本を海外で出版したことが、反ソ宣伝にたずさわったこととされ、作家協会から追放された。

ソルジェニーツィンいわく、

「ウラジーミル・マクシモフは作家協会には属せない。あまりに多くの真実を知ってしまった」

重厚で深刻なマクシモフは、滅多に笑わないが何かの拍子に相好をくずすと、まるで耳もとまでさけるような表情になる。心をむき出しにしているような人で、それだからこそ人に愛されるが、一方、嘘や間違った妥協とは徹底して闘うという意味での危険な敵でもある。

パリに落ちついでからも彼は、かつてソ連でしたように西ヨーロッパを飽きずに旅した。在ソ時代と同じように、今でも反体制運動を構成している強力なソ連人の中心である。ソ連人の中には、在来の境遇から引き離されるとダメになってしまう人もいるが、マクシモフとソルジェニーツィンは、灯台のようにそびえ立っている。二人とも未来に対して根強い信仰をもっている。マクシモフの作品中の人物の言葉がそれをよく表わしている。

「川はいつの日か、もとのところへ戻るものだ。自分の生涯のうちでなければ、子供の代に……」

ソルジェニーツィンのように、マクシモフは大きな希望に胸をふくらませて西側にきた。二人とも十年以内には、体制の変わったソ連に戻れると考えていた。西側の人たちが自分たちの希望している、道義的ルネサンスのための闘いを全面的に支持してくれるものと考えて

いた。現実には二人を失望させた。結局、真理を求めて自分たちの精いっぱい力で闘い、あとはより高い手にまかすしかない、ということをも悟った。

マクシモフは、反体制文学評論コンティネット（大陸）の編集者かつその推進者となった。

この雑誌は現在、国際的に称賛されており、東ヨーロッパにおける民主的反対運動の代弁者として認められている。この発行に際して、追放者たちは、古いロシアの伝統を踏襲した。

アレキサンダー・ヘルゼンが反皇帝評論コロコルを出版し、それをロシアに密かに送り込んだのは、ちょうど百年以上前のことであった。今日、コンティネットは八カ国語で出版され、全ヨーロッパに流されるほかに、毎号、千五百部ずつがソ連にも密かに送られている。

反体制者の中で、マクシモフほど典型的なロシア人はいない。しかし他方、彼ほど普遍性を持っている人もいない。それだから、彼の言葉は鉄のカーテンの両側に通用するのである。銃でも爆弾でもない。人の心にしみ入るように巧みに表現される真理が、彼の武器である。

「ソ連の指導者は、どんな障害があってもとどまることをしない連中だ」

と彼はいったことがある。

「人がきのこを食べるところ、連中は人の肉を食べる。むしろ、比喩的にいってのことである。人間の命など眼中にない連中だが、おかしなことに、この政治的なマフィアは他からよく思われようと望むゆえに、自分に不利な宣伝を意外におそれるところがある。人食い虎だ

が、人間の顔はしたいのだ。われわれをどのようにして助けることができるかとときく人になりたい。「宣伝、宣伝、宣伝」に限る」

—— ガリーチの十字架

不思議なめぐり合わせで、二人が反体制者として友情を結ぶ何年か前に、マクシモフはガリーチを一度見かけたことがある。ガリーチが、州立劇場に笑劇を書く作家として成功していたころのことである。ダンディさながら髭を生やし、みごとに背広を着こなして、銀取手のついたステッキをくるくるまわしながら、地下鉄から出てきた。一方、若いマクシモフは、ボロ服を着て、この色男がとおりするのを眺めた。

マクシモフが西欧に出發したあと、KGBはガリーチもユダヤ人としてならいつでも出国させる旨を何度も彼に知らせてきた。このころ私は、毎週モスクワに電話してガリーチと接触した。元気かと尋ねると、「まあまあ」という返事であったが、「もうダメだ」というときもあった。

そのころの彼の状態は、絶望的で、健康もよくなく、仕事の目当てもなく、食べ物を買うため、家具を売り払っていた。しかし亡命するかどうかは、彼自身が決めるべきだと心にきめていた。私は一度だけ、ベルゲンでの私の絵の展覧会の開会式で、彼に歌ってもらえたら、

と誘ったのがせいぜいである。電話の向こうからの返事は、

「おとき話みたいけど、可能だね。今週ビザを申請するつもりだ」

しかし、それでも彼は動かなかった。とうとう私は、パリのマクシモフに電話して状況を話した。次にガリーチに電話したとき、彼の調子はまるでちがっていた。マクシモフは、ソ連人同士でなくてはいえないことをいったのだ。彼を頭ごなしにどなりとばしていたといっていた。すぐさま彼は移民局に行き、ユダヤ人として出発するビザ申請書を提出した。

すぐにビザがおりました。そしてアンゲリーナと彼は、準備を整え荷作りするのに、たった三日しか与えられなかった。ユダヤ人がイスラエルに移民するのに、ウィーンが中間着陸地として使われていた。私はウィーンのノルウェー大使と連絡をとり、ガリーチ夫妻が到着したらイスラエル行きの待合室からすばやく連れ出すようノルウェー大使館で手筈を整えた。ナンセン・パスポート〔探検家ナンセンが、難民救済のために考案したパスポート〕をもらって大使館に迎えられ、ノルウェーに送られるということであった。

モスクワ空港出発に際して、係官がガリーチの身につけていた洗礼のときの金の十字架をとりあげようとした。それと別れるくらいなら、飛ぶのをやめるが、そんなことになったらモスクワ駐在の外国人特派員全員に「前代未聞の弾圧」を公にすると脅かした。これはさすがに効果的で、十字架をとりあげられずにすんだ。

数日後、私は妻のアセマリーといっしょに、オスロ空港で大手を広げてガリーチ夫妻を迎えた。アレキサンダーは、古い灰色のカバーをかけたギターをもってきた。

「囚人服のギターだよ」と彼はいった。

最初の一カ月を、二人は私たちのところで過した。

アレキサンダー・ガリーチと私は、あらためて友達になる必要はなかった。会う前からもう友達だったのだ。彼の方が私より十二年以上、つまり十二日だけよけいに賢かった。

彼は実に多くの劇を書いていた。そして、「とるに足りない劇」と彼がいうもののうち、十四が州立劇場で上演されていた。彼が初めて本気で真実を書いた劇は、当局に拒否された。彼はまた、映画監督としても卓越した仕事をしている。

映画制作者協会から追放された後、彼が制作した映画のタイトルから彼の名が黒く消された。だした。そのころの彼は失業していたので、社会の寄生虫として投獄される危険があった。

「これがソ連では人を投獄するやり方なのです。まず仕事を奪い、次に非生産的だという理由で逮捕するのです」と彼はいった。

それでも、できることならソ連から出る気はなかったという。作家や芸術家は故国にいて

はじめて、名声をあげることができると、ソ連人は固く信じているからだ。私は思った。ノルウェーではこれとはまったく逆で、自国においては並み以上にはなれないと一般に思われている。国外に出なければ認められないのである。イブセンにしてもローマで名が出たとき、はじめて偉大な作家として母国で認められたのであった。

十七歳のとき、ガリーチは演技を学ぶため、スタニスラフスキーの教える学校に通ったが、三年経った後の彼の評価は、「アレキサンダー・ガリーチは、傑出した人になると思われるが、俳優としてではない」と。彼は俳優になるのをあきらめ、詩を勉強することにした。たいして上手でもない笑劇を書いていた時代でも詩や歌を書き続けた。

パステルナークは、日常の話し言葉（口語体）を使って、新しい息吹きをロシアの詩に与えた。スターリン時代の収容所の中で、さらに新しい日常語が生れた。世俗的で、荒々しく、皮肉たっぷりな、それなりの美しさを持っていた。スターリンの死後、収容所から出てきた何百万の人たちによって、ロシア語は変わってしまった。ガリーチはこの新しい言葉をたくみに使った。

苦惱と希望の歌

初夏の暖かい夕方、私たちはフィヨルドを一望におさめ、ベランダの椅子に腰かけて、ガ

リーチが自作の歌を歌うのに聞き入った。彼はまず私たちに歌詞を説明してから、ギターに合わせて歌うのであるが、彼の魂をゆさぶる苦悩と希望がほとばしり出るのであった。

私たちはナルファの近く、どこかに埋葬された

ナルファの近く、ナルファの近く

私たちはナルファの近くのどこかに埋葬された

生きていた、というそれだけの私たち

行進しては、嘘ついた

二人ずつ、二人ずつ

行進しては、嘘ついた

挨拶をかわす、一人のこらず

敵兵も起床ラッパも邪魔にはならぬ

起床ラッパ、起床ラッパ

敵兵も起床ラッパも邪魔にはならぬ

凍てついた若者たちよ

一度聞いたことがある

そうだった、そうだった

一度聞いたことがある

トランペットが また鳴った

さあ、起きろ、おい貴様

おい、貴様

さあ、起きろ、おい貴様

血は水よりも濃いのだぞ

ロシアが自分で滅んだというのなら

ロシアよ、ロシアよ

ロシアが自分で滅んだのなら

本当に大変なことにちがいない

伴奏もメロディーも彼の創作である。民謡の節をとることもあった。歌っているというより言葉を語っていただけだった。

彼自身は収容所に入らなかつたが、兄弟の一人は二十五年もの長い間入れられていた。彼は主として、収容所以外の生活の悲惨と苦しみを歌った。

詩人で歌い手としての彼の名声は、六十年代後半にノボシビルスクで開かれた全国歌謡祭からである。モスクワの東二千マイルにあるこの森の都に、ソ連各地から歌い手が集まつた。空港に降り立つと「シベリアは君を待っている」というポスターを見て背筋に寒気を感じた人も多かつたであろう。ガリーチはこのフェスティバルで一等になったものの、以後公開の場で歌うことを禁じられてしまった。

彼は、ホーム・コンサートを開いて応えた。個人のアパートでぎっしり詰まつた聴衆を前にして歌った。少なくとも十台のテープレコーダーがその歌を記録した。そしてそれぞれが十個ずつ複製するというぐあいで、今では百万ものテープが国中にいきわたり、役人たちの間ですら流行している。

彼の歌は義憤や皮肉、そして悲哀に満ちているが、同時に信仰にあふれている。彼が歌手として知られはじめたとき、ソ連の外にあるロシア正教教会の牧師が、現代詩人の中でもっ

ともキリスト教的な人だと評している。これにはガリーチも驚いた。彼自身神が彼を信じていることに疑いはなかったが、彼の方が神を信じるべきだなどは思っても見なかったのである。

——
労働者国家の貴族

ガリーチに深い憂鬱な時期が続いた。これ以上は続けられないと幾度考えたことか。都会を離れ、すべてを忘れようと飲みふけたこともあった。と、あるときのことである。真夜中に声が聞こえたと言はいう。

「起きろ！」そしてもう一度聞こえた。「起きろ！」

彼は今度は起き上がり服を着た。

「川へ行け」

次の指示があった。そのとおりに従った。

「左へ歩け」

彼の両足の間にカザン地方で作られた聖母と子の聖像があった。

ガリーチは都市に戻り、牧師を訪ねて洗礼を受けた。首に十字架をかけてもらった。空港ではずすのを拒んだ十字架である。

ガリーチ夫妻からわれわれ夫婦が聞いたところによると、ソ連では知識人インテリが当局のいいなりになっている限り、貴族的ともいえる特権生活を送ることができる。知識人が手を下して仕事することはない。妻たちですら、床を磨くタワシなどを手にすることはないので。

ガリーチ夫妻がわれわれのところに行った間に私たちの娘が靴を売る店に仕事を見つけた。プロレタリアの国からきた夫婦は、愕然とした。知識人の娘が靴の店で働く！ 夫人が私に「階級差はノルウェーよりソ連の方がはるかに大きい」といった。

ソ連のいたるところ——森、山道、浜辺、といったおおよそふさわしくないような場所に、市民向けのポスターが出ている。「労働は人を貴くする」

現実には、この「労働者国家」の方で労働が軽蔑されることの方が多い。

ガリーチ夫妻は結局、オスロ郊外にアパートを手に入れた。オスロの大きなデパートから新式の組立式ベッドを買った。ところが最初の夜、ベッドが折れて、ガリーチは床に落ちてしまった。朝になって彼はあわてて電話をかけてきた。

「すぐに大工を呼ばなければ」と電話でいう。

「その必要はないでしょう。私が直してあげますよ」と私は答えた。

私が前夜彼に渡してあった金植をくれというのと、気の進まないようすでそれをとってきた。まるで蛇を掴むかの格好で、頭から尻尾からかもわからないふうであった。結局ベッドの

柱に釘を二本打つだけのことであった。

翌朝、大機嫌で電話してきた。私の絵よりも大工仕事に感心したらしく、

「一晩中、素晴らしくよく眠れたよ。君はレオナルド・ダ・ビンチだ」

今度私が「槌と鎌」〔ソ連国旗のマーク〕の地に行くときは、自分の金槌を持参することにし
よう。

3 受賞への闘い

この時期、ノーベル賞選考の議論が喧々囂々ごうごうと行なわれた。アンドレイ・サハロフは問題の候補者だった。

この温和で優しい人が、辛辣な論争のもとになるとは信じられなかった。各国の六十余名の国会議員が彼を推薦していたが、ノルウェーの新聞と政治家が彼の受賞に反対していた。ソルジェニーツィンのように極端な見解を持つ人なので、国際間のデタントばかりかソ連国内の自由化をも危うくしてしまふ、というのがその反対理由であった。

受賞者の発表が近づいたころ、ジョレス・メドベージェフが論議をかもし出した。彼は前に私がモスクワに行っていたとき、サハロフが批判したことのある男である。自ら反体制者と

名乗る人であるが、オスロで反体制運動について講演したときには、一言もサハロフについてふれなかった。聴衆からの質問に答えて、受賞者の選択に政治が介入することがあることにかんがみて、平和賞などやめた方が賢明だと語り、さらにサハロフに関しては、「水素爆弾を作った男が平和に何を貢献しただろう。すべては、委員会の決断にかかっている」と述べた。

後で彼はテレビで、ソ連の知識人は宗教に興味などなく、ソ連政権は民主主義へ向かって前進していると述べたのである。病院での強制治療の例をアナウンサーが引用し、ソ連における精神医学の誤った使い方について現況を述べるように求められた。

「過去一年間、引用されたような新しい例については何も知っていない」と彼は答えた。上手な逃げであった。

ソルジェニーツィンは、アフテンポシュテン紙に投稿してメドベージェフの見解を攻撃した。それに対して自分のいわない言葉を引用したとソルジェニーツィンに反論してきた。私はテレビ・インタビュウのテープを手に入れ、アフテンポシュテンとモルゲンブラデットの両紙にこの問題を解明する記事を載せた。論争のもととなっている箇所は、もともと英語で話されていたので、そのまま載せた。ソルジェニーツィンの引用は間違っていなかった。

一九七四年度の平和賞受賞者の発表が行なわれた。シーン・マクブライド（アイルランド）と佐藤栄作の二人に決まった。

ソルジェニーツィンからは、私の記事に対する感謝の手紙がきた。

「ソ連の自由化運動にとって、ソ連内で起こっていることが、西側で正しく理解されることがとくに重要である。メドベージェフは真理を意図的に歪曲して西側に伝えようとしている。これ以上私の考えを抑えるわけにはいかない。ましてや私のよき友人であるかのようにいうからなおさらである。偽善はこれ以上許すことはできない」

ノーベル賞については、次のように書かれていた。

「メドベージェフの言動は、確かにサハロフに不利であった。私は悲しい。委員会はどうしたのだろう。ああ、ああ！ サハロフは敗北か、ソビエト当局が勝ったか。Xという男（メドベージェフを盛り立てるのに役立ったジャーナリスト）はしっかりした原則も気骨もない男だ」

しかし、サハロフの友人たちは受賞への闘いを継続した。第一ラウンドでは確かにノックアウトされたものの、新しいファイトで第二ラウンドへ入った。われわれは、ノーベル賞だけを目的とせず、たとえば、ソ連の改革派バプテスト派の指導者ジョルジ・ピンスの弁護も

した。

——
聖職者ビンスを援護

ウクライナ出身のビンス家は、ジョルジの祖父の時代から四代にわたってソ連の迫害にあっている。彼の母は長年投獄され、息子ピョートル(同じく非公認のバプテスト指導者で、ヘルシンキ委員会のウクライナのメンバーである)も職を奪われ、「食いつぶし」として訴えられたのである。

一九七四年三月、ジョルジ・ビンスは二度目の逮捕。罪状は伝道であった。国外のキリスト教徒の弁護人を要求した。鉄のカーテン内のノルウェー伝道団から話があつてアルフ・ハエレム判事——私も「道德再武装運動」(MRA = Moral Re-Armament)で親しく知っている——が引き受けた。ビンスも納得した。三人のノルウェー議員が自動的にオブザーバーとしてハエレムに同行することを申し出た。サハロフもビンスの弁護に立ち上がっているので、その関係で私も行くように頼まれた。一同が入国ビザを申請したところ、ソ連大使館は理由も述べずに次の郵便で申請書を送り返してきた。この出来事は逐一マスコミが取りあげ、大きくニュースに載った。

サハロフはビンスのために二つの請願をした。第一は九月で、世界教会評議会に仲裁を依

頼した。それには、ビンスが四カ月にわたってハンガー・ストライキをした、というニュースも含まれていた。二回目は十月で、人権委員会の三人の同僚も署名しており、世界教会評議会とアムネスティ・インターナショナル宛てであった。これには世界教会評議会から反応があった。事務局長フィリップ・ポッター博士が、ソ連の司法大臣とビンスが法廷にかけられるウクライナ司法大臣へ書簡を送った。返事がないので、彼は今度はソ連政府に請願した。

ビンスの裁判は、一九七五年一月二十七日にキエフの法廷ではじまった。彼の家族は五日間の裁判を通して衛門をとおることが、許されたが、他の支持者たちは極寒の中をずっと裁判所の外に立ちつくした。ビンスは自分で弁護する機会が与えられたが、彼はただ次のように述べた。

「私の弁護はアルフ・ハエレムがするべきであった。ここでは私のすべてを主イエスにゆだねる」

五年間の収容所での重労働とそれに続く五年の追放という判決が翌日下された。法廷の中にいた信者たちはコートの下に花を隠していた。バラ、カーネーション、スイセンが彼に投げかけられ、彼の妻が叫んだ、
「あなたは裁判に勝ったのよ」

続いて娘のナターシャが座席に登って叫んだ。

「父よ、教会はけっして死なない」

この言葉は、ビンスの詩の一行である。それから、ビンスの父がスターリン時代に収容所にいたときの手紙の言葉を彼女はつけ加えた。

「キリストといっしょなら、牢獄にあっても自由である。キリストとともにない自由は、牢獄である」

法廷の外には、今では五百人の人が集まっていた。ビンスが建物から出るとき、皆は脱帽して好みの賛美歌を歌った。「福音の信仰のために」である。見るからに頑丈だった男であったが、第一回の刑でかなり弱っていた。今度の刑が彼にどのようにかたえるか、友人たちは心配だった。

サハロフの請願はとくに意義深かった。というのは、彼が宗教指導者の弁護にとくに陳述したのは初めてのことであったからである。

長い間ソ連各地の反体制には、二つの流れがあり、その間にはほとんど接触がなかった。反体制知識人——の中にはクリスチャンもいたのだが——と地下教会との間である。サハロフは、徐々に宗教が人権闘争の決定的な場になることを認識しはじめたのである。ビンスの裁判以来、彼は迫害されているクリスチャンのためにも立ち上がるようになった。彼にとつ

て、苦しむのがクリスチャンであろうが、共産主義者であろうが、同じであった。

—— ソ連の罪状をアピール

ソルジェニーツィンが逮捕された次の日、一九七四年二月十四日に、サハロフと他の反体制指導者は「人類へのアピール」を発表した。人類に対するソ連の罪状を、国際裁判所が取りあげてを要求している。これが、一九七五年春には、デンマークに住む東ヨーロッパからの亡命者グループによって組織立てられ、「サハロフ国際公聴会」となったのである。

この準備委員会の議長は、熱血漢のハンガリー人エルノ・エスツェルハスで、かつてフェンシングの選手として故国を代表した人である。ハンガリー動乱のとき、彼はブタペストのバリケードで闘っていた。KGBが相手のときは、武器は軍刀でなく、細身のサーベルだということをして彼に説得するのは難しかった。

彼とその仲間の亡命者たちは、情熱にはこと欠かなかったが、資金、戦略、事務能力に欠けていた。ノルウェーは、その事業の半額の資金を賄っていた。その大部分はハッコン・リール・ノルデルバル主教、それに私が署名した新聞広告に応えて寄せられたものだった。デンマークの国会議員がいろいろ支援してくれた。その最大のものは、デンマーク議会の委員会を説得して、議事堂の一部を公聴会が自由に使えるようにしたことであった。

委員会はすでに、そこでベトナム・トリビューナル（法廷）とチリ・トリビューナルを開いていたが、ソ連から敵対すると見られる行動を起こすにはもう一つ別の勇気が必要であった。公聴会が開かれる直前、コペンハーゲンで秘書業を営むロシアの女性が一カ月間自分の事務所を閉め、奉仕で事務をとってくれた。実際、そこで働く人はみなが無償で働いた。

十月に公聴会を三日間開く計画がすすめられた。最近ソ連から脱出した人びとを証人に、各国の人びとによるパネルが、これを検討しようということになった。過去十年間におきたことを対象にすることも決まった。

公聴会に先立つこと二カ月前の八月に、三十四カ国の元首が参加してヨーロッパの安全と協力に関するヘルシンキ会議が開催された。サハロフは西側がしっかりと防衛することをしきりに願っていた。

「デタントも軍縮も歓迎する」

彼はモスクワの記者会見で語った。

「それが全体主義政権に対して一方的に、そして非常に危険な譲歩を許さなければ、自国の野心を率直に語ることによって平和を損ねても仕方がない。真理は苦くとも甘いやそや沈黙よりは安全なのだ」

ヘルシンキで、ブレジネフは西側にヨーロッパの現在の境界線、別の言葉でいえば、ソ連

による東ヨーロッパの永久支配を認めさせた。

西側諸国はまた、デタントと経済技術協力政策に同意した。この面での両者のちがいを考へれば、これはとりも直さずソ連の産業とソ連の軍需産業を西側が援助することにほかならないし、現在もそうなっている。この協定はつまりソ連に多大の利益を西側が支払ったことになる。

その代わりすぐさま西側に役立つことが一つあった。当時、ポルトガルは動乱のさ中であつた。西側はデタントを犠牲にしたくなければ、ソ連に介入しないよう警告することができた。ポルトガルの共産主義者たちの屈辱的敗北をソ連は手をこまねいているより仕方がなかつた。

そればかりではない。ときがたつにつれ、この会議が西側に有利になつた点が明らかになつた。ブレジネフの望みをかなえ、代償として人権宣言に署名させることができた。西側がこれをさほど真剣に考へるとは、ブレジネフも思わなかつたようだが、長い目で見ると、これが世界的に自由の闘いにとって重要な点になるかも知れない。

ただし、民主主義国家が信念を持って、この協定が全面的に遂行されることを求めなければならぬ。

ヘルシンキに一人の悲劇の人がいた。かつて日本で、ソビエトのジャズ・オーケストラから亡命したソ連のバイオリニストである。何年も前のことであつたが、それからというもの彼は、妻と娘の出国許可を得ようと努力してきたが、成功しなかつた。絶望的になつて、会議の間中「私の家族を助けて下さい」と書いた旗をもつて街を歩き、代表たちに近づいては訴えていた。ブレジネフだけでなく、フォード大統領にも請願書を送つたりした。しかし目的を達成できず、彼は最後の手段として、国内で迫害をうけているアンドレイ・サハロフに手紙を書いた。

このときエレーナは、何か月もかかつて、西側からの強い要請もあつて、やっと目の手術のため、イタリヤに行く許可を得たところだつた。さんざんいやがらせもあつた。旅に出發する朝、このバイオリニストの手紙がサハロフのアパートに届いた。KGBによつて中身はすりかえられていた。エレーナが手にしたのは両眼が削られ、頭蓋骨がはめられている顔の写真だつた。

KGBの残忍な挨拶に送られて、エレーナは目の治療に旅立つたのである。手術は予想以上に成功した。戦後初めて、彼女は両眼ではっきり見ることができるようになつた。

回復後、彼女はイタリア共産党と左翼社会党の指導者と会談したが、彼女の稲妻のような論旨はきわだっていた。エレーナとミラノの左翼市長アニアシ、助役の共産党員のコラヒとの間の会談が記録されている。それは、次のとおりである。

*

アニアシ　ご主人をミラノにお迎えしたいものです。

エレーナ　夫はどこにしようとも平和を強調すると同時に、独裁の危険を警告します。残念ながら西側にいられるあなた方は、彼の新しい本を心して読んでおられないようですね。

それとも私の誤解でしょうか。

アニアシ　不幸なことに、反動的な新聞に抜粋して掲載されました。

エレーナ　コラヒさん、私が今までお目にかかったイタリアの共産主義者で私を恐れずものをおっしゃるのはあなたが初めてです。夫の本を読んだことがおありですか。

コラヒ　いいえ、私はそんな新聞は読まないことにしています。あなたは医者だそうですね。

エレーナ　そうです。

コラヒ　モスクワで開業しているのですか。

エレーナ　ここ二年間働いていません。

コラヒ　なぜですか？

エレーナ あなたを困らせたくはありませんが、私はアムネスティ・インターナショナルのメンバーであり、かつサハロフの妻です。ソ連のアムネスティ委員会議長は著名な数学者ですが、同じく職がありません。一九七三年九月、主人の市民権剝奪に反対したからです。しかも失業手当は私たちの国にはないのです。友人たちが可能な限り助けています。一般の人の収入は非常に低いのです。

あなたがタタリア共産党の同志はわが国で普通の人がどんな生活をしているか調べるべきです。官界の人とばかり交際すべきではありません。ソ連に行ったことがありますか？

アニアシ 議員のコラヒは行ったことはありませんが、私があります。

エレーナ 個人のアパートをたずねましたか？

アニアシ はい。

エレーナ 誰の？

アニアシ はっきりと覚えていませんが。女の子でした。レコードを欲しがっていました。友だちといっしょに住んでいましたよ。

エレーナ どんなふうに住んでいましたか？

アニアシ 大勢いっしょのようでした。

エレーナ 物質的にはどんな生活でした？

アニアシ 質素でした。

エレーナ ふさわしい表現ではないようですね？

アニアシ そう、台所に住んでいました、かなり貧しく。

エレーナ 実際には大変貧しいのです。地方の人はもっとひどい生活だということも知るべきです。

——ソ連のめざしているもの

アニアシ (話題を変えて) みなが手を携えてデタント、平和と国交の正常化に向かって働くべきだと思うのですが。

エレーナ ソ連は何を目ざしていると思えますか？

アニアシ 話せば長くなりますが、ソ連は、この目標をアメリカとともに目ざしていると信じます。

エレーナ 残念ながら、ソ連とよい関係を求めているのはアメリカの方だけです。それにイタリヤは、アメリカと友好関係を求めるのに熱心でないのも気懸りです。チェコスロバキアに起こったことと似たようなことがイタリアでも起こりうることに心配です。

アニアシ (また論点を移して) アメリカに行ったことがありますか？

エレーナ イタリアで目の手術をしたくてビザをもらうために、私は十一カ月もかかったのです。その間、ありとあらゆる困難と闘わなければならなかったのです。やっと許可を得ましたが、それも西側の報道と世論のおかげです。十も目を持っていたとしたら、アメリカにたどりつくこともできるでしょうね。そのためにはもっともつと苦労するでしょうが。アニアシ 私は、ニューヨークでひどいものを見ています。自由で民主的な社会主義のために、われわれは働きたいと思えます。

エレーナ 聖書のころから人類はそれを夢みてきましたが、今望んでいることは私たちの七人家族が住むために、第三の部屋のついたアパートをわが社会主義国が持たせてくれることです。

アニアシ 西ヨーロッパには自由のある社会主義がありますよ。

エレーナ そうですか、ほんとうに？ 共産主義と社会主義が何であるか説明してくれませんか。わたしの国にはそれがわかるものがないのです。ブレジネフにいわせると、今やつと社会主義を築きはじめたということになるのですが、彼自身もそれが何であるかわかっていないようです。

アニアシ 少なくともわれわれは、ファシズムを体験していますから、それが何であるかは知っております。

エレーナ 外国軍隊に侵入されたとき、私たちもファシズムを経験しました。私は社会主義と共産主義を築いているという国に住んでいます。それはファシズムに似ていますよ。

—— フローレンスへ

十月初め、エレーナはフローレンスで記者会見をした。市が見渡せる有名な丘の家で行なわれた。私は、サハロフ公聴会のデンマーク人の事務局長といっしょに行った。瀟洒な部屋は八十名の各国の報道陣で埋まった。テレビカメラはまわりっ放し、ひっきりなしにカメラのフラッシュはたかれ、テープもまわっていた。エレーナはその真中に臆する様子もなく腰かけていた。そして、夫からのメッセージを読み上げた。それは、ヘルシンキ協定のすべての項目にわたってソ連が実施することを、西側は働きかけるべきだと求めていた。引き続き彼女は、質問に答えた。

質問 「手術のために国を離れることを許されたことを思えば、ソ連の弱点について語るべきでないと思いませんか？」

エレーナは強く反発して、次のように答えた。

「私は、KGBに対して感謝することは何もありません。ヘルシンキ協定によれば、国外旅行は当然の権利であり、何んら譲歩ではありません」

記者会見が終わってから、マクシモフとわれわれの数人が彼女とテーブルを囲んで、わずか数週間後に迫ったサハロフ公聴会の打合わせをした。彼女はこと細かに相談にのった。とくに国籍問題には関心を示した。たとえ参加者の多数が帝国全体にまたがるソ連の大ロシア政策の犠牲者であったとしても、公聴会は反ロシアになってはならないと彼女はいうのだ。

「アンドレイはロシア人ですから」

「公聴会は憎しみや復讐を生むものであってはならない」ともいった。

「世界平和は憎しみからではなく、人への思いやりをとおしてのみ達成できるのです。弾圧や苦しみはあばかなければならないけれど、ともに生きる新しい道をさがさなければなりません。われわれの仕事は悪人を弾劾することではなく、苦しむ人へのいたわりにすべての力をかけなければ……」そして、政治犯の子供たちのための銀行口座をパリに開いたことをつけ加えた。

マクシモフが、サハロフは平和賞をもらうだろうかと尋ねた。皆が私の方を見た。サハロフが今度こそ受賞しないとすれば、それこそ皆は大変驚くだろうと私は答えた。

彼の支持者全員がそれほど確信していたわけではない。数日前、私は路で元首相のペル・ボルセンに会った。彼もサハロフを推薦している議員の一人である。彼はさほど希望を持っていなかった。

「サハロフに賞をやる勇氣があるだろうか」

と彼はいつていた。

サハロフの受賞決定

世界中の前評判では、受賞者はフィンランド大統領ケッコネンで、その理由はヘルシンキ会議を開いたことだった。彼の入賞を予想して、フィンランドのラジオとテレビは用意万端をととのえてオスロに到着した。ノーベル委員会委員長オーヤ・リオネス女史は、大変に絵を好む人で、夏の間、展覧会で彼女を見かけることもあり、そうしたときは言葉を交わす仲だった。しかしそのころ、エジプト展で私たちは墓の模型の中で、暗くてぶつかりそうになったが、二人にとってもっとも関心の深いサハロフについては話し合わなかった。共通の友人ソルジェニーツィンについては一、二度話したことがあった。彼が西側の民主主義諸国に挑戦したあと眠れぬ夜が多いと、彼女はそのとき墓の中で私に語った。

発表の直前、シニャフスキーはノーベル研究所で講演し、サハロフを「今日のソ連で最も偉大な人物」と呼んだ——ブレジネフへの一撃である。

私がフローレンスから帰国の途中、受賞の発表が行なわれた。私は、MRAのウエストミンスター劇場アートセンターで「悪にとつての危険」と題し、主に芸術についての講演をす

るため、ロンドンに立ち寄ったところだった。

聴衆が集まり出しているところで、私は電話に呼び出された。オスロにいる妻のアセマリから電話で叫ぶような声で、「サハロフが受賞しました」という。発表の場に居合わせた友人から聞いたというのだ。普通は荘厳な硬い雰囲気の中で発表されるのだが、オーヤ・リオネス女史はその伝統を破ってサハロフの写真を二枚、うれしそうに持ちあげながら発表したのであった。彼女も選考に満足したようで心から喜んでた。

私は、聴衆が待っている会場に戻った。マイクの前に立ち、口を開けた。何の音も出てこなかった。私は、ただ泣けてしようがなかった。ノルウェー人やソ連人の聴衆の前だったら不思議でもなく受け入れられたであろうが、自分の感情を押えることを美德とする英国人の前だった。

ところが、こともあろうにその瞬間に、部屋は激しい爆音で揺れ動いたので私は救われた。それは、一キロばかり離れたピカデリーでアイルランド人の仕掛けた爆弾だった。一人が死に、二十人が負傷した。私は現実に立ちもどった。

私は当然のことながらノーベル賞について語ったが、それにしても爆弾の前座とはよくしたものだと思った。なぜなら、ノーベル賞は、もともと戦争、産業、テロリズムにとってきわめて重要なダイナマイトの発見による基金でまかなわれているのだから。

4 反体制活動家たちの悲劇

数日後、私はオスロを出発し、コペンハーゲンの「サハロフ公聴会」に向かった。妻のアセマリも同行したが、彼女も私と同様、自由ロシアに情熱を燃やしている。

サハロフの平和賞受賞は、公聴会の重みを二倍にした。用意された三百の席は満席で、かわるがわる場内に入る人と、イヤホーンをつけて脇の部屋に入る人でいっぱいだった。世界中から二百二十人のジャーナリストが集まった。列席した多数の要人の警護に制服警官の他に五十人の警護人が当たった。

ノルウェーから私とともに検証パネルに出るために行ったのは、ハッコン・リーであった。私の横には、ウィーンのエダヤ文書センター所長のシモン・ビーセントールがいた。ナチの

ガス室の首謀者たちをつきとめたのは、彼の組織で、その一番の捕りものはアイヒマンであった。食事のとき、彼はアセマリーと私に万年筆のようなものを見せてくれた。

「これを使うときには、顔をそむけることを忘れたら大変なのです」と彼はいった。

「相手の腕にもたれて眠ってしまうことになって、万事終わりです」

公聴会での戦慄

パネルで私のうしろには、頭に深い傷をもった男が座っていた。二、三日前にロンドンで殴打され死にかけたという。ドクター・ストッブを無視して来ているようだった。経済学教授スティブルコウスキーで、戦争の初期カティンの大虐殺から逃げのびた、ただ一人のポーランド人であった。ソ連人は専門家の彼から、三十年代のドイツの経済奇跡に関する事実を聞き出すために生かしておいたのだ。コペンハーゲンで本会議がはじまる前に、彼はカティンについて講演した。会議中には、ソビエト収容所の統計について多くの疑問を投げかけた。このことについても専門的知識をもっていたのである。

二十四人の証人が呼ばれた。全員がソ連市民で、最近西側に逃れた人びとだった。一九六五年から一九七五年の十年間に思想と表現の自由、ソ連内外に及ぶ行動の自由、そして宗教の自由のすべてが程度の差こそあれ、制限されていたという結論に達した。そして罰則は雇用、

住宅、教育の領域に及んだことが実証された。さらに少数民族——とくにクリミヤ系タタール人やボルガ系ドイツ人のような追放されたグループ——の利益がふみにじられたこともあげられた。

最後に、国民はその自由を取りあげられ、牢獄、収容所、精神病院等で非人道的状態を強いられることも実証された。推測された数の差が大きすぎたため、数についての結論は出なかつた。

ソ連当局が公聴会の反響をおそれたことは、明らかだった。そのさ中に、ソ連大使館では記者会見が開かれ、公聴会に反駁するため体制側の九人の知識人が派遣された。

そのうちの一人は、モスクワのユダヤ教会の律法博士「ラビ」ということだったが、実際にはユダヤ教会に対するKGBのお目付けで律法博士でも何でもなかった。もう一人は、サハロフを三十年知っている物理学者B・M・バルであった。優れた科学者が突然自らの科学的キャリアを危険にさらしてまで、人権問題に取り組むということは、精神錯乱としか説明しかねるといふ意見を披瀝した。

しかし、記者会見でもっとも重要な発言をしたのは、ルーベン・ナジャロフ博士であった。KGBが“同ぜぬ人”を病院に送ろうとするときには、いつもそれを支持する精神病医の一人である。

その場合に用いられる論法をあみ出したのは、もう一人の精神科医ダニエル・ルンツ博士であった。すでに死亡しているが、当時はモスクワの精神病のセルブスキ研究所の診療部長であった。ルンツは自分の本業に加えて、人権問題に関心を抱く人を精神分裂症と認定した。彼は、この形の精神分裂症を三つの段階に分類した。初期の段階でソ連体制を批判する、第二の段階で警察を憎悪する、そして最後は暗殺をしかしかねない。精神病医の任務とは、病人を初期の段階で病院に送り込み、進行を弱めることにある、とルンツはいつている。

サハロフ公聴会では、ルンツ博士の診療所を内部から知っている二人の証人がいた。一人は、ビクター・ファインバーグで、ソ連のチェコスロバキア侵入に反対するデモに加わって逮捕された男である。警官に殴打されたあと、セルブスキ研究所に送られ、注射による処置をうけ、彼は白痴になる直前に若い女医によって救われた。正気の男に薬物を注射しようとしていることに気づいた彼女が、黙って注射を中断したのである。彼女は、セルブスキ研究所のマリア・ボイハンスカヤで公聴会でのもう一人の証人であった。

ナジャロフが、記者会見で発言するために立ち上がったとき、聴衆の中にいたビクター・ファインバーグも立ち上がった。

「ナジャロフ博士、覚えていますか、前回お目にかかったのはセルブスキ研究所であったことを？」

彼は、ただちに大使館から連れ出された。ナジャロフは、ファインバーグは病人だといひ張った。

公聴会で証言したため、ポイハンスカヤ博士は苦勞を背負いこんだ。彼女がソ連を發つとき、息子ミーシャを残してきた。後からすぐに出国を許可されることになっていたので、一九七九年になって、やっと母親が開業しているケンブリッジに辿りつくことができた。

公聴会を終えてオスロに戻ったわれわれの次の問題は、果してサハロフが受賞のため来ることが許されるだろうか、ということだった。ヘルシンキ協定の主な規定の一つは、人と思の自由な交換ということであった。ソ連当局はすぐさま彼を出さない理由を見つけ出した。国家機密の所持者だということだ。オスロ訪問中、終始KGBの男を同行することを条件に出したが無駄であった。軍事研究からは数年遠ざかっているといったが、これも無駄であった。十一月半ばの朝、モスクワの旅券申請所から落胆したサハロフなのか、科学者が何も手に持たずに出てきたという噂をきいた。エレーナはまだ西側にいたので、サハロフは代理として彼女に賞を受けとるよう依頼した。

式典の様子がロシア語でソ連に放送されれば、ロシアの大衆にとっても大變役に立ったにちがひなかった。ミュンヘンの自由ラジオは、このために、ノルウェーラジオ(NRK)に施設の使用を申し出た。申請は、世界の他のラジオ局と同様、認められた。しかし、受賞の二

日前の十二月八日になって、自由ラジオはノルウェーラジオから、技術的理由で約束したスタジオとラジオ・リンクの施設は貸与できないと断わられた。

幸い、自由ラジオの重役がミュンヘンから私に電話し、事情を説明してきた。私はすぐにノーベル委員会の役員に電話した。彼はノルウェーラジオに対し、施設が使用できない理由をさっそく公にすべきだと要請した。これで、技術的問題は片づいた。

—— 主役のいない受賞式

十二月十日、有名なムンクの壁画で飾られたオスロ大学の壮大な宴会ホールは、人で埋め尽くされた。中央には王室、そのまわりには政府関係者、ほとんどの議員、文化を代表する人たち、各国大使（招待を拒否した共産圏の大使を除く）、それに受賞者の友人が座った。この中にはロシア人もたくさんおり、マクシモフ、ガリーチ、それに作家ビクター・ネクラソフもいた。

オーケストラが軽やかな「勇者の行進」というノルウェーの曲を奏で、ノーベル委員会の委員長オーヤ・リオネス女史が進み出た。国連の政治家の間では「雌ライオン」として知られ、恵まれぬ人たちと女性の権利のために生涯をかけた闘士である。この社会民主主義者にとっての半生の苦勞は、頬の深いしわと口のあたりに見える辛辣さがそれを物語っている。

この日の彼女は、演壇の上に立つ勝者の姿であった。

サハロフの平和賞受賞は、彼女にとっても、不正と闘ってきた檜舞台であることを会場の皆は知っていた。演説の後半は流暢なロシア語でなされた。硬い表情もなごみ、温かさ喜びに満ちあふれていた。

続いて、エレーナが立ち上がり演壇に進んだ。手術をうけた目、大きすぎる顎、白髪まじりのエレーナはいつものエレーナではなかった。そこに立っているのはアンティゴネ（ギリシヤ神話中の悲劇の女性）であった。誇り高く美しく、彼女は専制者に反抗する化身であった。

「私がこうしてお話しているとき——」と彼女は話しはじめた。

「夫のアンドレイ・サハロフは、ソ連の裁判所の閉ざされた扉の外に一人立ち、震えていることでしょう。私がオスロに着いたその日に、夫の親友の生物学者セルゲイ・コワリョフの裁判がリトアニアのビルニウスで開かれたのです。罪状は、反体制派の新聞『時事の記録』に記事を發表したこと、リトアニアの地下のカトリックの新聞を通じて情報を流したこと、そして『収容所群島』を配布したことのためです。これらは、コワリョフが牢獄と収容所に長年つながれなければならない犯罪なのです」

どんな演劇家でもこのような悲劇を創作することはできない。サハロフ——ロシアの愛国者、ソ連労働者の英雄、レーニン勲章とスターリン賞という国の最高の榮譽の受賞者——そ

の人は今、名誉を剝奪され、一人淋しくソ連領のバルチック国に佇立している。一方、同じときにリオネス委員長から妻の手に平和のメダルが渡され、彼は全自由世界の榮譽に浴している。

式が終わってから、オラブ国王は、いつもよりもさらに温かくエレーナに挨拶された。このころになると、全員がサハロフのファンになっていた。左向きの政治家は彼の受賞に反対していたし、報道界もその風潮があったのに、今ではそんなことはすべて忘れられていた。ノルウェーラジオの会長は、彼にしては最高のお愛想笑いをしながら、心から喜んでくる來賓の間を歩いていた。

午後には、松明たきまの火の行進がサハロフを称えて行なわれた。一時は、サハロフの受賞に反対した“連帯委員会”が進めたものであった。行進の前列には、フリットヨフ・ナンセン（極地探検家、同じく偉大な自由の勝利者、そして内戦後ウクライナで救援活動をしたことによりノーベル平和受賞）の孫エイジル・ナンセンがいた。

エレーナは、グランドホテルのバルコニーから行進を眺めた。凍てつく寒さのために、頭にはスカーフをまいていた。行進が彼女の前を通りすぎた。その中にはノーベル賞の宴に出席するよりも、大衆といっしょに行進する方が性にあうといっていたハッコン・リーがいたが、一同はノルウェー語とロシア語で叫んだ。

「長生きを！ エレーナとアンドレイ・サハロフ！」

しかしながら、私はサハロフ夫妻が果して長生きするだろうかと心配になった。ドイツの平和主義者オシエツキーは、一九三六年ナチ収容所にいた時受賞したが、のちにそこで死亡した。アルベルト・ルツォーリは受賞のためオスロに来ることは許されたものの、南アフリカ政府によって自宅軟禁され、その小さな村でまもなく死んだ。マーチン・ルーサー・キングは受賞の一年後、暗殺された。

アンドレイ・サハロフも似たような状態ではないか。彼の環境も、これらの人びと同様に厳しい。彼は、黙って何もしなければ、世の中から忘れられてしまうであろう。そのとき、彼を守る防壁はくずれてしまうのだ。KGBは彼を連れ去り、自由世界のマスコミは少しは抗議するだろうが、それだけのことで、彼もエレーナのことにもニュースから消えてしまうであろう。しかし、彼はけっして黙りはしないであろう。一度ならず何度も逮捕されるかもしれないが、抗議をしつづけているかぎり、彼は安全である。そしてKGBにとって牢獄の外にしようが内にしようが、彼はソ連にとって頭痛の種なのだ。

宴席では、ソ連人以外はみなペンギンよろしく燕尾服を着ていた。ソ連人たちは、いつものダークスーツで私たちを笑っていた。マクシモフは私たちを資本家だとけなした。後で私は彼に国会議長グットルム・ハンセンを紹介したが、彼はマクシモフに負けない本物のプロ

レタリアートである。食事のときに、ハンセンはきわだつた挨拶をした。

「平和への働きかけは、自らの生活の中で始めなければならない」と彼はいった。

「恐れのない世界を創るには、自分の心から恐れを取り除かなければならない。正義をうちたてるには、自ら正しくなければならぬ。自らの心に自由なくして自由の闘いをすすめることはできない。自らの犠牲を払うことなしに他人に犠牲を求めることはできない。ノーベル委員会はこの伝統を生きている人に榮譽を授けたのである」

彼は続いて、ロシア詩人アンナ・アフマトワ女史の詩を読んだ。

愛する人びとが捕われている

牢獄の外の長い列に加わって

くる日も、くる日も立っていたことを

私の死後も思い出してほしい

食べるもので飾られたテーブルの周りに沈黙があつた。皆、リトアニアの裁判所の前に立つサハロフを思った。

エレーナは勝ち誇つた思想の女神のようであつた。夫のノーベル賞受賞の力強い講演を代読したあと、観衆が立ち上がって嵐のような拍手をおくっているとき、そつと背を向けて両

手で顔を押えてむせび泣いていたのは、やはり彼女も女性だと思わずにはいらなかった。

—— エレーナの回想

翌日は、記者会見でテレビカメラも来ていた。翌々日、エレーナはノルウェーを去ると発表されていた。見渡す限りの景色は音もなくひっそりとし、フィヨルドが深い銀色の中に星影を映しているような静けさの中を、私はエレーナをわれわれの家まで自動車で連れ出した。武装した三人の護衛が別の車で後ろについた。

家では乾いた白樺の薪が炉辺で音を立てて燃えていたし、アセマリーの用意した料理のおいしそうなにおいが漂っていた。護衛たちはテレビの部屋で子供たちに加わり、われわれは居間に入ってオープンから出された食事を楽しもうとした。そこへKGBがまた邪魔をした。セルゲイ・コワリョフが七年間の懲役を宣告された上、他にも三人が追放になったというニュースを伝える電話が鳴った。食べ物をオープンに戻して、私たちはエレーナが西側のマスコミ向けの宣言文を作るのを助けることにした。

「まるでモスクワの家のようなだわ」と彼女はいった。「友人と夕食をしようと準備がすっかり整うと、必ずとっていいほど何かニュースがとび込んでくる。皆、上衣を脱いでアピールや抗議文を書き出すんです。ご馳走はみんな冷えてしまうのです」

一時間後に私は通信社に電話し、判決に抗議するエレーナのノルウェーからの最後のメッセージを伝えた。一時間後にはテレビがその宣言文を伝えてくれた。

食後は冷凍の木いちごだった。

「これ、アンドレイの好物よ」とエレーナは叫んだ。

「でも長いこと食べていませんわ。夫もいっしょだったらいいのに……」と涙が頬をつたわった。

それから、電話で娘と話せました、と彼女が報告した。自由ラジオが式の全部をロシア語で解説をしたとのものであった。

エレーナが煙草を出してきた。彼女の目のない唯一のものである。アンドレイは吸わないが、この四カ月の間、彼は毎週エレーナが大好きなロシアの「バピルス」を送っていたのだった。

めったにないこの静かなひとときを逃さないように、私はエレーナに彼女自身のことを話してもらった。一九三七年に、両親が逮捕されたのは十四歳のときで、スターリンの恐怖政治のまった中であつた。父親は撃たれ、母親には十四年の刑が科せられた。彼女は兄弟姉妹の最年長であるばかりでなく、やはり両親が逮捕された隣りの子供たちよりも年上だったので、小さい子供たちの面倒を見たり、配給の列に並ぶのも彼女の仕事だった。

両親とともに革命的共産主義者であった。しかしスターリンは、その母——私もモスクワで会ったことのあるあの立派な老婦人であったが——を十四年間、牢獄の中に閉じこめたのである。母親が逮捕されてから数カ月たないうちに、少女エレナは賢い女に成長していた。したがって尋問される番になったときには抜けめなく答える術を身につけていた。

「何も話すことなんかないわ。私はただの子供よ」

しかし、尋問は毎夜朝の三時まで続いた。終わってから彼女は夜道を歩いて帰宅した。

「それが一番こわかったのです。強姦されることも殺されることもありましたから」

続いて戦争がはじまった。他人の世話をする生活に慣れていたエレナは、看護婦として志願した。彼女は前線で働き、その勇気を称えられて勲章をもらったが負傷した。回復したとき医者としての訓練を受ける好機に恵まれた。未熟児の専門の医者になった。

——エレナとサハロフの出会い

彼女がいつ共産党を離れたのか、と私は尋ねた。彼女は笑って答えた。

「これが離党といえるかどうかわかりませんが。一九六八年のチェコスロバキア侵入のとき、私は黨員としてとどまることはできないと党に通告しました。すると答えは、そう簡単に辞めることはできない、チェコスロバキアで起きたことが説明される党大会に出席しなければ

いけない、ということであった。この大会では党の指導者が説明し、最後に議長が出席者全員に党の見解を了承するかと尋ねました。私以外は全員拍手しました。私は立ち上がって、満足できないし離党したいと言いました。それでも離党の願いはきき入れられませんでした。私はまちがった思想の持主だといわれ、覚悟しているともいわれました。私はそれ以後、党の会合によばれることはありませんでした」

彼女は個人を尊重するという立場から、人権問題とかかわっていった。多くの若手のインテリが自分でものを考えるようになり、「同ぜぬ者」としての立場をはっきり示すようになってきた。この迫害される若者たちを助けることも彼女の仕事となった。そのうちの一人が収容所に送られるたびに、彼女は小包や手紙を送るために列に並んだ。

「また面倒みる甥ができたね」と人は彼女にいった。ビクター・ファイバーグもその「甥」の一人であった。

エレーナがこうして個人に対する関心から反体制運動に入ったとすれば、アンドレイとは理論的考察からの出会いである。仕事の性質上、人との接触の少なかつた彼は、道義的判断を欠くと科学は人類に致命的な危険となりうるという哲学的結論に達したからである。

彼はそのころ——六十年代後半だったが——男やもめであった。彼とエレーナはこのころ知り合いになった。出会いは二人が何かのアピールに署名したときで、このときはお互いに

存在を意識した程度であった。次は、エレーナが自分の誕生祝いに何人かの友人を招いたときである。アンドレイは電話で、行ってもいいかとてれながらいった。やがて二人が住むことになったアパートの入口の壁に、「子供たちのために」と大きな字で書かれた封筒が、最初に彼の目にとまった。

「どこの子供たち？」と彼は聞いた。

「牢獄にいる人たちの子供よ」とエレーナが答えた。

この封筒は、長年アパートの入口の壁に吊されていて、客は小銭を入れるのであった。この小さなことがアンドレイの開眼のきっかけとなり、哲学的見解も大切だが、個人への関心も人権闘争に重要であると確信するようになった。

彼は、水素爆弾の開発に疑いを持ちはじめたとき、そのことで得たお金の全部を病院に寄付したことをエレーナに打ちあけたところ、エレーナはちっとも感動しなかった。

「人権を抑圧する国家の施設にお金を寄付するなんて！ それより子供たちのために封筒に入れるべきだったわ」

今日では、個人の苦しみや迫害を受けている人たちに対する心配りがサハロフのライフワークになっている。小さなアパートに訪ねてくる人と応対したり、裁判にかけられる人を支援するため遠くまで旅行したり、骨の折れる生活を送っている。これまで二度、過労のため

軽い心臓発作を起こしている。あるとき、友人たちがガリーチに頼んで、彼を隠しマイクのついていないアパートから散歩に連れ出し、仕事の量を減らすように説得させたことがあった。もっと仕事を選んだ方がよいのではないか？ 重要なケースだけを手がけては？

「どのケースが他よりも重要だか決めるなんて、私にできることでない」とアンドレイは言い返した。

「しなければならぬのだ。一人の人間に不正が行なわれるのを見るたびに、私は声をはり上げなければならない」結局、友人の好意も実を結ばなかった。

—— ソ連に踏みとどまるサハロフ

それまで国外に出たことのなかったサハロフは、一九七三年初頭の記者会見で、プリンストン大学へ講演のため招かれているので家族全員でビザを申請した、とうっかり話してしまつた。このことはただちに国内の友人と支持者の知るところとなり、強く反対されるはめになった。ソルジェニーツィンを筆頭に、その旅行計画を棄てるようサハロフに迫つた。そして簡単に説得することができたとのことだった。

彼は現在、自分の任務は反抗の砦としてモスクワにとどまることだと確信している。

「私は国外に出たくもないし、出るつもりもない」

と彼は西側の記者に最近語ったが、次のようにつけ加えることも忘れなかった。

「正常な社会では人は自由に国外へ旅行し、世界を見、故国に帰れる。それが病める社会とのちがいだ」

エレーナの話は、これで終わった。それは、国の責任をとる決意をした一夫婦の物語でもある。もう夜も更けていた。暖炉の丸木はまだ燃えていたが、ロウソクは燃えつきそうになっていた。私たちは、私の絵を見にアトリエに入った。エレーナは人を見るように絵を見る。そこにひそんでいる気持ちをとらえようとする。大きな画面に描かれた「目ざめるロシア」を見ながら彼女はいった。

「モスクワでの私たちの出会いの雰囲気はあなたはみごとにとらえている」

私はエレーナに記念に絵を一つ持ち帰ってもらおうと思い、どちらかを選ぶようにと、クリストの顔と一本のロウソクの絵を見せた。彼女はロウソクを選んだ。それはソビエト・ロシアの暗闇の中に、灯をかかげる彼女自身と夫を象徴していると感じたのであろう。

その夜われわれといっしょだったビクター・ネクラソフが、クリストの顔の絵をとった。彼はスターリングラードで戦ったことがあり、勇敢にも市の名のよってきたるところの將軍には一言も触れずに『スターリングラードの塹壕』という偉大な小説を書いた人である。ところが誰もが驚いたことに、スターリンはその本にいたく感動し、ネクラソフがスターリ

ン賞を受けることを決定的にした文書を自らしたためたのである。

アトリエとホールの間で、エレーナは北極大聖堂のための私のデザインを見つけた。「モスクワであなたからもらった絵葉書の絵ですね。私があるをどうしたか、知っていますか？ 収容所のクズネツォフに送りました。今は彼の寝台の上にかかっているのです」

クズネツォフはもう一人の「甥」だった。彼はユダヤ人の活動家で、飛行機を盗んでスウェーデンに亡命しようとしたが発覚して、十五年間収容所に送られた。収容所での体験を記した日記は、アムネステイ・インターナショナルの報告にも盛りこまれている。私がサハロフ夫妻のアパートを訪れる直前、エレーナがKGBに尋問されていたのも、この日記をかくて運び出したことに関連していた。エレーナと彼女の「甥」が私の絵を高く評価してくれたことを聞いたとき、私は教会を飾っている窓を以前にも増して誇りに思った。

私たちは子供たちの寝室をそうとつまずきで通り抜け、テレビ部屋でトランプをしていた護衛の人たち——ノルウェーでは保護者であるが——をつれてエレーナは去っていった。

翌朝、報道陣や護衛の人にすらつき添われずに、オーヤ・リオネスを含むわれわれの小さな一団がエレーナを飛行機まで送った。タラップの上で、彼女は立ち止まった。私たちの方を振り向いていった。

「あなたがたが私たちを忘れたら、私たちはおしまいです」

5 闘いは続く

一九七六年一月、この人を忘却のかなたに送り込まぬよう、サハロフ夫妻が長年力強く闘ったレオニード・ブリュシチが亡命し、聖域にたどりついた。正気の人間を狂気に変える精神病院から、彼はまっすぐ報道とテレビの閃光の待ちうけるウィーンに到着した。

ブリュシチは、ガランスコフとギンスバーグの裁判の不当性に抗議して、一九六八年に当局と衝突したのがはじまりだった。これによって彼は、キエフの人工頭脳学研究所の数理技師の地位から解雇された。その後、いくら努力しても職を見つけないことはできなかった。

反ソ文学の所有と著述、イニシアティブ・グループとして知られる人権運動のメンバーであるなど数多くの理由で、彼は一九七二年に逮捕された。そして、彼がそれまで抗議してきた

ような不法行為をうける身となった。

法廷にかけられる前に一年以上も拘留され、この間、夫人の面会すら許されず、結局、公判ではカメラ撮影が行なわれた。これらはすべてソ連法を犯すものであった。判決は彼が精神病であり、そのため「とくに危険な犯罪」を犯したというものだった。裁判所は彼が特別の——もっとも安全な——精神病院に入院することを命じた。

彼の手紙が示すように、彼は拘留所で初めはいつもの高い水準の知的活動を維持することができたし、妻タタヤーナも彼に数学の本を送った。彼はその広範でオリジナルな発明的思考を心理学の分野にまで伸ばしたが、医者にいわせると「偏執病不安」の新たな証明になるのだった。彼はまた、数学的思考を医学に適用しようと試みた。反感を持っていた女医がこれをとりあげ、次のようにいった。

「患者は、心理学と医学とを数学化する傾向を示している。医者である私は、数学は医学となんらかかわりないことを知っています」

——夫のために虎となって闘う

一九七三年七月、彼は反体制派がKGB最悪の病院と呼ぶネプロフスクの病院の精神病棟に送られた。注射がはじまった。はじめに大量のハロメリドルがうたれた。サハロフ

夫妻がモスクワで語ったところによると、薬害がひどく、妻を識別できない状態になっていた。それどころではない。タタヤーナがその年の十月二十二日に彼を訪問したとき、彼女は彼を認識できなかったほどだった。

「レオニード・イワノビッチが面会部屋につれてこられたとき——」と彼女は報告に書いている。

「——彼を識別するのは、不可能だった。両眼は苦痛と悲しみに満ち、つかえながらつらそうに話した。支えを求めるように、椅子の背にもたれかかっていた。しばらく話をしていると、今度は息切れをはじめ、服のボタンを苦しそうにはずし……顔はふるえ、手足にけいれんを起した。時間を十分間残して面会を終えるように頼んだのは彼の方だった」

このころまでに、彼にはもはや読み書きができなくなっていた。一九七四年二月、医師はハロメリドルをやめ、インシュリンを打ち出した。これはブリューンチには不要のものだった。結果はさらに悪化し、三月四日に彼を訪れたタタヤーナは「大きな水腫が起きた」ことに気づいた。六カ月後になると、反精神病薬トリファジンが使われた。その間、医師はブリューンチが煩っていた骨結核には何の治療も加えず、彼の苦しみを助長させた。

タタヤーナは、夫のためまるで虎のように猛然と闘った。病院で注射がはじまったとき、関係した医者の名を西側の新聞に公表すると脅した。これはきいたらしく、注射は二度中絶

され、プリュージチの肉体的精神的状態は改良された。

ついで一九七四年十二月、タタヤーナはネプロフスクの地方訴訟代理人に手紙を書き、医療担当者に対して犯罪訴訟手続きをとるよう要求した。

「過去一年半にわたって——」と彼女は主張した。

「主人は意図的に間違った治療の対象にされた。これは病院の医療員が犯罪者であり、彼らが法廷で尋問されることを要求する私の行動の正当な理由である」と彼女は訴えた。

ソ連の法律には、誤った治療を処方する医者に対する犯罪訴訟手続きがある。西側の精神病医も彼女の訴えを取り上げ、法廷尋問に出席させるよう訴訟代理人に手紙を書いた。尋問は開かれなかった。

ともかく一年後にプリュージチは釈放されたが、それはタタヤーナとサハロフが大いに関係している西側の力が功を奏したものと思われる。そのころにはすでに、世界的規模で彼の迫害反対がおこっていた。プリュージチは一貫してマルクス主義者と称していたので、フランスとイタリアの共産党も憤然として、これに加わった。両党とも、モスクワから独立しているということを有権者に示す絶好の機会とみたことも疑いない。

旅行者としてソ連に入国した三人のフランス人法律家が、ついにタタヤーナとともにネプロペトログスク病院を訪れ、プリュージチとの面会を要求した。これが決め手となったよう

で、注射は止められ、プリューシチは回復した。一九七六年一月初め、彼とタタヤーナと二人の息子は、フランス数学者の招きでパリに到着した。

——
ナイーブなウクライナ・ナシヨナリスト

その夏、彼とタタヤーナはわれわれの家を訪ねてきた。彼は微笑みながら硬直した足をひきずり、びっこをひきひきやってきた。写真ではわからなかったが、小さく、ひ弱な体をしているのを見て妻と私は驚いた。それにしても、その小さな胸の間に何と大きな心が秘められていることか。

ペランダに出て、ノルウェーのリンゴジュースで乾杯した。彼はアルコールやコココーラはいっさい飲まない。「ウクライナに自由を」が彼の言葉だった。彼は熱烈なウクライナ・ナシヨナリストで、ロシア語よりもウクライナ語を好んで話し、ピョートル大帝時代以来重くのしかかっている大ロシア化に対して、ウクライナの存在証明アイデンティティを守る闘いを続けている。

私は「道義的、精神的革命」に盃をあげた。彼はただちに、

「そのとおり、政治的革命でなく、精神的革命が必要だ」といった。

マルクス主義者でありながら、政治的動乱を公然と否定するのは不可思議に思える。しかし、彼は自由のために情熱的に闘いながらマルクスに従うことを宣言している男で、共産主

義者も保守主義者も同様に混乱させるといふ不思議なマルクス主義者である。彼は画一的なレットルをはられることを好まない。私のアトリエでソルジェニーツィンの写真を見て、一枚欲しいといった。「ソ連にいたとき、彼の写真を壁にかけていた」と彼はいった。全体主義を信じるマルクス主義者よりも、自由を信ずるクリスチャンに、より共感をもてると感じていることは確かである。

若いころ、彼は熱心なスターリン主義者だった。KGBに志願したこともあったが、受け入れられなかった。ナイーブで理想主義的すぎるというわけである。彼らは個人的利益で動かされる男を好んだ。そういった男たちはあてになるからである。

プリーシチは、友人を驚かせ続ける。アセマリーと私が、プリーシチ夫妻とノルウェーで彼らの世話をしているウクライナ人といっしょに空港に行ったとき、彼は突然叫んだ。「ビールを飲みたい——私はソ連のたった一人の禁酒者でないことを、シユパラーに示すためだ」。彼は、そうしたレットルすら避けようとする。グラスを持ちあげ、

「妻たちに乾杯」といった。

共通の言葉を持たない妻たちは、ラウンジの反対側に座り、朗らかな会話に興じていた。どんなにか彼がこの明るい妻に負うことが多いことか。そのとき、私はユリー・ガランスコフのことを思い出さざるをえなかった。プリーシチが一九六八年に、彼の裁判に公然

と反対したことがある。一九七二年、国連や国際赤十字に対して、ガランスコフは衰弱し、病気であるにもかかわらず依然重労働を強いられている、という必死のアピールを送った。何の反応もなく数カ月後にガランスコフは死亡した。

—— 共産党ビルに十字架

一九七六年三月、ソ連のもっとも著名な彫刻家、五十一歳のエルンスト・ネイツベストニイがスイスに亡命した。

「私が亡命しなかったら、自分のうちにある芸術家は死んでしまつたらう」

といった。彼に出国を許可する決断は最高レベルで、しかも不承不承なされたという。

「ネイツベストニイは必要だが、彼は使えない。共産主義者のネイツベストニイを創りあげなければならぬ」と担当者はいったとか。

活火山のような情熱を持ったこの男は、クリスチャンである。彼が、体制側と最終的に決別する決意をしたのは、アシユカパードの共産党ビルの前面を装飾するよう依頼されたときである。彼は建物の前面をおおう高さ五十フィート、幅五十フィートの巨大な彫刻物を作製した。デザインは部分ごとに承認され、党幹部は除幕されるまで全体を見ることはなかった。除幕のとき、恐れをまじえた怒りで党幹部は啞然としてしまった。共産党本部の前面に十字

の形が描かれていたのである。

「十字架ですって？」とネイツベストニイはいった。

「顔が見えませんか？」

しかし、ほとんどの人がそれを十字架ととり、彼は芸術家協会から除名され、生計の道を絶たれてしまった。

当局との衝突は、何もそれがはじめてではなかった。今は伝説にすらなってしまったフルシチョフとの対立が前にもあった。その真相は最近になって、当時合わせた人びとの口から語られ、ノルウェー人ジャーナリスト、ライフ・ホーベルセンによって引き出された。フルシチョフの自由化時代、モスクワ芸術協会がクレムリンに近いマネゲで、ソビエト芸術家による現代芸術の展覧会を開催した。これは一般、とりわけ若い人びとの間に大きな興味をひき起こした。

フルシチョフが七十人の取り巻きを伴って下見に來た。展示場を下りる階段のてっぺんで芸術作品を一瞥したとたん、彼はどなり出した。

「糞つたれ、汚らわしい！」と彼はわめいた。

「首謀者はどこだ？」

ネイツベストニイが呼ばれた。そして、フルシチョフはあらたにどなりつけた。臆せずネ

イツベストニイもやり返した。

「あなたは首相であり、党の書記長でしょうが、私の作品に関しては私が主人です。したがって、話し合いは対等の立場のはずです」。警護長が割って入った。

「誰に話しているのかわかっているのか？ ウランの鉱山に入れてやるぞ」

彼の部下二人がネイツベストニイの腕をおさえたが、彼はフルシチョフにいった。

「あんたはいつでも死ぬ用意のある男に話しかけているのですぞ」

フルシチョフが首をふり、KGBの男たちは彼を放した。ネイツベストニイと彼は展覧会について議論しはじめた。二人が熱し出したとき、また警護長が口をはさんだ。

「彼の皮ジャケットを見なさい——ビート族のジャケットだ」ネイツベストニイは切り返した。

「労働が栄光の座をしめているという社会で、何ということをするのだ。私は夜通し働いたのに、君たちは、妻が着がえのシャツを持ってくることも許さなかったではないか」

フルシチョフのもう一人の側近が、ネイツベストニイの作品を指して詰問した。

「あのブロンズをどこから手に入れたのだ？」

「盗んだんです」とネイツベストニイはいった。

フルシチョフは、これを聞いて笑いながらいった。

「君は私の好きなタイプだ。しかし、君には天使と悪魔が同居している。天使が勝てば仲よくやれるが、悪魔が勝つと消さざるをえない」

天使が勝ち、フルンチヨフが死亡したとき、ネイツベストニイは記念碑を彫刻するように依頼された。それは今日、ノボデビッチ墓地に立っている。現代的立体的オブジェに囲まれた力強い自然派的な独裁者の頭である。ネイツベストニイの亡命後、彼の作品は、フルンチヨフ一家が管理している。

ネイツベストニイによると、ソ連には芸術家の間にカタコンベ運動がある。この人びとは、深い宗教的確信を作品を通して表現しようとするという。

—— ブコフスキーの抗議

一九七六年八月、モントリオール・オリンピックで世界の若者が互いに鎗しのぞをけずっていたころ、ウラジミール監獄の独房で若いロシア人が死と闘っていた。三十四歳のウラジミール・ブコフスキーは、二月十九日にハンガーストライキを開始し、八月中旬まで、外部の者は誰一人彼のニュースを耳にしなかった。彼の抗議は観衆のながめるところでなく、扉ののぞき窓から冷たい眼が彼のマラソンを監視したのである。

ソ連の精神病治療の誤用に対する彼の抗議と十年以上にわたる大胆な言動をとおして、彼

はソ連における人権闘争のシンボルとして見られるようになった。

一九六三年、ミロバン・ジラスの『新しい階級』という本を所持した科がではじめて彼は逮捕され、精神病院に一年半以上入れられた。

一九六五年、プーシキン広場の歴史的なデモに参加して二度目の逮捕を受け、続いて一九六七年にも捕えられた。

収容所で三年間重労働し、再び彼は自由になったが、長く続きそうにないことを察して、人権の仕事に身を投じた。反体制者に対する精神病患者としての診断と治療に関する文書を収集し、西側特派員と会見し、そして西側の精神科医に訴えてこうした間違つたやり方を攻撃するようアピールした。彼はまた、一連の文書を西側に持ち出すことに成功した。

集中的に行なわれたキャンペーンが曲り角となつて、西側の精神科医、法律家、人権擁護家、国会議員、ジャーナリスト、放送関係者らが事実を知ることとなり、ソ連の間違つたやり方を攻撃し暴くところとなった。

一九七一年三月、プロフスキーは案の定、一年二カ月と三日後にまたまた逮捕された。今回、彼は特別罪人用のウラジーミル監獄で二年間、収容所で五年の重労働、そして、五年のシベリア追放の判決を受けた。それでも彼は黙しなかつた。収容所で、若い囚人のセミヨーン・グルスマンといっしょに『反体制者のための精神病ハンドブック』を作つた。それはサ

ミズダード〔反体制者による地下出版物——雑誌、新聞、情報交換などの自主出版がほとんどである〕で広く流布した。

プロフスキーは、ウラジーミル監獄へ戻された。一九七六年春、助けを求めるかすかな抑圧された声が鉄のカーテンを貫き聞きこえてきた。モスクワにいて悲しみにくれるプロフスキーの母親が、ハンガーストライキを開始して以来、何のニュースもないという事実を西側に警告したのだった。西側世論は驚愕した。私自身、アフテンポシュテン紙に「プロフスキーは死んだ？」という見出しの記事を書いた。

抗議の合唱があまりに強くなったため、ついにソ連当局は、体面が丸つぶれになるのをおそれて、厄介な囚人を釈放することにした。チリの右翼政権に投獄された共産主義指導者ルイス・コルバランとの交換を申し出たのだった。副司令官に率いられた十人のKGBの男たちが一団が手錠をはめられたプロフスキーにつき添い、飛行機で西側に向かった。この後ろ手の手錠は、アメリカ製のものであった。こんなところですら、ソ連は西側の技術に頼っているのだった。プロフスキーを迎えた最初の西側ステーツマンが、新しく選ばれたカーター大統領であったことも皮肉であった。

一九七七年十月、オスロでの人權會議で講演するため、ブコフスキーはノルウェーを訪れた。そして十日間の訪問中、彼はわれわれの家に泊った。到着の翌日、彼とソルジェニーツインはダグブラデット紙で大々的に攻撃された。二人のソ連人がソ連のデタントに対して批判的であるばかりか、西側に対しては内面的な道義による生まれかわりを望んでいるということ攻撃している。「そのような見解をもった人が、西側でもっとも反動的なグループに迎えられるのも驚くことはない」と記事は述べた。

ブコフスキーは、黙っていなかった。

「政治的にいかにもえらそうにいう愚か者は、平和への道はただ一ついろいろな形のヒトラー独裁者に降伏することだと主張する。東側から新しい証人が到着するたびに、彼らはその証言が左右どちらかに操作されたものかを知ろうと“公開討論”を要求する。収容所の中のわれわれにとって右も左もあったものでなく、ただ有刺鉄線があるだけだった。そこでわれわれが学んだことは、世界には唯一つの闘いしかないことだった。非人間性に対する人間性の闘い、つまり死に対する生の闘いである」

私たちは、自然のまっただ中で休養し思索をするために、ノルウェー中央部の山小屋に行

った。そこで彼は、次のようなことを語ってくれた。

「母親が突然、共産党に加わったとき、私は十九歳であった。確信してのことではなく、希望した仕事につける資格になるといふそれだけの理由であった。党は、理想主義者よりもそういった日和見主義者を好んだ。その方が信頼できるからである。私は腹を立て、すぐさま牧師のところに行き、教会に加えてくれるよう頼んだ。聖書を手に入れ一年ほど勉強したが、宗教的信仰への道を見つけることができなかった。あまりにも合理的で科学的な人間であるからかもしれない。自分で証明できる何かを持たずにいられないのである。

制度に対する私の反対は、増幅していった。国の指導者を愚弄するようなことをいったために学校から退校させられたが、大学にはもぐり込んだ。

私は暴力革命を夢みてテロ行動を企てたが、やがて青年たちの反体制運動に引き込まれていった——私は最年少のメンバーであったが——そこで見出したものは、まったく異なった哲学を持っている人びとだった。それはソビエト法の下で人権を訴えるというやり方であった」

ブコフスキーの滞在中、彼が心にかけていたユーリー・オルロフ博士の支援を私たちは計画した。オルロフ博士は、ソ連がヘルシンキ協定を順守するのを監視するヘルシンキ委員会の指導者の一人であるが、私たちは彼とヘルシンキ委員会の両者をノーベル平和賞に推薦す

る署名を集めることにした。今までに多くの国の議員が個人、あるいは団体として推薦の署名を寄せている。

——ガリーチの葬儀

プロフスキーの訪問から二カ月後、親友アレキサンダー・ガリーチがパリで死亡した。ラジオをいじくりまわしているうちに、感電したものらしい。

西側に来てから、彼は西側の無関心と身勝手な生活態度に失望して精神的にくずれ出し、私は思いきって、二人の友情を損ねる危険を冒してできるだけ手厳しく彼を叱咤した。そして、首にかけて洗礼のときの十字架をないがしろにしていることを非難した。すぐその後、妻と私は彼を訪問し、話し合った。その結果であろうか、アレキサンダーは信仰を取り戻したようだった。

彼の人生の最後の一年は、勝利に満ちたものだった。ベルリンの壁の前で何千人ものドイツ人に希望と挑戦を与えたり、ローマで“偉大な目ざめ”の到来を予見する、と語るのを私自身見ていたのである。

ガリーチは、寒い冬の日に埋葬された。その朝、ガリーチの家へ向かうシャンゼリゼの大通りを私は深い思いに満ちて歩いた。私はロシア正教大聖堂へ向かう悲しい葬列に加わり、

アンゲリーナ・ガリーチ、マクシモフほか数人の人たちと、ひつぎにつき添う約束をした。暗い日であった。しかし、光がわかるのは、暗闇の中なのである。五年前、反体制の闘いのもっとも暗い時期のアレキサンダーとの出会い、そして、暗闇を認めることを拒むグループをサハロフのアパートで彼に紹介されたときのことを、私は次々と思いついた。何千回と打たれようと自由の精神は、新しく育っていった。クレムリンの権力者たちは、ただ死んだ思想のために生きているのだ。

ロシア正教大聖堂は、巨大な建物である。われわれが手にした何百というロウソクも高い丸天井の暗さを消しはしなかった。しかし、その明滅する光は花で飾られた棺、聖像、そして真剣なロシア人の顔を映し出していた。闘い苦しみ、そしてたとえ勝利の栄光があつた世で与えられようとも、この世では亡命でしか報いられない人びとの顔を照らしていた。

棺の脇には、マクシモフの石のような顔があつた。ガリーチの親友であり、誰よりも落胆していた。二人は申し分ないほどお互いを補いつつ合っていた。強靱な妥協を許さぬ闘士のマクシモフに対して、順応性に富み、ひらめきに満ちた攻撃の手を考え出すガリーチであつた。

私は列席した唯一の西欧人であつたかと思つたが、そうでもなかつた。私の脇には一九六八年のパリの学生反乱の指導者アンドレ・グラックスマンがロウソクを持って立っていた。彼は現在「新しい哲学者」として知られるグループに属し、マルクス主義の専横から人の考

え方を解き放つために闘っている。

葬儀ではじめて会った一人に、激しく知的な顔をした黒髪の小さな婦人がいた。最近、亡命したディナ・カミンスカヤという弁護士で、シニャフスキーとプロフスキー兩人のために勇敢な弁護をつづけてきた女性である。彼女を選んだのは、プロフスキーの母親だった。初めて彼女に会ったとき、それまでの弁護士と同じように彼女も検察側に立つのだろうと思つたのだが、すぐに「奇跡だ！」と感じたと彼はいう。母親が、正直なソ連弁護士を見つけたのだ。

二人の司祭と冠をつけた年輩の主教が、この巨大なドームの下で荘厳なバスの声で祈りを吟唱した。次いでひつぎは運び出され、大聖堂の階段の下で止まった。ビクター・ネクラエソフが挨拶をした。

詩人は安らかに横たえられたが、詩人はけっして死ぬことはない。ガリーチの最後の詩集は五日前に出版されたが、その最後のページに、彼は書いている。

「すべての詩、すべての詩集は、それが最後のものであるかのように書かれなければならない。たとえ私が詩を書き続けられるとしても、読者はこの詩集を最後のものとして考えてほしい」

一九七八年の夏は、ソ連で“同ぜぬ人びと”にとって暑い夏であった。自由の声を抑圧しようという必死の試みで、政府は公判をとおして圧力を増しはじめた。ヘルシンキで決定した人権に関する主な点を確認することすらできなかった。ベルグラード会議が終わってから、“新しいモスクワ裁判”がひき続き行なわれた。

裁判にかけられた人びとは、ソ連やその衛星国がヘルシンキ協定を順守するかどうかを監視する役目の“ヘルシンキ委員会”の人たちであった。自国の政府が署名したこの協定を支持したというだけの理由で、二十名以上が最高十五年の判決をうけた。

ソビエト委員会の指導者ユーリー・オルロフ博士が最初だった。一九七八年五月、彼は公判にかけられ、重労働と追放の判決を受けた。友人たちは法廷に入ることも許されず、ただ路上で待機していたが、法廷は体制側の人たちで埋まっていた。三十三歳の勇敢な彼の妻イリナは、法廷で彼に叫んだ。

「ユーリー、ユーリー、あきらめないで、胸をはって、いっしょにノーベル賞を受けに行きましょう」

西側の共産党を含む全世界からの抗議にもかかわらず、次に公判にかけられ判決を受けた

のは、コンピューター科学者兼ユダヤ人活動家のアナトーリー・シチャランスキーであった。間もなく反体制運動では筋金入りのベテラン、ジャーナリストのアレキサンダー・ギンスバーグは、強制労働収容所での長期刑を宣告された。すでに二度も投獄された彼は、そこで生き残れるような健康状態ではなかった。十六歳のときから、彼は人権のデモに参加していた。反ユダヤ感情がその極みにあったとき、彼の姓は母親の結婚前の姓であったユダヤ系のギンスバーグに変えられた。

彼はロシア正教のクリスチャンで、ヘルシンキ委員会での彼の特別の任務は宗教的迫害に関する報告をすることであった。ソルジェニーツィンは政治犯、宗教犯とその家族のための自分の名の基金の取扱者として彼を指名していた。彼に届いた金は、すべて銀行をとおし完全に合法的に送られていて、KGBの手入れのある前にすでに数十万ポンドを分配していた。この原稿を書いている時点で、もっとも最近に判決を受けたのは、最年少二十四歳のアレキサンダー・ポドラビーネクである。彼の責任は、ソ連における精神医薬の濫用を調べることであり、今では、アムネスティ・インターナショナルによって出版されている資料を送り出すことに成功している。

次から次へと親しい同志が判決を受けるので、サハロフは記者会見をした。彼の脇には、最近、ヘルシンキ委員会のメンバーに登録された有名な科学者が座った。すでに仕事と地位

は奪われていた人であるが、真実を追求することは止めることができない。

ソ連政府は世界に不人気を承知しながらも、なぜこうして無実の人びとを糾弾するのだろうか。自らの行動に対するすべての道義的理想主義的正当性を失い、理性を失ったとしか説明のしようがない。

心はすでに死んでいる。少し前になるが、私は共産党政治局の元軍事技術アドバイザー、イーゴリ・グラゴレフ博士の訪問を受けた。ソ連の歴史においてたった一度だけ軍事力を減らしたことがあると彼はいつていた。これはフルシチョフの時代で、彼が共産主義がその思想の力のみによって勝利できると信じたからである。

「われわれはあなたたちを葬り去る」

と彼はアメリカでいった。今日、鉄のカーテンの東で共産主義は葬り去られている。

クレムリンの老人たちは、その権力にもかかわらず、小さなアパートやシベリアの収容所にいるわずか数百人の人びとを恐れている。

1 芸術は最後の砦

ソ連の自由の闘士の多くが科学者や芸術家であることは、そのことだけで判断すれば意外なように思える。

自由のために全力を尽くしているのは、政治家や経済人、法律家や技術者ではない。こうした実際のな人の方が、物理学者や詩人よりも国を民主主義に移行させやすいし、またするだろうと想像してしまう。

ソ連で闘わなければならない相手は「虚偽」だということを、忘れてはならない。真理を模索する術をもっとも心得ているのはいったい誰だろうか、ちがった形ではあってもそれは科学者と芸術家である。したがって、この知識人が爆弾ではなく、本を手に自由の闘いにと

び込んできたのも当然といえる。

ノーベル賞の講演で、ソルジェニーツィンは、芸術家に関してもう一つの理由を挙げている。

「悪と善の行為、耐えられることと耐えられないことを識別する方法を人類のために作り出すのは誰であろうか……、ただ単に身近にあるからではなく、真に間違っていることにわれわれの怒りを向けてくれるのは誰であろうか……、宣伝、強制、そして科学的証明も役に立たないとき、幸いにもこれを伝える方法が世界に存在する。それは芸術である。文学である」

—— 個人の最後の砦

もちろん、善と悪、自由と専制、その他、人生の大問題にふれない芸術もある。芸術のほとんどが形式の美しさで印象づける純粹美学である。偉大な形式の達人マチスはかつていった、「絵とは、沈み込むようにすわり心地のよいひじ掛け椅子のようであるべきだ」

彼と同国のボナールの画面には、フランスの風景とブルジョワ家庭を描き出されているが、その中の人物はコーヒーを飲みながら新聞を読んでいたり、食事の準備をしているといった、ごく普通の生活を忙しく営んでいる市民である。こうした人たちは、世界の些細な問題については何時間でも語り合うが、人生の意義などの問題で時間をつぶすことは気が進まない。

これらフランスの芸術家に対して、東ヨーロッパの聖像画家ほど対照的なものはない。彼らの奇妙で力強い芸術は、いわゆる暗黒時代に修道院ではじまった。その目的は信仰を深めることであつた。ノルウェーのトロントハイム大聖堂にひとときわ目につく聖像がある。『濡れひげの救世主』として知られ、十字架を運ぶ汗がしたたっている。従来の芸術批評では、その不朽の力を分析することはできない。意識的な技巧はすべて捨てられた。その顔には苦しみや緊張を示すものはまったくなく、そのまま静かに真正面を向いている。色はコントラストもない単純な赤、黄、それに茶系の紫である。

聖像を作つた芸術家は誰か。われわれにはわからない。聖像は画家の個性の表現ではない。芸術家は消えている。より偉大なもののために、そこに描かれている永遠にして神秘的な神のために消えているのだ。眞の芸術家は描かれているその人、カルバリーへの途上のイエス・キリストである。

聖像の力は、それを描いた人びとの献身に由来している。彼らは元來芸術家ではなく、修道士である。その中でもっとも偉大なのは——モスクワの聖像美術館の名付け親であるラブリエフ——であるが、彼はけつして横になつて眠ることはなかった。そうすることによって、キリストの苦しみをよりよくわかるためであつた。夜になると、前にのめらないために腕の下に特別の杖をあてて腰かけたという。

それは、中世ロシアのことである。しかし、今世紀にも何かそれに匹敵するものがあるだろうか？ フランスの画家ジョルジュ・ルオーは、今日の絵書き修道士と称されている。彼はかつて「私は現代ではなく中世に属している」といった。

彼は十四歳のときに、ステンドグラスの仕事場で働きはじめ、十二世紀以来、不変の技術を身につけた。後に、彼はステンドグラスの形式を油絵に移した。彼は、長い間ふれられずにきた何かを伝えることが自分の目的であると考へた。あるとき、詩人の友だちの言葉から手掛りを得た。

「芸術は、悪は美しいと云って想像を倒錯させた力の一つである。芸術は、想像を癒す力にならねばならない。悪は醜いといわねばならない」

その生涯の前半をとおしてルオーは、罪、人類の墮落(アダムとイブの原罪)、それに悪を描いたが、人生の終わりに近づいてからは和解、許し、それに平和を描いた。

彼は、時代の流れに逆らった。そして、同年代のもっとも急進的な人びとの作品、例えば「野獣」という作品と彼のものとを並べて展示することによってこのことを明らかにした。

これとはちがったやり方ではあるが、ムンクも流れに逆らった。彼は、偽善的社会がエロチシズムを抑圧した時代に、欲のとりこになった人びとを描いた。今の流行は、信仰への願望を抑えることであればこそ、信仰を表現するルオーのような芸術が必要とされる。

私も、ささやかにそれを試みている。その年のベルゲン・フェスティバルの私の作品はそれを意図している。プログラムには、私の作品について、

「人の心をとらえ、かつ解き放す力強い力を描いた七十枚の絵」と書いてある。

モルゲンブラデット紙には、次のように評が載った。

「ベルトルト・ブレヒトとビクター・シュペラーは、今年、ベルゲン・フェスティバルで大きく取りあげられている。一人は劇作家、他は想像的な画家である。二人の繋りは興味深い。西側芸術家に共通なものは、ある理由のために燃え、芸術を武器として闘うということである。この芸術が、目的化される危険がないだろうか。ときどきないといえないが、それともたらず啓蒙に比べれば小さな代償にすぎない。

マルクス主義者のブレヒトと、キリスト教徒で自由の闘士ビクター・シュペラーとを敢えて比べるつもりはないが、両者には政治を超越した永遠の価値がある」

ブレヒトと私は、ともに芸術にかけているという点で共通点はあるが、決定的なちがいがあある。ブレヒトは、ある社会のモデルを描いて見せるが、私はそれはしない。私は、個人が一人の人間であるという権利を護ろうとしている。私が、道化師をしばしば描くのはそのためである。東においても西においてもますます制度化され、官僚化されていく世界の中で、道化師は他とちがうこと、つまり同ぜぬことを示しているからである。

われわれ芸術家は、今日の世界においては選良である。人を自由にさせる力が、われわれに与えられている。われわれを従属させようとする巨大な勢力に対して、芸術は個人の最後の砦かもしれない。

——
固く閉ざされた扉

現代ソ連では、芸術だけが、独裁へ抵抗をするため残されたもののように思えることもある。政権にとって、テロリストよりも作家の方が致命的な脅威であった。収容所の中の自由の闘士に武器が持ち込まれるとすれば、それは銃でなく、小説か詩集であろう。反体制運動が根づいたのは、バステルナーク、ソルジェニーツィン、マンデルシュタムの文章や、アンナ・アクマトワの次の詩などによって、土壌が培われたからである。

あなたは夜明けに連れ去られた

あなたの葬儀であるかのように

私は後を追った

暗い屋根裏で子供たちは泣いた

聖像の前のロウソクがゆれた

あなたの唇は聖像のように冷たい

あなたの額の死のような汗を 私はけっして忘れない

優しいドン河の流れのわきの 家の中に月光がさし込む

帽子を斜めにかぶり 人影を見る女が一人病んでいる

夫は墓に 息子は牢屋に

祈りあれ

△判 決▽

言葉が石のように落ちた

私の鼓動している胸に

予期はしていた

何とか耐え忍ぶだろう

今日もしなければならぬことが多い

最後の記憶を断ち切り 心をそっと引き出して

再び生きることを学ぶのだ

外は夏の暑い日だ

まるでお祭りのようだ

ずっと前から私は知っていた——

騒々しい日　そして空っぽの家

ひとつ　またひとつ顔をそむける——

細められたまぶたの間に　恐れのかげが現われる

苦しみのあとが顔に刻まれる——

象形文字のように

黒い巻き毛や白髪まじりの巻き毛が

突然まっ白になってしまう

抵抗をやめた唇に微笑が消える

恐怖におののく空虚な笑い

私一人のためではなく

私とともに立った人すべてのために祈る

凍てつく寒さの中で
やけつく熱さの中で
一枚のれんが壁の下

この地に私の記念碑を 建立するという考えがあったなら
私は厳粛な同意を与える

しかし岸边には させはしない

そこは私が生まれた地

海との繋りは断ち切った私だ

けっして宮殿の庭でもないように

あわれな幽霊が私を探す木の株のそば——

ここ 三百時間も私が立ち尽くしたここに立てるのだ

目の前の扉は固く閉ざされていた

——
悪にとって危険な芸術

フィンランドが、ソ連に侵略された一九三九―四〇年の冬、フィンランド人は勇敢に闘っ

ていた。そのとき、私の仲間であるフィンランドの芸術家レナート・セゲルシュトラレーは、ヘルシンキのフィンランド国立銀行の巨大なフレスク壁画を描いた。専制を許さないための代償というテーマである。

体格もいいが、それにもまして大きい心の持主として知られている大画家セゲルシュトラレーは、同国人の尊敬を長年にわたって得ていた。八十歳を過ぎてからも、十八カ月かけて完成した四十二の大きな油絵の個展を開いた。ヘルシンゲン・サノマツト紙は、それを評して「これは二つの革命——を描いている。一つは、どの国にも行きわたっている物質主義によるものと、精神的生命である」と書いた。

ウーシ・スオミス紙の若手記者は、次のように書いている。

「セゲルシュトラレーの展覧会は、懐古的ではなく、前向きである。彼は、明快なイデオロギー的立場をとっている。暗闇に対する光、悪に対する善である」

数年前、冬の戦争の戦没者墓地の近くのボルガ大聖堂に埋葬されたとき、参列者は巨大な古い建物を埋めつくした。

セゲルシュトラレーという名は「勝利の光明」を意味しているが、その名はまったく彼にふさわしい。一九四五年以降、禁止された戦闘的愛国組織のバッジのネクタイピンをいつもしていたのも彼らしかった。

「どんなに禁止されようとも、私はこのバッジをつける」と、かつて彼は私に語った。

しかし、レナート・セゲルシュトラーレのもう一つの言葉が、私の心に石のように刻まれている。

「われわれは、悪にとって危険な芸術を創造しなければならない」

2 心の革命

ソルジェニーツィンが、なぜそんなに粘り強く彼の国の自由のために働くのかと聞いたことは前にも書いたが、私はそのとき、

「信仰は、もっとも苦しんだ人びとの中から甦ると信じるからです」と答えた。

後になって、私はより完全な答えを手紙に書いた。私がいったことは真実であったが、それがすべてではなかったからである。それを語ることは、私自身について述べることになる。それは芸術家として、そして男として独立を達成するための私の闘いであり、短期に終わったノルウェー戦争と、長かった占領をとおしての体験、そして父母が私に残した少なからぬ影響などである。こうしたものすべてが、私をある結論に導いた。

後でわかったことであるが、ソ連の反体制者の多くも同じ結論を持っているのだ。それは、内面の自由は内面の確信に従ったときに得られるということである。それがどんな結果になろうとも、それに従ったとき、革命的なことが起きるのである。

—— 生い立ち

私は魚のようにもがきながら生まれ、しかも羊膜をかぶって出てきたそうである。ノルウェーでは「勝利の皮膚」として知られるので、洗礼名をビクター（勝利）という。母は、私があまり楽に人生の勝利者にならないようにと祈った。母のその祈りは、答えられた。

母がよく話してくれたことだが、二十世紀のはじめのころの建国記念日に、母は兄弟たちと町を行進する列の先頭に立っていた。スウェーデンに従属することを象徴する旗の代わりにノルウェーの国旗を手にしていた。それは許されていないことだった。母は、旗の飾りふさをつかんでノルウェー独立への献身を示したのだが、まだ小さくて手が届かなかつた。考えた彼女は飾りふさにひもを結びつけてしっかりつかんだ。

彼女は偉大な自由詩人ベルゲランドを、終生信仰していた。ある日、私が学校から戻ると家は空っぽだった。よく耳をすますと、二階から抑揚をつけた人声が聞こえるではないか。声を頼りに二階に上がって行くと、掃除半ばの母がベルゲランドの詩を泣きながら暗誦して

いた。

母の父は、ベルゲン選出の議員で、革新というレッテルをはられるには相当の勇氣を必要とした時代に、革新主義者でおした人だった。一八八〇年、祖父は議会で、自分はダーウィン主義者で、自由思想の持主だと堂々と演説したほどの人だ。当時の宗教的雰囲気に対した父に対して私の母はまた反発したのである。そして、必死になって何十年もの間、神を求め続けた。

私の父は、図書館の司書で、広い心の民主主義者で文化的な男であった。おだやかな反面、人を恐れない強さもあった。港湾労働者が、図書館内でストライキを計画して会議を開いたことがあった。共産系の一団が先に到着し、扉を閉めて他の者を入れなかった。用務員は戸を開けようとしてなぐり倒されてしまった。

父は、決然としてホールへ入り、演壇に上がった。そして男たちに向かって、まず歓迎の挨拶をし、続いて労働者にとって文学の必要性を説いたのだった。その演説は、四十五分も続いた。最後に「皆さん、皆さん全員を図書館の貸し出しにお迎えすることができたらと思います。残念ながら、家内が私を夕食に待っているので今日はこれで閉館させていただきます」

赤色派のリーダーは、仕方なく閉会を宣して全員静かに立ち去った。父は若い人びとを愛した。そして彼らが考え、語り合い、学ぶように導いた。彼の若い友

人の中には政治家になった者もいるが、社会主義者のオーヤ・リオネスもその一人である。

父は、古いベルゲンの民謡フォークソングを何千も集めて出版した。ときには自分のギターの伴奏に合わせて歌った。数ある出版の中には、母がイラストをしたものもあるが、不貞や男に捨てられた悲しみを歌ったものには、中世の地獄絵を描くのがあった。私は、これにひきつけられ絵を描きだした。

最初の試みは、何ともひどいものであった。大きな紙をふんだんに与えられたので、めちゃくちゃに描いた。たいていは複写用鉛筆を使った。唾をつけるとよく描けたが、けっして見よいものではなかった。絵は、大切に大きなルネサンス風の筆筒の抽出しにかたづけられた。私の姉妹は今でもそれを持っているが、最後の絵を入れたときに筆筒の鍵がひっかかってしまい、いまだに誰もそれを開けて見たものはいない。

私の芸術に対する興味を育むために、父は大きな美しい装幀の本を持ってきて、一言もいわずにそれを棚の上に置いた。それはノルウェー人画家エドワルド・ムンクの芸術に関する最初の大作であり、当時、彼の作品は多くの人を驚かせたものである。私は夢中でそれを研究した。自分が絵かきになるなら、ムンクのようにならう、そう思った。

そんな環境に育った私であったので、近所の労働者や職人の子供たちとつき合うのも楽ではなかった。いっしょに木切れを集めて小屋を建てたり、リンゴをとったり、下水道を探険

したりして遊んだが、父のことを右翼だといわれると黙ってはいられなくて腕力に訴えたものだった。実のところ、父は自由党に投票していた。

私が十四歳のとき、母親に画期的なことが起こった。五十歳の母は、オックスフォード・グループ（MRAの前身）の会合に行ったのだが、そこで強い信仰を見出し、以後、疑うことなくその道を邁進した。

長い間信仰を求めていたのが、やっと落ちついたのである。間もなく、母はピアニストになる勉強をしていた私の兄ワルデマーをその山の上で開かれた会合にさそった。時間を無駄にしたくないというわけで兄は楽譜をいっぱい持って行った。が、それをひもとくことがなかった。

帰ってきたとき、兄は私に「話がある」という。私は啞然とした。私たち二人は同室で暮していたが、二年間というものお互いに口をきかないという誓約書を取りかわしていた。小さいころ、兄は自分を皇帝と称し、私を奴隷と呼び、いつも私を棒で殴っていた。それが今、話をしたいだけでなく、私にあやまるというのだ。皇帝としては何とも珍しいことだった。そのとき以来、二人は真の兄弟になったのだった。

——「眠ってはならない」

当時、数多くのノルウェーの家庭がこのような体験をしていた。"チェンジする（人が変わること）"が突然広がり出した。ただし、それは悪と手を切るという代償をともなった流行であった。すべてがうまくいったわけではなく、失敗もあった。しかし新たに変わった人びとのまわりには、世界がよくなるという希望を与えてくれることがいつでも起きていた。

もっとも感動的だったことは、純粋さであった。世界をよりよくしたいと望むなら、まず、人間一人ひとりがよりよくならなければならない。神は、一人ひとりに計画を持っている。わかっている範囲で自分の生活の中から間違っていることを一掃すれば、後は神が宿り、導いてくれる。

十七歳のときに、私自身にとって決定的瞬間がおとずれた。オスロから三十マイル離れた小さな町の、小さなホールに集まっていた百人ばかりに向かって私は宣言した。

「私は、自分自身を神にゆだねます」

そのときは、この言葉がやがて私をモスクワにまで行かせるなどとは気づかなかった。

一方、マルキストであることが期待されていたオスロの芸術アカデミーで、私はこのために苦勞した。学生たちは、芸術家ハウスに槌と鎌（ソ連国旗）を見ることは"美しい"ことだと思っていた。最初の年、私が畏敬の念をもって尊敬していた花形学生が、ある日、私に唾を吐いてくってかかった。

「お前は、キリストの悪魔だ」

それはいい鍛練になった。自ら信ずることのために一人で立つことを学ばずしては、一人前の芸術家になれない。と同時に効果的に悪に立ち向かうこともできない。

私たち一家は、あらゆる奇妙な行動を行なった。一年間、私たちの小さなアパートを本部にして定期的な路上布教も行なった。路上でアル中や浮浪者を拾ってきては食べ物を与え、家に泊めて世話もした。当時、私たちと働いた学生の一人は、今日、アル中や麻薬濫用を治療する最大の組織の指導者となっている。

このことの大先鞭をつけたのは、ノルウェー議会の議長で、国際連盟総会の議長であったカール・T・ハンブロであった。一九三四年に彼は、オックスフォード・グループの会合に指導的な政治家、作家、知識人を含め友人百二十名を招待した。三、四十人も来ればと思つていたところ千二百人が参加し、感動しなかつた人はほとんどいなかった。これがノルウェーの指導者の何人かに与えた衝撃は、戦時中に決定的な成果をもたらした。

一流の詩人のアルフ・ラーセンが、後になって私に打ち明けたことは、オックスフォード・グループは、どうしようもなくナイーブだと思つた、とのことであつた。彼は、アンソロポソフィ（人智学。ルドルフ・シュタイナー（独））によって始まつたもので、人間は自我の欲望を無にして純粹な直観によって精神的靈界の秘奥にふれることが可能である、とする哲学」を信じていた。それ

にしても、彼に根強い印象を与えたものは小説家ロナルド・ハンゲンのチェンジ（人が変わったこと）であった。

ハンゲンは、ノルウェーでもっとも不愉快な男であったが、すっかり変わってしまったという。ハンゲンは、オックスフォード・グループについての最初の本『キリスト教のもたらす世界革命』をノルウェー語で書いた。

ハンゲンはそれから数年間、われわれの平和な国をナチからの脅威に目ざめさせようと努力した一人であった。一九三八年、当時ノルウェーの新しい偶像崇拜に対して、彼はデモステネスがしたように警告したのである。彼は、予言者としての報いを受けてしまった。ドイツ軍が侵入した直後、彼は捕えられた。今日、ロシアで起こっていると同じことを私が見たのは、これが最初であった。それは抑圧に対して芸術家が闘いをリードし、しかも芸術をそのために活かすということである。オーバランドも同じ仲間の作家である。

汝の旗から十字架を消して

真赤に清くかかげよ

と数年前に書いていた詩人が、ナチのかぎ十字に逆らう詩を作った。

「眠ってはならない」と彼は警告した。

この言葉は国中の合い言葉となった。ソ連で迫害される人びとに対して、今日われわれがどうあるべきかを彼の言葉が教えてくれる。当時、ナチに対して傍観的立場をとることを彼は非難した。

そうだ、私はいくらでも寛容になれるのだ

悪の手が直接私を打たないときは

——“水前線”でレジスタンス

私の家族は、平和主義者であった。兵役適齢期の私は、非戦闘要員に応募した。ヨーロッパ社会主義の伝統に生きる政府は、強い平和的傾向を持ち、防衛をおろそかにしていた。だが、労働者には少なくとも一人の例外がいた。ハッコン・リーである。

彼は、スペインの内戦から戻ったところで、それはヒトラーのヨーロッパ征服の前奏曲にすぎないことを確信していた。彼は、オスロを守る対空兵器が一つもない事実を明らかにした。彼は、スウェーデンからポッフオス砲を購入する民間基金をはじめた。だが、武器が来るより先に戦争がはじまってしまった。

ドイツ軍が一九四〇年四月九日早朝、無防備の国を急襲したとき、少なくともはっきりし

た考えを持った人が一人いた。議会が、準備不足についての徹夜の論争を続けていた朝の混乱状態の中で、カール・ハンプロは鉄道に電話を入れ、特別列車を仕立てた。彼は、王室をそれに乗せた。次いで彼は、議員たちを帰宅させ、荷物を持たせ乗車させた。列車は、侵略軍が来る直前に出発した。

列車の終着地点は、小さな町のエルベルムであった。そこで最後の議会が開かれ、ハンプロは、政府が、戦争中はノルウェー国境外から国を指揮する権限が与えられることを強調した。政府とレジスタンスと両方を合法化したこのことが、戦争を通してどれだけ大きく役立ったことかわからない。

侵略に対する私の反応は、衝動的で理屈からはかけ離れていた。わが国が、残虐にも侵され、裏切者ビドクン・リングが非合法政府の長に名乗り出た。私は、ノルウェー中央部の部隊に一兵卒として加わった。

私は兵役を、アンダルスネスの近くの病院船で務めたが、短かったが血なまぐさいものであった。最初の死体はある夜遅く、荷車に蔽いもなく寝かされ乗船させられるのを待っていた。金髪の青年で顔は蒼白で、胸は大きく切られ、傷口は絆創膏でふさがれていた。

翌日、傷ついたイギリス人の一団が到着した。激しい戦争を体験してきたロンドンっ子が、包帯姿のままぼろをまとってなだれ込んだ。足がない人は、腕で舷門をよじ登った。私の耳

にもたれかかっていた包帯に包まれた頭の持主の息は絶え、私はその死骸をかついだ。

私たちの船は赤十字マークに関係なく、爆撃された。クルップ砲の破片が四つ、私の体の一部として永久に残った。

ナチの征服者は、ただちにその目的を表明したので、真の愛国者と同調者との線はくつきりとひかれた。われわれはそれを「氷前線」と呼んだ。ノルウェー人ナチであろうが、ドイツ人ナチであろうが、そこに人が存在していないかのようにわれわれはふるまった。

ノルウェー人は、自分たちをどうしようもない個人主義者とみているが、それでも占領期間を通して完全に団結してしまった。レジスタンスの指導者からの指示には、その人の名を知らなくとも従った。「映画に行くな」と囁かれれば、行かなかった。裏切者の牧師が説教をする教会には二、三人しか集まらないのに対し、そのそばの教会はぎっしり埋まっていた。新しい教授たちが、芸術アカデミーに就任したときには、学生たちは団結して、秘密の非法アカデミーを作った。

黒ミサに参加したヒトラー

私は、レジスタンスのメンバーになった。われわれのグループには、裏切者どもに対しても同じノルウェー人に武器を向けないようにと警告したポスターをはりつける任務が与えられた。

このポスターはイギリスで印刷されたものだった。

ある晩、われわれ二人は後敵の「青年連盟本部」のガラスドアにポスターをはろうと決めた。すぐ内側に見張りがいることをどちらも気がつかなかった。突如として目をくらすような光が、われわれの顔を照らした。われわれはちりぢりに逃げた。見張りは銃弾をあげてきた。あまりに近く、あまりに素早く銃弾がかすめるので、私の体が、空間に描き出されているようだった。彼は、わざと私をそうしたのでらうか。

ちょうどそのとき市電がまわってきたので、私は飛び乗って逃げた。しばらくの間、震えがとまらなかった。膝がガクガクふるえるし、奇妙なことに舌も自由に動かすことができなかった。

占領中のあるとき、私は法務省に呼び出された。私の父が、半分ユダヤ系だという確かな証拠があるという。私の家族が無実であるということの証明は、私にかかっているという。

「無実」という言葉が私を激怒させた。大きな裏切者の^{ハスリング}バッジをつけ尋問している年とった魔女に私はどなった。

「私は罪人です。ユダヤ人であるから罪人だ。アラブ人であるから罪人だ。黒人であるから罪人だ。白人であるから罪人だ。人間であるから罪人だ」

彼女は驚いて私を見つめ、私を釈放した。ユダヤ人云々の話はこれで終わった。この出来

事で、私はあることを学んだ。それは、後にソ連でも確認することとなったことであるが、独裁主義の役人はこわもてに出ると引き下がることであって、多くの場合、もっとも安全なやり方である、ということである。

ナチズムの魔性は、おそらく他の被占領国よりもノルウェーでよく理解されたと思う。ヒトラーが精神病者であったことは認識されていたが、それだけではないことがだんだんわかってきた。若いころ、彼はウィーンでオカルト的洞察を得るため、サボテンの毒を試したり、“黒い秘密のミサ”に参加したりしていた。彼が、初めて名をあげた政党の設立メンバー四十人は、いずれも秘密結社のオカルト協会(トゥレ・ゲゼルシャフト)のメンバーでこの協会には多くのドイツ人指導者が属していた。ヒトラー自身も自分が魔力を持つと信じ、反キリストの立場に立っていた。

オスロの砦、アケルジャスは、大戦がヨーロッパで終わる一日前、九十人の男によって一戦も交えずドイツ軍から取り戻された。私もその九十人の一人であった。モーゼル銃を手に、同僚と私は司令官邸の前の警護に立った。降伏した司令官は、音楽評論家をしたことのある友好的な小柄なオーストリア人であったが、礼儀正しく進み出て住居の鍵をわれわれに手渡した。

まもなく、私は喜んで武器を置き、画家としての仕事に復帰した。最初の成功は驚くほど早くきた。私は一九四五年九月に、エロチシズムと宗教とが入り交っているオスロの展覧会でデビューした。同じ絵の中に両方が描かれていることもあったが、初日に有名な芸術収集家で金満家のロルフ・ステネルセン——エドワルド・ムンクの友人でもある——が会場の真中に立っていった。

「あれと、あれと、あれをもらう」と私の作品の中でも大きいのが三つ、彼のコレクションとなり、やがてオスロ市へ寄贈された。

流星のように早かった。道を歩いていると人が私をみとめるようになった。私は、一流の劇場喫茶に足繁く通いはじめ、ウェイターたちとも仲よくなった。ある午後、私はガラス扉を勢いよくあけて芸術家のテーブルにつき進んだ。思いもよらないことが待ちうけていた。

太った彫刻家が立ち上がり、ふらつく指で私を指し、レストラン全体にひびく声でとなり出した。

「キリストを餌に絵を描く不愉快な男がやってきたぞ。こっちへ来い。頭つきを食らわしてやる」

初めは、私も酔っ払いのたわごととしてとりあわずにいようとした。しかし、彼の言葉は私の心に沈んでいき、停まった。飲んだくれにしろ、彼のいうとおりだと私は認めざるをえなかった。

私はじっくり考えてみた。その結果、固い決心をした。たとえどうなるうとも、重要なことは偉大な芸術家になることではなく神に仕えることなのだ。

それは、代償のいる決心であった。後にソルジェニーツィンに語ったように、私は絵筆に二年間触れなかった。私はキャンパスの上ではなく、人の生活や人格の上に創造する芸術を営んだ。その芸術、あえて芸術といわしてもらえば、それなくして後にソ連の友人たちにとって私は何の役にも立たなかったであろう。

最初に私は、MRAの大会が開かれたスイスに行った。私と同じように模索している人びとの多い雰囲気の中で、世界における自分の役割は何であるかを見出したいと思った。その結果、私は多くの国に幾度となく旅するようになった。ドイツ、インド、南アフリカに、つねにチームの一員として、自分の個性を押しつけずに人びとが神とつながることを助ける、という考え方で巡歴した。

あるとき、流浪好きの友人が、私が外国を旅行するのを羨んだことがあった。

「私にそんな仕事を見つけてくれないか」と尋ねた。中世の乞食修道士とまったく同じよう

な生活、何も所有せず与えられたもので生活し、招かれたところに滞在し、アルコール、酒、女からはまったく無縁だと私が説明すると、イギリス人きどりでピカピカに磨かれた靴をはき、背広をきちんと着るところまでまねることを得意としていた彼の興味はさめた。

私の芸術家の友人たちは、私のやっていることが何だかわからなかった。ある友人がこんなことを耳にした。

「まったく残念だ。ノルウェーには、二人の実に才能豊かな芸術家がいた。一人は飲みすぎで自ら死に追いやり、もう一人はM R Aに加わってしまった」

しかし、私は運動や組織に加わったわけではなかった。私は芸術家として、否、人間としての新しい生活を見つけたのだった。人が解き放たれて、お互いを全面的にいたわりあって生きる生き方である。基本的には、無政府主義的な生き方ともいえようか。それは見えない神秘的な力——聖霊に導かれた自由な生活である。決まった職業、サラリー、命令系統などなく、誰もが心の声に従って生きる。

旅での修業

理想主義運動には発展の型がある。古いものから解放され新しく生き生きとはじまるのだが、理論と組織の鉄格子のかけで硬直し死滅してしまふ。M R Aの創始者フランク・ブック

マンは誰かがあまりにはつきりとそれを規定しようとする、首を振りながら「象も泳げれば、小羊も渡れるような湖のようなものさ」といった。

ときには、自分の理解するMRAのイデオロギーを押しつけようとする者もいた。しかし、そうした人に耐えることも学んだおかげで、個々人が自らの道を見つけるのには役立つのであった。私にとって、MRAとはいつも自分の足で立つための学舎であった。他人によりかかることなく、自我を超越した確固たる現実に行き当たるということである。

旅に過ごした何年間は、私にとってよい訓練であった。たいてい朝五時に起きて、一時間ばかり祈りと瞑想の静かな時間をもったし、夜十二時前に床につくのは稀であった。われわれはいつでも人に会う用意と、短く要領よく世界の現状と神が各人に呼びかけていることについて、話せるようにしていなければならなかった。稲妻のような早さで考え、相手が政治家だろが港湾労働者だろが、理解できる言葉を選ばなければならなかった。私は扱いやすい生徒ではなく、よく不平をいった。しかし、無私に徹した集団生活の喜びがあった。

一度はアメリカへ行った。ちょうどそのとき、後に大司教になったカトリック神学者のフルトン・シーンによる信仰についてのテレビの連続講演があった。ソ連の将来を予測する彼の見解は、私にとっては耳新しいものだった。

「ここ西側には、苦難と十字架のないキリストがある。東側には苦難と犠牲がある。信仰を

もつ権利がないまま苦しみを味わった人の方が、やがて真の信仰に戻りやすいであろう」

と彼はいった。彼の予測は当たっていた。それ以来、ソ連におけるキリスト教信仰の驚くべき開花をわれわれは見る事ができた。

フランク・ブックマンもまた、共産主義国家についてしばしば語った人である。ことに彼の親しい同志の間で。彼もフルトン・シーンと同じ考えを持っていた。ソ連の苦難の中に将来、信仰が育つ肥沃な土壌を見出すだろう、と彼はしばしば語っている。

一九四九年、彼は私たち三人にブタペストで開かれた共産主義青年祭に参加するようにいった。それは、魂をゆさぶられる体験であった。残酷な独裁を謳歌する狂気の情熱をわれわれは見たのである。真実のものなのか、演出されたものだったのか。

王室オペラハウスで、ポリシヨイ・バレエ団がドラクロワの「バリケード」と題する絵に基づいた作品を公演した。最終シーンで全員が舞台の後ろから一步一步前に進んだ。突如として先頭の女性が赤旗を掲げ、割れんばかりの声で叫んだ「スターリン」。観客全員が立ち上がり叫び返した「スターリン！ スターリン！」。続いて「ラコッシ！ ラコッシ！」。特別席のハンガリーの独裁者は立ち上がって喝采に応えた。近くの建物では、まさにそのとき、ミンズゼンテイ大司教が拷問にかけられていたことをわれわれは今知っている。

路上では、巨大なパレードが続いた。参加した一万人の「平和代表」の中には制服でかた

めた四百人の中国兵士、男女のギリシヤ人ゲリラ、東ドイツの青年たちがおり、手に手に旗をもつて参加していた。数年前のヒトラーの青年たちとほとんど区別できなかった。そのような行進は、私自身、一九三九年ミュンヘン以来見たことがなかった。

ドナウ川のほとりのこの美しい都市で、いったい全体どうして人びとはむき出しの力や独裁を支持することができるとか、私たちは問いかけてみた。どうして、自由のない定められた考え方を受け入れることができるのだろうか。国に帰ってからもしばらくショックの状態が続いた。私は、ブックマンにいった。

「あそこで起こっていることは、抵抗できるものではないと思います。世界を手中に収めてしまおうでしょう」

フランクは微笑んだ。同意などしていなかった。「スターリン」や「ラコッシ」と叫んだ同じ若者たちが自由のために闘った一九五六年のハンガリー動乱のときに、私はやっと将来への希望をもつことができるようになった。

その間に、私はオスロの荒れ果てた家の古いアトリエに戻り、画家として再び世に出ようとした。一人淋しく世の中から忘れられかけていた私は、足元をかためようと必死で働いた。

ある日、道を歩いていたら反対側にいる若い女性を見かけた。思わず道を横切って絵を描かせてくれと頼んだ。二日後、アセマリーは私のアトリエに来た。彼女はそのとき十九歳で、辛い幼年時代を過していた。自分の生いたちを語りながら、彼女はこらえ切れずにすすり泣くのだった。そして、自分を育てた人たちに対する恨みを打ち明けた。いろいろ話をしているうちに、彼女の心は開かれていった。そして、憎んでいたことが間違っていたことを悟り、その日のうちに恨んでいた人たちにあやまりの手紙を書いた。彼女の心は、憎しみの重い枷から解き放たれ自由になったが、私の心は彼女のとりことなってしまうた。

私は十三歳も年上で、財産もなく、将来の見通しもつかなかった。私の差し出した手の指にとまった小鳥を捕えるのは正しくないのではないかと、私は大人の分別を取りもどそうと必死であった。二人は別れた。しかし一年後に、カリフォルニアにいたアセマリーと文通をはじめた。

一九五五年、スタパンガーの中世に建てられた由緒ある大聖堂の現代的な窓に、新しくステンドグラスをはめる計画があつて、そのための国営のコンテストがあつた。私にとってステンドグラスは新しい分野であつたが、私はそれに取り組んだ。そしてラジオで私のデザインが一等をとつたとのニュースを聞き、私は驚くとともに、すぐさまカリフォルニアに電報を打った。「アセマリー、帰ってくれ」五日後に彼女はノルウェーに到着し、二人は結婚した。

スタパンガーは、私の人生に新しい目的を与えてくれた。つまり、私の人生の二つめの目標であった、信仰と芸術とを一つにしてくれた。それがきっかけとなって、私は二十もの宗教芸術作品の注文を受けることとなった。

ソ連芸術家との接触

一九六〇年代の後半に、私は、西ヨーロッパを旅行している十人のソ連人芸術家のグループを歓迎してくれないかと頼まれた。一行は、ノルウェー人芸術家の家を見たいと希望していた。彼らは、画家と彫刻家で、ソ連のすべての地方からとくに選ばれていた。

一行の目付役としてきていたKGBの人たちは、彼らが私の家を訪れるのに何の危惧も感じなかったのか、ホテルにとどまった。私は、客人たちに私の仕事と信仰について話した。ソルジェニーツィンのことにも言及した。私はすでに、彼の著書『イワン・デニーソヴィッチの一日』を読んでいた。それに対して、ほとんど反応は示さなかったが、それでも私の話が終わったとき、ロシア芸術についての本をくれた。しかし、西ノルウェーのヒンナにある私の最近のステンドグラス窓のことを話すと、急にみんなでそれを見に行きたかった。

ヒンナの窓には、イエスが十字架から降ろされた後の聖金曜日の夜のありさまが描かれている。十字架には誰もかかっていないが、イエスの存在がいまだに感じられた。ソ連人の訪

問のあとヒンナの牧師が私に語ってくれたところによると、一行は終日を教会で過ごし、その窓のステンドグラスが西側で見たどれよりも深い印象を与えたと話していたそうである。

間もなく、私の生涯の中で一番重要な宗教芸術の依頼をうけた。それは、北極圏から二五〇マイル北のトロムソの「北極大聖堂」の東側の窓のもので、後で私はその絵の絵葉書をモスクワに持っていったのである。

その教会は、巨大なコンクリートの三角形が、空に向かって重なりあっているのである。最後の三角形の東の窓は、まるで巨大な矢が天に突き刺さっているようであり、足元にはコンクリートのアダムとイブが、影絵のように立っている。頂上の矢の先には、これもまた巨大な手が地上に向けて開いている、神の手が再び歴史の中に戻ろうとしているのだ。そこから金色の光が三本の線になって流れる。その真中には、世界の光としてのイエスが腕を広げている。他の小さないくつかの像は、悲しみ、惨めさ、死を表わしている。それは、われわれがキリストや人間相互に負わせている業なのである。これを造りながら私が感じたことは、現在われわれの生きている時代はキリストの死後の時代ではなく、約束されている地上への回帰の前だ、ということである。

私の国ノルウェーは、巨大なソ連と接する小さな国であるばかりでなく、バレンツ海とスピッツベルゲル諸島の周辺国境線では、絶えずいろいろと両国の交渉が行なわれている。

ここからあまり遠くないコラ半島に、ソ連は世界最強といわれる海軍基地を持っているが、そこからは北大西洋の航路を完全にコントロールできるのである。小さなノルウェーとの国境が、この基地に近すぎることが帝国ソ連にとってははしゃくにさわるにちがいない。そこには、ノルウェーの攻撃のみに想定された近距離用の上陸用舟艇隊が配備されている。

拡張を続ける超大国を隣国に控えていることは、けっして心地よいものではない。しかも、生命がけで自由を守るために闘う気構えがなければ、いかにたやすくそれを失ってしまうかをノルウェーは第二次大戦中のドイツ占領から学んでいる。

したがって、ノルウェーは今日NATO軍事同盟の一翼を担うが、それよりも重要なことがある。それは、自由を正しく理解し人権をあくまで尊重することによって、たとえ国は小さくとも、帝国主義や全体主義に立ち向かう平和の中での闘い、そして、この世界のあらゆる人種、国家、民族間の和解への闘いへ参加できるということである。ノルウェーは、ソ連の西と国境を接している。東では、ソ連は日本の領土の一部を占領している。南のアフガニスタンは、ソ連の戦車で蹂躪されている。

自由に代償はつきものであり、手遅れにならないうちに代償を支払う心構えが必要である。まずなされなければならないことは、全体主義や軍国主義の奴隷にとって代わりうる現実的な民主主義を確立することである。

3 画一主義を焼きつくす炎

戦争の脅威が、再びつきまといっている。

「うまく徴兵から逃れるために何とかしなければ」

と若い芸術専攻の学生が、アフガニスタン侵入を伝える新聞から顔をあげていった。

「必要とあれば、自由は自分で守らなければならないと思わないかい」と私は尋ねた。

「アメリカ合衆国の利益のために戦うつもりはさらさらないよ」とこの学生は答えた。

正常な人は誰しも戦争に反対する。悲劇は、全体主義国家がそう思わないところにある。

ナシヨナリズム、軍国主義、ナチズム、共産主義などで操られた国家は、自国の主張が通らないときには武力で脅すほどに常軌を逸しかねない。平和主義だけでは、世界に君臨しよう

とするこうした勢力を阻むことは不可能のようである。

モスクワのオリンピックが間近になったとき、クレムリンは、五人の反体制者を収容所から釈放した。アフガニスタン進攻に先立つ一九七九年の秋のことであった。

五人のうち、アレキサンダー・ギンスバーグ、エドワルド・クズネツォフ、それにジョルジ・ピンスの三人についてはすでに本書に述べている。宗教指導者であるピンスは、収容所での苛酷な労働条件のもとで瀕死の状態にあったが、突然連れ出され、釈放を前に、体調を整え肉づきをよくするために特別の食事が与えられた。

囚人の一人は、パイロットのマーク・ディムスキッツで、ユダヤ人グループとともに飛行機を奪い、自由を求めてスウェーデンに逃避行しようとした男であった。最後の一人は、歴史家バレンティン・モロツツで、ウクライナ国とその文化的独立のための活動をしていたという罪状で十四年間投獄されていた。五人の自由の闘士たちは、アメリカ合衆国に拘留されていた二人のソ連スパイと交換された。世界中の人びとは驚きの目を見はったものだ。

根っからの「独立思考者」アレキサンダー・ギンスバーグは、アメリカ合衆国へ到着したとき、次のように述べた。

「われわれが何よりも望む社会は、画一化されたソ連ではなく個々人が人間であるような社会なのだ。こうしたことが実現すれば、やがて政治的変革をもたらすかもしれない。大切な

ことは政府を人間的にすることではなく、国民の一人ひとりを人間的にすることなのだ」

この考え方は、反体制者たちの理念をつたえるものである。彼らは権力志向の政治家にはなりえないのである。「われわれには、鉄道の駅を管理することすらできない」とマクシモフはこれを説明している。

ソ連人たち——とくに若い世代——は、すべてのものを画一化しようとするやり方にはあきたらず、素朴な道義的、精神的価値を求め出している。一九七三年十二月、モスクワのサハロフのアパートを訪れたときのことか思い出される。彼は静かな、しかしそれだけに説得力のある独特の調子で語ってくれた。

「われわれの人権キャンペーンが将来直面するであろうもっとも重要な点は、信仰の権利をいかに保障するかということだ」自らを信仰を持つ人とあえて規定しない人の言葉としては、大変意義の深い言葉である。

権力政治に立ち向かう意志

世界のいたるところで、人びとは現状にあきたらば反抗し、人間としての基本的価値と創造主としての神への道を求めている。

新しいローマ法王ヨハネ・パウロ二世が祖国ポーランドを訪問したときには、何百万もの

人びとが歓迎のため各地で集まった。自由と人間の尊厳を求める、つまるところ物質主義を排して神を求める巨大な国民投票ではなからうか。

長期にわたる植民地支配を脱却して急速に躍り出たイスラムの強力な精神的、政治的現実、これと同じほど意義深いことである。イランの西側に対する爆発的な侮辱の表明に対して、われわれは強い関心をもつのである。西側のライフスタイルの多くのもの——映画、ファッション、ポップアート、ウーマンリブ、飲酒、暴力、さらにある面では人権に対してさえ拒絶姿勢を示している。

いや、それにも増してクレムリンの中でも警鐘は打ち鳴らされている。ソ連内でイスラム教徒が多数を占めるのもけって遠い将来ではないと予測されている。その問題の兆候は、アフガニスタンに進駐したソ連軍の中のタジク人とウズベク人兵士を素早く入れ替えたことでもわかる。その理由は、兵士たちがソ連では手に入れることのできないコーランを買いあさり、大まかにいってイスラムに「染まって」しまう危険を感じたからである。

モロッコのハッサン国王は、キリスト教世界が世俗化したため、マルクス主義に応えうる福音をにぶらせてしまったことを指摘する。そして、宗教をけって政治から分離させないイスラム教からキリスト教徒は学ぶべきだと主張している。彼はクリスチャンとイスラム教徒との話し合いを提案し、またローマ法王ヨハネ・パウロ二世に最大限の尊敬を表明している。

そして法王は、偉大な指導者としての全容をかね備え、もっとも必要なときに現われたともいう。

それでは、精神主義が甦ることによって世界のシニカルな権力政治と拡大する軍国主義に終止符をうつことができるであろうか。

ペトロ・グリゴレンコ將軍が最近、キエフのウクライナにおけるヘルシンキ監視グループの代表としてノルウェーを訪れた。將軍は、ヒトラー支配のドイツとの戦争で叙勲された勇士である。戦時中、グリゴレンコ將軍の指揮下において、後により多くの勲章に輝いたのが、政治将校レオニード・ブレジネフである。もちろんブレジネフは前線に近づくことなく、後方から全軍がスターリンと党に忠誠であるかどうか監視するのが役であった。

今日、ペトロ・グリゴレンコは、クリミア系タタール人が流刑の地シベリアから故郷に戻ることを助けた業績でとくに知られている。このかどでソビエト政権はグリゴレンコを投獄し、七年間、精神病院に留置したのである。

この勇敢な真理のために闘う戦士は今日、西側にあつて自由のために立ち上がれと世界に訴えている。恐れに負けてはならない。「兎は自らを助けることができるか？」と將軍は問う。できないのだ。蛇に生まれた兎は催眠術にでもかかったように蛇の口に近づき、やがては呑み込まれてしまう。恐怖のとりことなり、恐れに身を震わせ、逃げようとはするのだ

が、悲鳴をあげながらも兎は蛇の口に近づいていく。兎には生存の希望はない。

しかし、幸いにもヨーロッパは“この兎”になることはない。マドリード会議で毅然とした態度をとることができる。ヘルシンキ協定の最終条項を調印した際、自らに課した義務をソ連に遂行させるよう説得させることができる。人権活動で投獄された活動家をただちに釈放させ、すべての政治犯に一般恩赦を与えるよう、ソ連を説得することができる。

ソ連における人権闘争の闘士は、いかなる犠牲を払っても救出されねばならない。今日、彼らが自由を得ることが明日のわれわれの自由、そして生命そのものを保障することになる。さもなければ、われわれの今の無関心が流血の動乱に悪化し、近い将来、世界の消滅ということにさえなかりかねない。たとえ最終条項が無効になる危険を冒しても、要求を最後まで貫き通す断固とした心構えが必要とされている。

現在のところ西側に何ら実質的な利益を与えず、ソ連にとって役立つとなれば、明日にも彼らによって破棄されてしまうかもしれない協定など、いったい何の役に立つのだろうか。「かような一貫性に必要な勇気を、西側政府はどこから得ることができるだろうか？ 人びとの意志によるしかない」

ソ連のアフガニスタン侵入によって、世界はデタントというバラ色の夢から目を覚まされた。アメリカへのショックはもつとも大きく真珠湾以来のものである。しかし、この侵攻は思いつきのものではない。ソ連の指導者たちはデタント、アフリカでの親善ぶり、さらにはオリンピックでの大宣伝で得たものすべてを失う賭を敢えて冒している。

ソビエト制度は不思議な悪魔的力にとりつかれており、誰にも制御できない。それは拡大し、かつ破壊せざるをえないのである。ヘルシンキ協定調印以後、新たに五百人以上の政治犯が鉄格子の陰に投げ入れられた。その中には新しいグループの囚人も混じっていた。自由な労働組合を組織しはじめた労働者たちである。一九八〇年六月、国際労働機関（ILO）がジュネーブで開会されたその日に、ソ連自由労組（SMOT）創設者のウラジーミル・ボリソフがモスクワで逮捕された。

ソビエト・ヘルシンキ監視グループ委員長ユーリー・オルロフ博士は、労働のノルマに達していないという理由で収容所でとくに罰せられた。若手数学者アナトリ・シャランスキーは健康を損なわされ、収容所からどこか未知の牢獄へと移された。そこがどこであるかは、誰にもわからない。彼をイスラエルで待ちわびている妻ですら半年も夫からの連絡がない。

ソ連反体制運動の中心的スポークスマン、サハロフは彼の憤慨と悲嘆とを力強く表わし、そのためゴリキーへ追放された。世界中からの糾弾の声をしりめに、クレムリンは、反対

派をことごとく叩きつぶして、もはや失うところはほとんどないと結論したようである。

ソルジェニーツィンや数多くの反体制者の贖罪司祭として知られ、またウラジーミル・マクシモフの洗礼をしたディミトリ・デュドコ神父はしばしば「今日のソビエトはゴルゴタ」だといっている。このロシア正教派の神父も若いころ、八年半もシベリアの収容所ですごしている。一九八〇年一月、彼は再び投獄されたが重要な幾つかの事実を友人への手紙に託すことができた。これから通りすぎなければならぬ圧力を知ってか、彼はこれが遺言として残されるようにと記した。

ロシア正教会の神父の多くが、体制に忠実な職員たちにすえかえられた。育ちつつある精神的勢力の息の根を止めようという試みだと彼はいう。信仰心の厚い神父を政権への忠実な公僕におきかえる命令はモスクワの大主教から出ており、それはソ連の主人たちに全面的服従を誓ったメトロポリット・アレンの署名入りである。

デュドコ神父は牢獄の中で、KGB員とKGBの神父によって責めたてられた。逮捕後半年にしてこの強靱な男も折れた。「三十年代」のスターリンのパージの人びとと同様にディミトリ・デュドコは告白した。しかし、そこにはちがいがあった。デュドコは教会と祖国に対して罪を犯したと述べたが、政権には触れなかった。実際、彼は聖書の言葉に従うと述べた——権威に従う。なぜなら、権威は神から与えられたから——。ソ連の歴史上初めて、

「ブラウダ」に権威は神から与えられた、と書かれた。

共産主義に信頼を失った全体主義政権が甦りつつある。キリスト教信仰を歪めて、独裁主義を強化しようとするさまがここでもみることが出来る。しかし、デュドコは必ずしもソ連内で闘いを挑んでいる教会の代表例ではない。一九七九年、勇敢なロシア正教クリスチャン二人が投獄された。グレブ・ジャクニンとレブ・レゲルソンは、一九七五年ナイロビで開かれた世界教会会議の総会に公開書簡を送った。その中で二人は、ソ連における抑圧された教会を守るための国際的運動を起こすよう訴えた。この書簡は、会議の議題にも取り上げられなかった。

しかし、炎はけっして途絶えることはない。炎をかかげる手が牢獄の扉の陰に幽閉されようとも、新しい手によって炎はかざされる。もともと、西側に逃れる反体制者にとって辛いことは、彼らが忌避した画一主義が強くはびこっているのを見ることである。

道義的な闘い

ウラジーミル・マクシモフが、ワシントンでのデタント信奉者ジョージ・ケナンと一緒に朝食をとったときのことを、次のように語っている。かつて著名であったこの政治家が、持論に凝り固まっていたのを見てマクシモフも絶望した。彼は、この混乱したアメリカ人の前

のテーブルかけに、大きな十字架を描いて朝食のテーブルを後にした。

世界は、果して理解するであろうか、闘いは政治的グループの間ではなく、善と悪との間にあることを。それは、個々人の道義的精神的な闘いなのである。ソ連の自由闘争者たちが、爆弾や銃を求めず、聖書やバステルナークの作品を求めるのはこのためである。自由を愛するすべての人がこうした人びとの体験から学び、暗黒の世界に炎をともしるときがきている。闘いが自分たちのものであることにわれわれ西側の人が気づかなければ、自由を失う日が来るかもしれない。

あるとき、ワシントンで、上院議員の何人かが、ブコフスキーに尋ねた。

「何かお助けできることがありますか」

ソ連人は答えた。

「皆さん、逆にうかがいたいことは、『私どもがあなたがたをお助けできるでしょうか』ということです」

4 内なる自由を

一九七七年に、私はテルアビブの教会の十五の大きなステンドグラス窓の製作を依頼された。最初にそこを訪れたとき、旧約聖書によると、そこがヨナが鯨に打ち上げられたところだということを考えながら海岸を歩いた。

テルアビブの古い地域で、かつてはヨッパとよばれていたジャファで、私はなめし皮屋のシモンが住み、また新約聖書のもっと有名なシモンのペテロが客人として数週間滞在したという家を探した。

小さな路地が多くて私は道に迷った。すると、ドアのところ立ち、木のボタンのついた山羊皮のコートを着た老人にじっと見つめられてるのに気がついた。私は、彼のところに行

つてたずねた。

「ペテロがいた家を知っていますか？」

「知っているかって？」彼はぶっきらぼうに答えた。

「あそこだよ」

彼は、数メートル先の青い扉を指さした。私はその人に興味をもった。彼の名もシモンであった。しかも、ロシア人である。私は、ポケットからソルジェニーツインがノルウエーにいたときの写真を取り出した。

「この人を知っていますか？」と私は聞いた。自分の目を信じられない表情で「サシャ」と彼は叫んだ。この男は、十五年間シベリアの牢獄で過ごし、そのうち数年は、ソルジェニーツインといっしょだったということだった。

「今度彼にあつたら、五ルーブルの貸しがあることを思い出させてほしい」と彼はいった。

そのシモンは私と同じように画家であることがわかり、私たちは二時間も話した。話が終わるころ、私はまたなめし皮屋のシモンの住んでいたといわれている家のことを思った。

——
ペテロに発するテーマ

『使徒行伝』に書かれていることが真実であるとする、そこの屋根こそが、普遍的な人権

と個人の尊厳の思想が生まれたところなのである。それまでは、ユダヤ人以外を卑しいとしていたペテロが、すべての人が神の慈悲を受けるのだという啓示を受け入れたのはそこなのであった。

これによって、キリスト教は全人類のものとなり、すべての人には無限の価値があることを伝道しはじめたのである。それまでは、啓示を受けたユダヤ人はユダヤ人のみを考え、啓示を受けたギリシャ人も上流階級だけを対象に考えていた。シモン・ペテロが普遍的な人権の宣言を初めてこの世にもたらしたのである。

そこから、フランス革命の「自由、平等、友愛」も、アメリカ革命の「すべての人は平等に創造された」という自明の真理を維持する」ということが出てくるのだ。そして現在、ソ連における偉大な地下運動のテーマでもある。

一九七五年、ニジヨレ・サドゥナイトという女性はリトアニアの秘密出版社で宗教文学の出版の仕事に関わっていたということで、六年間の自由剝奪を宣言された。裁判で彼女は、次のように発言した。

「ここにいる一人ひとりの皆さんに私が申しあげたいことは、私はあなたがたを自分の実の兄弟姉妹であるかのように愛し、私自身の命をあなたがたのために捧げるのを妨げるものは何もないということです。しかし今日のあなたがたは私の申し出は必要ではない。今日あな

たがたに必要なのは、はっきりと真理をのべることです。愛するものだけが警告する権利がある、という言葉があります。私は、今皆さんに向かってこの権利を行使したいと思います。われわれクリスチャンは、労働収容所や牢獄を恐れませんが、なぜなら、人びとに対するあなたとの差別や侮辱的な抑圧を糾弾することこそわれわれの義務だと思ふからです。人権のための闘いは、われわれ全員にとって聖なる義務なのです」

教会のメンバーであれ、反体制運動の知識人^{インテリ}であれ、ソ連で人権のために闘う人びとにとって、ソ連政権を転覆することを第一義の目的とすることはほとんどない。実際、彼らは暴力に訴えかけることはない。一九七四年、ソ連指導者に宛てた書簡でソルジェニーツィンは、次のようにいった。

「私は（あなたがたが望む）国外でも、（あなたがたが恐れる）国内でも、政治的動乱には反対する。流血革命はどんなときでも周りの人びとを不幸にするからである」

ソ連の人権運動家たちは、自由で民主的な社会が作られる日のために、人びとを育てることを使命と考えている。どうしたらそのような社会が実現できるかを知っているのは、自分たちの中にもどこにもいないと彼らは思っている。彼らは自らの任務を道義的なもの——つまり心と気持ちの革命だと見ている。

反体制作家アンドレイ・アマリクはいう。「人びとが自らの人間的価値の意義を知り、

自らの権利に対して立ち上がることのできる確信を与えるような考え方を持つようにしたい。そこで初めて機構も変わるのだ」

一九七七年、サハロフがテレビのインタビューで、人権運動が成功する希望でもあるかと聞かれたとき、彼は次のように答えた。

「私は人権のため闘っている人びとの活動を、具体的な意味で評価したいとは思わない。われわれはただこの闘いに参加せざるをえないからしているのだ。しかし積極的に行なわれている人権擁護の活動が、外国のラジオによって何百万の人びとに知られることは、内面の解放、心の自由を得る心理的な基盤づくりに役立つと思う。そして、真の民主的な制度を作るためにもなるのです」

彼らは、自分たちの闘いが自国の自由をもたらすかどうかは別として、この闘いは急を要する、しかも世界的規模で行なわれなければならないと考えている。東においてであろうと西においてであろうと、人間が充足した創造的な生き方を求め、しかも社会自体も正しい目標を見出すためには、人の心の内面的自由がなければならず、そのための基本的な闘いにならずさわっていると彼らは受けとめている。世界を不幸にしている多くの問題も究極的には答えを個人の中に見出さなければならぬ。

個人は、その本人にとっては世界であるともいえる。生物学的にいえば、われわれの体も個々の形をもった小さな細胞から成り立っている。不可解なものの力によって、その無数の細胞が一つの体に統合されている。どうやって各細胞がそれぞれの部署を知るのであろう。例えば、肝臓の細胞はどうしてそれとして機能しなければならぬことを知覚し、また適当の数の細胞が血液細胞に割り当てられるのだろうか。

われわれは、世界を個々人の魂で構成された精神的な体と理解することはできないだろうか。個々人の魂は、その自由意志で人間を超えるところの精神力に導かれるとき、内面的な自由が得られるとしたら、個人がこの悟りの境地を得たときに、調和のとれた精神的全体の中で独立した細胞として活動できるのではなからうか。

人類に対してロシアの亡命者たちが教えていることは、われわれがまず自分に立ちかえり、自己をみつめ、自己を超えて自由を創造できるようにすることである。

彼らにしても私にしても、すべての問いに答えを見出したというわけではないが、少なくともわれわれは歩みはじめた。われわれはそれぞれの手だてによって、過去のものとなつていく古くさい社会的通念に対して反体制者になつたのである。物質的価値観を棄て、良心と

心に宿る聖霊とに導かれる自由を得ているのである。

内面的な自由を得た人は、暗闇の一点になりうるし、その人はまた人間として得られる最高の勝利を取めたことにもなる。それは自分個人としてだけではなく、全人類に対してもいえることである。どこであろうと、喜びと力とをもたらすものである。

サイマル出版会のめざすもの

*サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。

*思えば、人類は平和のために戦争を続け、世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらしたが、情報の同時性はまた単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。

*われわれは、こうした新たな誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようと志すものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって、人間の条件を回復し、世界が平和の一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようと念願するものである。

*このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

(訳者紹介)

藤田 幸久
よした ゆきひさ

国際MRA (道徳再武装運動) 日本協会常任理事、インドシナ難民を助ける会幹事。——1950年茨城県生まれ。75年慶応義塾大学文学部哲学科卒業。在学中から一年半、国会議員の秘書を務めた後、75~77年MRA国際親善使節として、世界各地を訪問、現在に至る。

国際産業人会議の企画・運営などにも活動の場を広げ、諸外国との相互信頼づくりのための民間外交を推進している。

連絡先・12 Palace Street, London, SW1E 5JF

Japanese translation rights arranged with
the author through Japan UNI Agency, Inc.

《サイマル出版会刊行案内》

●世界と読者をつなぐ 5 つのシリーズ—

A = 理論 (Theory), B = 人間 (Human),
C = 問題 (Issues), D = 話題 (Topical),
E = 外国語 (Cross-Culture),

- サイマルの図書は、日本図書館協会選定図書になっています。
- *印は学校図書館選定図書です。
- 定価は変更される場合があります。
- お近くの書店にご注文ください。

●最新刊(Latest)—

歴史の探求 C

壮大な現代史のドラマ

セオドア・ホワイト著
堀たお子訳
上・下各 ¥ 1,600

ブックス&マガジnz C

出版に賭けた人びとの夢と冒険

常盤新平著 ¥ 1,300

C&Cは日本の知恵 C

世界に挑むコンピュータ戦略

小林宏治著 ¥ 1,300

私も原子力が怖かった C

あることの危険性・ないことの危険性

竹村健一著 ¥ 1,300

福祉国家の悩み C

流水に乗ったスウェーデン

H・ヘドバーク著
C・ベッテション著
川崎一彦訳 ¥ 1,500

湾岸諸国 C

ペルシャ湾で何が起っているか

バレイ・ヨーク著
中谷和男訳 ¥ 1,300

甦えれ、PTA D

地域に第二の学校を

伊東春雄著 ¥ 1,300

住んでみたモスクワ D

「腹の立つ国」の生活実感記

匹田軍次著 ¥ 1,300

話せるだけが英語じゃない D

学校英語の活用法

小川芳男著 ¥ 1,300

日本外交ハンドブック

重要資料・解説・年表

永野信利編著 ¥2300

日本を売り込め

私の国際人・英語修業

後藤光弥著 ¥2300

フランスの何が優秀か

日本人技術留学生が見た特質

サブテック編著 ¥2300

友好は易く理解は難し

80年代中国への透視

竹内実著 ¥2300

胸にささる中国

わが非へ熱烈歓迎の旅

若槻泰雄著 ¥2300

中国のなかのソ連

蘇俄在中國・走馬看花

高橋正著 ¥2300

オーストラリアは大丈夫か

資源大国・四つの選択

H・カーン・ベッバー著
麻生雅一郎訳 ¥2300
堀武昭

距離の暴虐

オーストラリアはいかに歴史を創ったか

G・ブレイン著
長坂寿久訳 ¥2300
小林宏

開発と自由

発展途上国の立場から

シヤトモコ著
松本重治監訳 ¥2300

ソ連のアジア政策

極東における国際関係

E・M・シューコフ他著
滝沢一郎訳上 ¥2300

私の歩んだ道

東ドイツ・国家元首の記録

エーリヒ・ホネカー著
安井栄一訳 ¥2300

シンガポールの成功

日本に学ぶ都市国家

谷沢慎一郎著 ¥2300

リーダー訓練

組織と人を活性化する

トマス・ゴードン著
近藤隆雄訳 ¥2300

住んでみたアメリカ

土と車とクレジットカード

松岡将著 ¥2300

こころの壁

日韓のひずみを描くエッセイ

金素雲著 ¥2300

霧が晴れる日

金素雲エッセイ選2

金素雲著 ¥2300

ゲレンデで考えたこと

ある哲学者のスキー讃歌

大井正著 ¥2300

鳥の目・虫の目

にんげん歳時記

石井英夫著 ¥2300

日本ほど重要な国はない

駐日アメリカ大使の日本観

マイク・
マンズフィールド著
小関哲哉訳 ¥二二〇

世界で最も厄介な仕事

国連事務総長の喜びと悩み

クルト・ワルトハイム著
昨上司訳 ¥二二〇

日本にとつてのソ連

不気味な隣人がわかる11章

森本良男著 ¥二二〇

中東で何が起きているか

世界危機震源地の分析

小山茂樹著 ¥二二〇

オリンピックの内幕

聖火は永遠か／悩みと問題

ジェラール・ミラー著
富川毅訳 ¥二二〇

電話の向うはこんな顔

電電公社・KDDの内幕

平松斉著 ¥二二〇

微笑と脅し

ソ連とつき合う法

米下院外交委員会編
木村明生訳 ¥二二〇
松島明 ¥二二〇

異文化間コミュニケーション

カルチャー・ギャップの理解

ジョン・コンドン著
近藤千恵訳 ¥二二〇

世界秩序・第三の試み

相互依存時代を考ふる

H・クリーブランド著
木田宏訳 ¥二二〇

女の論理

女性の新しい生きかた・考えかた

松原純子著 ¥二二〇

女性は消費者のみにあらず

女性の時代の経済論

菅原真理子著 ¥二二〇

アラブは偉大なり

イスラムの祖・マホメットの生涯

V・ゲオルギウ著
中谷和男訳 ¥二二〇

人質

誘拐とテロはいかに実行されたか

C・ムーアヘッド著
中谷和男訳 ¥二二〇

レオノーラ

閉ざされた心をもつ少女の物語

リチャード・
ダンプロジオ著
井坂清訳 ¥二二〇

幼児は算数を学びたがっている

親こそ最高の教師

グレン・ドーマン著
久富節子訳 ¥二二〇

絵が描ける子・描けない子

児童画教室20年の観察から

こさかおる著 ¥二二〇

芸術家の魂

日本の代表的版画家たち

室伏哲郎著 ¥二二〇

吉田ルイ子のアメリカ

イメージ・I hate but I love

写真・文
吉田ルイ子 ¥二二〇

ジヤポニチュード

フランス人が見直した日本

テイエリド・ボッセ
クリスチャン・ボラク 著
荒木 享 訳 ¥ 四〇〇

心の社会・日本

ヨーロッパは日本に何を学ぶか

ロレンツ・ストウツキ著
大串紀代子訳 ¥ 二〇〇

ユダヤ人はなぜ優秀か

その特性とユダヤ教

手島佑郎著 ¥ 二〇〇

ソ連ひとり旅

触覚がとらえた風景

黒川欣映著 ¥ 二〇〇

日系インドネシア人

元日本兵の独立戦争

柳達宏男著 ¥ 二〇〇

男性 中年 期

40歳から何ができるか

ナンシー・メイヤー著
山崎武也訳 ¥ 二〇〇

女性学入門

女性研究の新しい夜明け

富士谷あつ子編 ¥ 二〇〇

キャリアウーマン私の道

人生の充実は限りなく

税所百合子著 ¥ 六〇〇

カタカナことば

日本に帰化した外国語

深尾凱子著 ¥ 六〇〇

チトー・独自の道

スターリン主義との闘い

スボンコ
シタウプリングル著
岡崎慶興訳 ¥ 二〇〇

放 逐

アメリカが燃えた時
ウォーターゲート・ウォッチ

筑紫哲也著 ¥ 三〇〇

国際関係の将来

世界政治の弁証法

シルビユ・ブルカン著
立花誠逸訳 ¥ 四〇〇

経済体制の理論

経済人類学からのアプローチ

ジョージ・ドルトン著
太田稀喜訳 ¥ 二〇〇
栗本慎一郎

ニータメリカニテオロギ

新時代の経営思想

J・C・ロウジ著
水谷栄二
西海真澄訳 ¥ 二〇〇
後正武

コンピユータ・パワー

驚異と脅威の解明

J・ワイゼンバウム著
秋葉忠利訳 ¥ 五〇〇

脱石油時代の科学戦略

模倣から独創への体制づくり

中山太郎著 ¥ 三〇〇

人間性の心理学

精神の栄養失調現象と治療

対馬忠編著 ¥ 二五〇

世界に通用する大学

大学から高等教育へ(全5巻)④

天城 勲編 ¥ 二〇〇

東本願寺の変 C

一〇年紛争を解く

上之郷利昭著 ¥二九〇

話せない英語教師 D

語学開国をめざして

福田昇八著 ¥九六〇

日本人の自殺 A

西欧との比較

S.P.ヒッケン著
堀たお子訳 ¥二五〇

きみに愛が見えるか D

盲目の歌手の感動青春記

トム・サリバン著
柳田昌子訳 ¥二〇〇

母が泣いた日 D

交通遺児作文集③

玉井義臣編 ¥二〇〇

ソ連と中国 C

友好と敵対の歴史

O・ポリソフ著
E・コロスコフ著
滝沢一郎訳 上下各 ¥三〇〇

真実のインドネシア C

建国の指導者たち

T・アブドゥラ編
渋沢雅英訳
土屋健治訳 ¥二〇〇

インドを救う道 C

ナラヤン獄中記

H・バツシン編
伊藤雄次訳 ¥三〇〇

インド政治の解剖 C

ガンデー独裁政治への審判

K・ナイヤル著
黒沢一晃訳 ¥二〇〇

日本の天皇政治 A

宮中の役割の研究

D・A・タイタス著
大谷堅志郎訳 ¥三〇〇

弾力性社会の創造 C

21世紀のための構想

ハリソン・ブラウン著
松本重治監訳 ¥三〇〇

動きはじめた大学改革 C

大学から高等教育へ(全5巻)②

天城勲編 ¥二〇〇

テイトの大学・大衆の大学 C

大学から高等教育へ(全5巻)③

天城勲編 ¥二〇〇

マクルーハン理論 A

メディアの理解

マクルーハン他著
大前正臣訳
後藤和彦訳 ¥五〇〇

続・私も英語が話せなかつた D

同時通訳者の知恵

村松増美著 ¥二〇〇

シベリア捕虜収容所 B

ソ連と日本人

若槻泰雄著 上 ¥二〇〇
下 ¥二〇〇

インドネシアの民俗 B

民俗精神をさぐる旅

リー・クーンチョイ著
伊藤雄次訳 ¥七〇〇

障害児が生まれたら B

ドーマン理論の応用と実践

小笠原平八郎著
¥五〇〇

親子最良の医師

脳障害児治療の画期的記録

グレン・ドーマン著
幼児開発協会訳
¥二〇〇〇

ローラ、叫んでごらん

フライパンで焼かれた少女の物語

R・ダンプロジオ著
関口英男訳 ¥二〇〇〇

いのちある限り

ある脳神経外科医の記録

三輪和雄著 ¥二〇〇〇

延安日記

ソ連記者が見ていた中国革命

口・ウラジミロフ著
高橋正訳
上・下各¥二〇〇〇

草の根アメリカ

民衆のこころ・五つの顔

G・ロバーツ
D・R・ジョーンズ編
波多野裕造訳 ¥三〇〇〇

ふだん着のアメリカ

ケネディからカーターまで

岡村黎明編 ¥九〇〇

仮面のアメリカ人

日系二世の屈辱的精神遍歴

タニエル・沖本著
山岡清二訳 ¥二〇〇〇

ハーレムに生まれて

ある黒人青年の手記

クロード・ブラウン著
小松達也訳 ¥二〇〇〇

黒い性・白い性

ヘセックスからみた人種差別

グレース・ハルセル著
北詰洋一訳 ¥二〇〇〇

アウシユヴィツ収容所

所長ヘスの懺悔録

ルドルフ・ヘス著
片岡啓治訳 ¥二〇〇〇

ゲシュタポ・狂気の歴史

ナチスにおける人間の研究

J・ドラリュ著
片岡啓治訳 ¥二〇〇〇

ユダヤ人はなぜ国を創ったか

イスラエル国家誕生の記録

D・ベングリオン著
中谷和男訳 ¥二〇〇〇
入沢邦雄

血で書かれた言葉

ナチス残虐の記録

トーマス・マン序
片岡啓治編訳 ¥八〇〇

自白

ブラハ裁判煉獄記

A・ロンドン著
稲田三吉訳
上 ¥二〇〇〇 下 ¥九〇〇

長い旅

ファシズムと闘った青年の記録

R・ザングランディ著
上村忠男訳 ¥二〇〇〇

ポー・グエン・ザップ

ベトナム人民戦争の知将

レクアン著
寺内正義訳 ¥八〇〇

ベトナムの星

ホー・チ・ミン伝

J・ニクチュール著
吉田康彦訳 ¥九〇〇
伴野文夫

フランコの囚人

スペイン政治犯の獄中記

ミゲル・ガルシア著
亀井紀昭訳 ¥九〇〇
今井義典

カタリーナの失われた名譽
言論の暴力は何を生みだすか

ハインリヒ・ベル著
藤本淳雄訳 ¥230

ヴ オ ス *

オーストラリア探検家の物語

バトリック・ホワイト著
越智道雄訳
上・下各¥250

エグルティエール家の人びと

仏巨匠の連鎖小説

アンリ・トロワイヤ著
笹本孝訳 ¥1000

ボルシチの味 *

モスクワ特派員のソ連観察

永田実著 ¥250

サンバガエルの謎 *

生物学者カンメラーと遺伝論争

A・ケストラー著
石田敏子訳 ¥250

ケネデイの遺産

二人のケネデイの決定版

T・ソレンセン著
山岡清二訳 ¥250

ドゴールの最期 *

人間の苦悶とその死

J・モーリアック著
萩野弘巳訳 ¥250

フリック・ストーリー

実録・ふらんす刑事物語

ロジェ・ボルニッシュ著
萩野弘巳訳 ¥250

イスラエルから来たスパイ

秘密情報部の劇的内幕

ベン・ダン著
岡英一訳 ¥250

ジャーナリストの誕生

職業的自伝の試み

ジャン・ダンエル著
鳩嘉彦訳 ¥230

もし私が嘘をついたら *

ジル、生きた歴史を語る

フランソワーズ・著
山口昌子訳 ¥250

ヒトラー伝

①人間ヒトラー*
②政治家ヒトラー
ヒトラー研究の決定版

ヴェルナー・マラー著
黒川剛訳
① ¥200 ② ¥200

私のソルジェニーツィン *

叛逆作家と生きた30年

H・レンエトフスカヤ著
中本信幸訳 ¥1000

わがエジプト

コーランとの日々

タハ・フサイン著
田村秀治訳 ¥200

イスラエル・生か死か

戦争への道・和平への道

J・ドロジ
J・N・ギェルガン著
早良哲夫訳 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
吉田康彦著 ¥200

石 枕

韓民族の抗日・独立の記録

張俊河著
安宇植訳
上・下各¥230

金芝河・民衆の声 *

代表作と近作

金芝河著
金芝河作品集
刊行委編訳 ¥250

毛沢東の青春

その秘められた日々

シャオ・ユ一著
高橋正訳 ¥250

ソ連 100 章*

モスクワ特派員40年の観察記

H・ベルツゲン著
大塚寿一訳 ¥2100

ブレジネフ体制のソ連

テクノクラート政治の構造

中沢孝之著 ¥2100

シベリア開発構想*

ソ連の方針と現状と展望

N・ネクラソフ著
鈴木啓介訳 ¥2100

ソ連の指導者と政策

スターリン以後

W・レオンハルト著
加藤雅彦訳 ¥2100

内側からみた国連

第三世界からの批判

N・カサス著
佐藤信行訳 ¥2100

フランスの脅威

飛躍を予告分析

E・ステイルマン他著
高木良男訳 ¥2100

イギリスは甦るか

政治経済の分析と展望

D・E・ブランド
K・W・ワトキンス著
安世舟・本田弘
森尾忠憲訳 ¥2100

欧州共同体案内*

社会・機構・政策・将来

ロジャー・ブロード
R・J・ジャレット著
富岡隆夫訳 ¥2100

ヨーロッパとアメリカ*

対立関係と協力構造

カール・カイザー著
大石敏雄訳 ¥2100

ソ連から見た石油問題

石油をめぐる国際政治

ボリスラチコフ著
滝沢一郎訳 ¥2100

新しいシベリア*

希望の大地か

白井久也著 ¥2100

ベトナム秘密報告

米国防総省の歴史的記録

ニユーヨークタイムズ編
杉辺利英訳
上・下各¥2100

アメリカの軍事戦略

世界戦略転換の全体像

マイケル・クレア著
アジア太平洋訳
資料センター訳
¥2100

ニクソンのアメリカ

その歴史的病理性

松尾文夫著 ¥2100

ニクソンの精神分析

人格形成と政治の錯綜

B・マズリシュ著
岩島久夫訳 ¥2100

アメリカの政治

構造と問題

D・カレオ著
加藤雅彦訳 ¥2100

アメリカの権力構造

体質・五つの分析

坂本昭雄著 ¥2100

知られざる中東 増補版

石油経済とイスラム世界

小山茂樹著 ¥2100

狂ったサル

自滅の危機にたつ人類

A セントジゼル著
国弘正雄訳 ¥1100

紳士道と武士道

日英比較文化論

トレバー・レゲット著
¥1000

吾輩は外人である

続・人は城、人は石垣

フランク・ギブニー著
大前正臣訳 ¥1000

日本人をストツプしろ

幻の著書へジャポネ排斥論

エフィーモフ著
萩野弘巳訳 ¥1100
(翻訳出版賞受賞)

ジャポネとフランセ

パリ特派員の日仏比較観察論

倉田保雄著 ¥910

アメリカとアメリカ人

文明論的エッセイ

スタインベック著
大前正臣訳 ¥1100

ドイツで考えたこと

ある哲学者の発見

大井 正著 ¥1000

中国の旅

モラビアの「私の中国観」

A モラビア著
河島英昭訳 ¥850

饒舌と寡黙

官界30年の名エッセイ

橋口 收著 ¥910

英語の話しかた

国際英語の学習秘訣

国弘正雄著 ¥1100

誤解と理解

日本人とアメリカ人

西山 千著 ¥1100

話しことばの科学

コミュニケーションの理論

斎藤美津子著 ¥1100

きき方の理論

続・話しことばの科学

斎藤美津子著 ¥1100

ことばの世界

コミュニケーション入門

ジョン・コンドン著
斎藤美津子訳 ¥910
横山 敏子

冷たい社会・暖かい社会

契約時代の人間関係

木全 心一著 ¥1100

ソビエト・ライフ

夫婦で見たソ連の現実

高橋 正著 ¥1100
高橋 その

運命の槍

オカルティスト・ヒトラーの謎

T・レックスロフト著
堀たお子訳 ¥1100

神秘学大全

〈魔術師の朝〉邦訳

J・ポーウェル著
J・ベルジェ著
伊東守男編訳 ¥1100

保存用

THE SIMUL PRESS IDEAL

The Simul Press, Inc., was founded upon the concept of launching international publishing activities by participating with readers in forging the history of our turbulent times.

Mankind has ceaselessly waged war in pursuit of peace and divided against itself while wishing that the world were one. Scientific advances have brought about an electronic-communication era. But the very simultaneity of information availability tends to elicit identical and simplistic responses throughout the world, in turn subjecting mankind to the distress of yet new misunderstanding.

To remove the roots of conflict spawned by such misunderstanding and to enrich international qualities of Japan, once again a leader of nations, we present the raw materials, both from the past and the present, which will help identify various domestic issues as well as deepen international understanding. It is our earnest desire that through our efforts we may contribute to recovering the essential conditions of humanity and unifying all peoples as one world in peace.

May this lofty ideal to which we humbly dedicate ourselves be blessed with the support of our readers.

Simul International, Inc., our sister company, is one of Japan's most experienced professional conference organizers, offering the full range of interpretation, translation, and other services. The Simul Academy of International Communication, another affiliate, gives courses in interpreter training and English.

狂ったサル

セント・ジェルジ博士著／人類の狂気を憂慮 ¥ 二二〇〇

自白

ブラハ裁判煉獄記

A・ロンドン著／チェコ蘭清の歴史秘録 上 ¥ 五〇〇 下 ¥ 二〇〇

金芝河・民衆の声

金芝河著／烈々たる激詩集の決定訳 ¥ 九八〇

インドを救う道

バツシン編／インドの良心、ナラヤン獄中記 ¥ 二二〇〇

カタリーナの失われた名誉

H・ベル著／ノーベル賞作家の問題作 ¥ 二二〇〇

ソ連とは何か

ウエッソン著／本質と行動の文明論的分析 ¥ 二二〇〇

ソビエト・マルクス主義

マルクーゼ著／抑圧的工業社会批判 ¥ 二二〇〇

ソビエト・ライフ

高橋正・高橋その著／夫婦で見たソ連の現実 ¥ 二二〇〇

住んでみたモスクワ

匹田軍次著／腹の立つ国・ソ連の生活実感記 ¥ 二二〇〇

私のソルジェニーツイン

《叛逆》の夫と生きた30年 前夫人の回想記 ¥ 一〇〇〇

〈サイマル5つのシリーズ〉

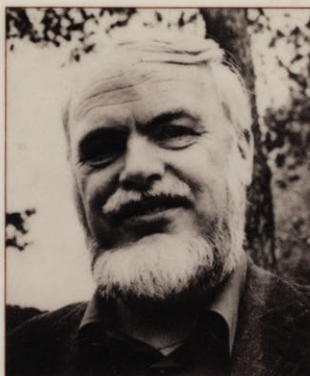
A = 理論 B = 人間 C = 問題
D = 話題 E = 外国語

(カバー背の記号と数字はシリーズ名と定価です。)

(発行日は〈売上カード〉に記載)

The flame in the darkness

VICTOR SPARRE



＊自由の実現であつたはずの社会主義革命が、自ら統制の虜となり、「自由と人権と統制の問題」は、人類史の新しい課題となつた。

＊本書は、「暗闇を呪うよりも一本のロウソクに灯を！」と自ら人権擁護運動に挺身するノルウエーの画家シュバラが、モスクワに飛び、親交を結んだサハロフら、したたかな反体制派たちの素顔を通して、自由な表現をめぐるソ連の官権との闘いを明らかにしたものである。

＊サハロフのノーベル平和賞受賞を実現させた活動をはじめ、ソルジェニーツィン、マクシモフ、ガリーチ、ブコフスキードとの数々のエピソードと、知られざる人権闘争の細部を書きつづった記録！



定価 ￥1200 <問題=C>

<0398-300529-2703>